

七隈の杜

# 七隈の杜

NANAKUMANOMORI

2015 / 第11号

2015/第11号

Vol. 11

FUKUOKA UNIVERSITY

福岡大学



「伝」今こそ、大切にしたい

福岡大学

# 建学の精神

思想堅実・穩健中正・質実剛健・積極進取



福岡大学空撮

## 教育研究の理念

「人材教育」と「人間教育」の共存  
「学部教育」と「総合教育」の共存  
「地域性」と「国際性」の共存

## 福岡大学の三つのポリシー

福岡大学は、「建学の精神」に基づいた全人教育を目標として、「教育研究の理念」に掲げる三つの共存をはかることによって、真理と自由を追求し、自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与することを使命としています。地域に密着し、地域と融合した総合大学として、コミュニケーションを大切にし、社会から信頼される人材を育成します。

### アドミッションポリシー

本学の「建学の精神」を理解した、次のような人たちを広く国内外から受け入れます。

1. 考え方がしっかりしており独断や偏見にとらわれない生き方を求める人
2. 温和で包容力がありバランス感覚に優れた能力を身につけたい人
3. 誠実で責任感が強く何事にも屈しない人生をめざす人
4. 新しいこと、困難なことに自ら進んで取り組んで行こうとする人

### カリキュラムポリシー

本学の「教育研究の理念」に基づき、すべての学生に提供する「共通教育科目」と、各学部学科に設置する「専門教育科目」の二つを大きな柱とし、それぞれの学部学科の教育目標にあわせたカリキュラムを編成します。また、正課外教育においても、充実した各種教育プログラムを展開し、全教職員で本学学生の人間的成長を支援し、全人教育を実現します。

1. 全学に提供する共通教育科目をとおして、専門性にとらわれない幅広い視野と豊かな人間性を持つ人材を育成
2. 各学部学科が設置する専門教育科目をとおして、専門的な知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成
3. 様々な教育プログラムをとおして、国際性と地域性を兼ね備えた21世紀に通用する人材を育成

### ディプロマポリシー

本学の教育課程においては、厳格な成績評価を行い、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. 修得した知識・技能・態度により、自らが発見した新たな課題を解決する力
2. 職業生活、社会生活に必要な知的活動を支えるコミュニケーション能力や論理的思考力
3. 自律しながらも他者と協調して行動でき、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

# 七隈の杜 第11号／2015年

## 目次

建学の精神  
福岡大学の三つのポリシー  
目次

### 今日のギャラリー

中村琢二「西伊豆の漁村」について 植野健造 4

### 学長室から

シュンペーターから学ぶ 衛藤卓也 6

### 特集

伝えることの意義について  
-大学ガバナンスと内部統制の視点から- 畠田公明 11  
「鬼」と伝統文化 白川琢磨 18  
川柳における「伝」-今を未来に- 梅崎流青 29  
集団で求められるコミュニケーション能力 池田浩 36

### 随筆

私たちの生活を支える「交通×情報」 辰巳浩 42  
へびの毒について<sup>2</sup>  
～福大の毒へび女<sup>2</sup>からのメッセージ～ 塩井成留実 47  
「学んで予防！《福大病院健康セミナー》を開催して 金森勝俊 57

### 地域ネット推進センターだより

地域のスポーツ学習支援活動 田場昭一郎 67

### 国際交流

日本での10年間を振り返って 于 暁 爽 72  
有缘千里来相会 三田村 康 夏 76

### 福岡大学インフォメーション

学校適応支援教室「ゆとりあ」の取り組み 松永邦裕 80

### 読書の窓

私たちのメッセージ キリエ 85

### 2014年グッドデザイン賞受賞

私たちの卒業制作は、警固公園（2014年グッドデザイン賞受賞）です 89

### みんなの広場

グローバル人材育成推進事業「海外短期教育研修」を終えて  
-講義での伝え方- 桧垣伸次 91  
厚生労働大臣表彰を受賞して 花田輝代 97  
伝統の応援団復活への想い 藤田大輝 103  
継続は力なり 佐藤紀子 108  
「伝える」と「伝わる」の違い 藤吉洋輔 112  
懐かしさに隠れた真実 吉年由加里 116  
拝啓 未来の自分 細野磨希 118

福岡大学所蔵美術名作展 121  
外部評価 134  
福岡大学校歌 135  
情報発信 136

## 今日のギャラリー



中村琢二「西伊豆の漁村」

制作年不詳

油彩・カンヴァス、額装、116.7×90.9cm 50号F

右下に署名：琢

福岡大学所蔵（福岡大学同窓会社団法人有信会寄贈）

本作品は、2012年3月に福岡大学同窓会の社団法人有信会より寄贈されたものである。作品に年記がなく制作年が明らかでないが、画風と「琢」という署名の書き方から、1960年代以降1988年に亡くなるまでの間の制作になるものと推察される。本作品には、中村琢二らしい穏やかかつ大胆な画風の特徴がよく示されている。近景から中景の漁村の家並みを濃く太い青色の輪郭線で描きつつ、やや薄い青色でほぼ一様に塗りつぶし、遠景の海の黄色と色分け対照させている。遠景の適所に描かれた埠頭、灯台、そして水平線が構図上の遠近感を破綻なくまとめる役割を果たしている。画面を支配する静けさが一日のうちのいつの時間を描写したものか、なかなか判断がつきにくい、いかがであろうか。

## 中村琢二「西伊豆の漁村」について

人文学部文化学科教授 植野 健造

中村琢二（1897–1983）は、父親が鉱山技術者であった関係で佐渡に生まれる。洋画家の中村研一は実兄。1906年より福岡県宗像の祖父母のもとで育つ。県立中学修猷館在学中に兄・研一や児島善三郎らが結成した絵画同好会「パレット会」に参加して絵画に傾倒してゆく。1924年東京帝国大学経済学部を卒業。その後、フランス留学から帰国した兄・研一の勧めで画家を志し、1930年の第17回二科展で初入選、同年から安井曾太郎に師事する。1937年一水会の創立に参加、1942年同会会員となる。1941年第4回文部省美術展覧会で特選を受賞。1981年日本芸術院会員、1982年日展顧問など画壇の要職を歴任した。

本作品には年記がなく制作年を明らかにできない。絵の裏面に「西伊豆の漁村」「中村琢二」という書き込みがある。中村琢二は、美術雑誌『アトリエ』第641号、1980年7月における特集「画家の選んだ日本の写生地」に、「私の好きな写生地」という一文を寄せ、南信州の高遠、尾道とともに西伊豆の安良里（現在の静岡県賀茂郡西伊豆町安良里 [あたり]）を、好きな写生地にあげている。同地にはおもに冬期に滞在したようである。

東京帝国大学で経済学を学んだ後に画家を志し、安井曾太郎に師事した中村琢二の画風は、東京美術学校を卒業し、フランス留学も果たした実兄・中村研一の写実的な画風とはかなり異なり、兄弟の画風の相違比較自体が興味深い。中村琢二の画風は、穏やかな主題と作風、明快で時に大胆な構図、軽妙な筆触を特色とする。本作品でも、穏やかかつ大胆な画風の特徴がよく示されている。近景から中景の漁村の家並みを濃く太い青色の輪郭線で描きつつ、やや薄い青色でほぼ一様に塗りつぶし、遠景の海の黄色と色分け対照させている。遠景の適所に描かれた埠頭、灯台、そして水平線が構図上の遠近感を破綻なくまとめる役割を果たしている。

植野 健造（うえの けんぞう）

1960年生まれ。福岡大学人文学部教授。石橋財団石橋美術館に25年間学芸員として勤めた後2011年より現職。研究テーマは、日本近代美術史、博物館学。

## シュンペーターから学ぶ

学長 衛藤 卓也

### 1. ノーベル物理学賞とイノベーション

2014年10月、2014年度のノーベル物理学賞に日本の3人の研究者が選ばれた(2014年12月10日、スウェーデンのストックホルムにて授賞式)。赤崎勇・名城大学教授、天野浩・名古屋大学教授、中村修二・米カリフォルニア大学教授の三氏である。省電力で青色に光る青色発光ダイオード(LED)を発明し、それを普及させた独創的な功績が評価されたものであり、日本の物理学の水準の高さを示すものである。ノーベル賞選考委員会は、「20世紀は白熱電球が照らし、21世紀はLEDに照らされるであろう」と高く評価したのである(『日本経済新聞』2014年10月8日朝刊)。

三氏は、今回のテーマに対して基礎研究から実用化・製品化まで世界をリードしてきたのであり、生活に密着した実用的な発明を成し遂げたのである。また、三氏の功績は、省エネ社会の実現、および地球温暖化など環境問題の解決にも結び付く世界的貢献であるといわれている。さらに、LEDには、今後も一層の高性能化・効率化が必要であり、それを期待することができるといわれている。

いずれにせよ、LEDはエジソン以来の照明革命をもたらしたわけで、三氏の独創的研究成果は、世界規模の技術革新、すなわち「イノベーション」(innovation)を巻き起こしたことになる。

### 2. 交通手段の発達とイノベーション

19世紀から20世紀にかけての約200年間で、交通手段は人類史上かつてない画期的な発達を遂げた。ワットの蒸気機関の開発は、18世紀後半のイギリス産業革命の推進力となるとともに、鉄道の蒸気機関車(SL)に応用され、ステイブ

ンソン(イギリス)が製作したSL「ロコモーション号」は、1825年に「ストックトン・ダーリントン鉄道」に初めて採用された。この鉄道は、旅客は馬が牽引する馬車鉄道方式で、貨物(石炭)だけをSLが牽引するといった変則的な鉄道であった。

その後の1830年、同じく、ステイブソン親子が製作したSL「ロケット号」の採用により、「リバプール・マンチェスター鉄道」が世界で最初の本格的鉄道として開通したのである。複線の線路を使って旅客と貨物の両方を輸送する営業用鉄道として華々しく開通したのである。以後、イギリスで次々と鉄道が建設されていき、イギリス全土に鉄道網が形成されることになるのである。

次に、19世紀の世界を変えたもう一方の交通手段が、蒸気船である。蒸気船の父と呼ばれるフルトン(アメリカ)は、1807年、ニューヨークに注ぐハドソン川で「クラモント号」を使い、ニューヨーク～オールバニ間で営業運転を開始した。ワットの蒸気機関が積まれ、船側に付けた外輪を回して推進する外輪船であった。19世紀は、波が少なく浅い河川を航行可能な外輪蒸気船がアメリカの河川や湖・運河を支配した時代である。

続いて、19世紀後半の1886年、2人のドイツ人、ダイムラーとベンツがガソリン・エンジンを使ったガソリン自動車を同時に開発した。ダイムラーの1号自動車は4輪の自動車、馬車型ボディ、ベンツの1号自動車は3輪の自動車、自転車型ボディであった。ガソリン自動車はヨーロッパ各地に広まっていくが、アメリカでもフォード(アメリカ)がガソリン自動車の時代を切り開く代表的存在となった。

さらに、ライト兄弟(アメリカ)は、1903年、ノースカロライナ州キティホークの海岸で「フライヤー号」という名前の飛行機を飛ばし、世界で初めての快挙を成し遂げた。ライト兄弟は、もともとオハイオ州で自転車店を営んでいたが、その傍ら飛行機の研究に心血を注ぎ、ひたすら研究・実験を重ね、その執念の結晶が「フライヤー号」として結実したのである。

以上のように、過去200年の交通手段の飛躍的発達、画期的な技術革新・イノベーションに起因するのであり、そこでの革新の担い手は少数に限られた人物であった。もちろん、鉄道を例にとれば、鉄道の出現後もさらに技術的改良が加えられていくことになり、これも耐えざる技術革新のたまものであり、そこには、特定の個人の力および集団・組織の力が結集されているといえる。

### 3. 資本主義の発展とイノベーション—シュンペーターの主張

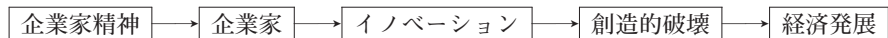
20世紀を代表する偉大な経済学者、シュンペーター (Schumpeter, 1883~1950、オーストリア生まれ) は、資本主義社会の経済発展のメカニズムを明らかにし、主張した泰斗である。20世紀の初期、20代で2冊の注目すべき著書を刊行した俊秀である。同時代の著名な経済学者、ケインズと並び称されるが、ケインズの方が広く知られたポピュラーな存在である。

一方、資本主義崩壊論を主張した経済学者・思想家として誰もが知っている歴史的人物として、『資本論』(1887)を著したマルクス (Marx, 1818~1883、ドイツ生まれ) が挙げられる。

シュンペーターも、マルクスと同じく資本主義崩壊論を展開した経済学者として有名である。同じ考え方・思想基盤を持つわけであるが、他方で、崩壊の理由付けにおいて両者の意見は異なるのである。つまり、マルクスは、資本主義は経済的に失敗することによって崩壊の道を歩むと主張したのに対し、シュンペーターは、資本主義は経済的に成功することによって崩壊する(裏を返せば、経済的要因以外の要因によって崩壊する)と主張したのである。マルクスでは、資本主義は肉体的な病によって、シュンペーターでは資本主義は精神的な病によって死に至るようなものである(伊東光晴・根井雅弘『シュンペーター』、岩波書店、1993年、155-162頁)。

シュンペーターは、資本主義が崩壊する前の段階では、経済的には発展し成功すると説き、その成功の原動力となるのが、革新・イノベーションであると主張したことで有名である。それ故、革新・イノベーションといえば、必然的にシュンペーターの名前が出てくるわけである。

そこで、資本主義経済発展の論理図式を簡潔に示してみよう。それは、図式の右側(の矢印)から左側の方向にさかのぼれば認識することができる。すなわち、①経済発展は企業家の創造的破壊によって引き起こされる、②創造的破壊(creative destruction)はイノベーションによって推進される、③イノベーションは少数の企業家によって実行される、④少数の企業家は企業家精神(アントレプレナーシップ、entrepreneurship)に富む人たちである。



こうして、シュンペーターは革新・イノベーションの重要性を指摘したわけで

あり、それは、現在にも通用する普遍的な考え方である。ここで、彼が考えたイノベーションの意味について述べておきたい。前述した「1. ノーベル物理学賞」および「2. 交通手段の発達」の箇所ですべて述べたイノベーションは、画期的・革新的な技術の開発という意味であり、技術革新のことを指している。イノベーションといえば、技術革新という意味で通常使ったとしても間違いではない。しかし、シュンペーターは、イノベーションを広い意味で使っており、新製品の開発、新市場(販路)の創出、新しい生産方法の導入、原料などの新しい供給源の確保、新しい組織の採用、など幅広い内容を含んでいる。彼が重視したイノベーションは、広い意味合いを持ったものであり、技術革新は「革新」の一つである。しかし再度述べておきたいことは、シュンペーターが「資本主義のエトスは、企業家の技術革新による動的な発展過程である」(前掲書、8頁)と考えたように、技術革新が大きな重要性を持つことである。

### 4. シュンペーターから学ぶ

シュンペーターによれば、イノベーションの担い手は少数の企業家であり、彼らは知力・才覚と精神・心構えの両面においてハイレベルの人物である。彼らは企業家精神に富むわけであるが、それはいったいどのような精神・心構えを指すのであろうか? その精神的特性について日常的な用語でいくつか抽出し、一つ一つの精神論として参考になれば幸いである。

#### ① 夢

大きな夢、自分に実現できそうな夢や目標が描かれていることである。私たちの夢は、通常、大きなものから小さなもの、不変的なものから可変的なものなど多様に混在して存在するが、常に夢を描き続けることが私たちの大きな精神的モチベーションとなるのである。

#### ② 強い意志

強い意志と熱意、不屈の精神力とチャレンジ精神が働いていることである。思う目標や課題に立ち向かい挑戦するとき、通常は相当なエネルギー・苦労と時間を要するが、そこには、強い意志と熱意が大切な精神基盤として不可欠となる。強い意志と心構えを持てば、道は開かれるということである(Where there is a will, there is a way)。

特 集

# 伝えることの意義について

## —大学ガバナンスと内部統制の視点から—

副学長 畠田 公明

### ③ 忍耐力

課題に立ち向かい、困難を克服する強い忍耐力が内在していることである。私たちは、何かに挑戦したり取り組むとき、大抵はさまざまなハードルや困難に直面し、しばしば挫折や失敗を経験することがある。しかし、それらに耐え抜き(自分に)負けない精神力、つまり忍耐力を身に付けることは、私たちが心掛けるべき大切なポイントである。

「学問には平坦な大道はありません。学問の険しい坂道をよじのぼる労苦をいとわない者だけにその明るい頂上にたどりつく見込みがあるのです」(マルクス)。

### ④ 努力

夢を持ってそれを実現させるために一途な努力を重ねていることである。私たちに、何をするにしても不断の努力が欠かせない。一生懸命に努力するという行動には、強い意志、忍耐力や抑制力、集中力などの精神力が欠かせないが、そのような中で努力することが、素晴らしい生き方につながるであろう。

アメリカの自動車メーカーでビッグ・スリーの一つ、クライスラー社の元会長・アイアコッカ氏の言葉が印象的である。「努力するのだ。砥石といしに鼻こすり付けても努力する根性があるなら、自由な社会の中では、驚くほど確実に、自分の到達したいところまで行ける」。

衛藤 卓也 (えとう たくや)  
1945年生まれ。福岡大学長。専門は交通経済論・交通政策。現在、一般社団法人日本私立大学連盟理事、日本交通学会理事や公益事業学会理事等を兼任。

### 1 はじめに

学校教育法の一部を改正する法律が制定され平成27年4月1日から施行されますが、この改正法の趣旨は、大学運営における学長のリーダーシップ確立などのガバナンス改革を促進するため、副学長・教授会などの職や組織の規定を見直すことを図るための措置を講ずるものです。学校法人福岡大学は、現在、その趣旨に従って、本学における学内規程の見直しの作業を行っています。

そこで、本稿は『七隈の杜』の今号テーマである「伝」について、大学ガバナンスと内部統制の視点から考察してみたいと思います。ここでいわれているガバナンスとはそもそも何を意味しているのか、ガバナンスは学長のリーダーシップとどのように関係するのか、さらにはガバナンスと内部統制はどのように関連するのかを、可能な限り簡潔に整理した上で、「伝える」ことの意義について述べることにします。

### 2 大学のガバナンス

#### (1) ガバナンスの意味

福岡大学は、私立学校ではありますが、学校法人福岡大学ともいわれます。学校法人とは、私立学校の設置を目的として私立学校法(昭和24年法律第270号)の定めるところにより設立される法人(同法第3条)をいいます。学校法人は、税法上、明文で公益法人等に分類されます(法人税法第2条6号、別表第二)。ちなみに、国立大学法人とは、国立大学を設置することを目的として、国立大学法人法(平成15年法律第112号)の定めるところにより設立される法人(同法第2条1項)をいいます。なお、公立大学法人は、地方独立行政法人法(平成15年法律第118号)の定めるところにより地方公共団体が設置する地方独立行政法人のうち、一般地

方独立行政法人で大学または大学および高等専門学校の設置および管理を行うものです（同法第68条）。本稿では、私立学校を設置する学校法人のガバナンスを中心に検討します。

企業経営の分野においては、従来、コーポレート・ガバナンス（訳語として企業統治や会社運営など）ということが一般的にいわれてきました。しかし、コーポレート・ガバナンスの意味については曖昧で、論者により多義・多様に用いられており、客観的で統一された定義があるというわけではありません。今日、世界中の先進国で課題とされているのは、会社（特に大会社）の効率的な経営組織と経営者に対する効果的な監督・監査組織であり、わが国では特にバブル経済の崩壊後に相次いで発覚した企業不祥事を防止するためのコーポレート・ガバナンスがかつて盛んに論議されました。

大学の分野においても、近時、ガバナンスという用語が盛んに使われるようになりました。前記のコーポレート・ガバナンスで行われている論議に倣って、学校法人におけるガバナンスを考えますと、学校法人の効率的な経営組織と経営者に対する効果的な監督・監査組織と言うことができます。

## （2）学校法人のガバナンスの仕組み

学校法人の最高意思決定機関と位置付けられるものは合議制機関である理事会であり、理事5人以上からなる理事会は、学校法人の業務を決し、理事の業務の執行を監督します（私立学校法第35条1項・第36条2項）。理事長は、学校法人を代表し、その業務を総理するとともに（私立学校法第37条1項）、理事会の議長となります（私立学校法第36条4項）。また、理事長を除く理事は、寄附行為の定めるところにより、学校法人を代表し、理事長を補佐して学校法人の業務を掌理します（私立学校法第37条2項）。すなわち、学校法人の業務は、理事会において決定され、その意思が理事長および他の理事等に伝えられ、その決定に従い代表権を有する理事長等が業務を執行することとされており、私立学校法において意思決定機関と業務の執行機関が明確に区別されていることが分かります。

また、学校法人には、監事2人以上を置かなければなりません（私立学校法第35条1項）。監事は、学校法人の業務の監査および財産の状況を監査し、その監査報告書を理事会および評議員会へ提出し、不正行為または法令等に違反する重大な事実がある場合にはこれを所轄庁に報告し、または理事会および評議員会に

報告し、さらに学校法人の業務または財産の状況について理事会に出席して意見を述べることができます（私立学校法第37条3項）。ここにおいても、理事会等へ法令違反等の重大な事実や学校法人の業務または財産の状況を伝える、という監事の職務が、明確に規定されています。

さらに、学校法人には、学校法人の運営に関する重要な事項についての諮問機関と位置付けられるものとして、評議員会が置かれ、理事の定数の2倍以上の定数で組織されます（私立学校法第41条1項2項）。評議員会は、学校法人の職員、卒業生、その他の寄附行為の定めるところによる者が評議員に選任されます（私立学校法第44条）。評議員会は、予算事項や事業計画、寄附行為の変更、合併、解散等の重要事項については、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならないとされています（私立学校法第42条）。

以上が、学校法人の管理運営制度の概要ですが、この学校法人の下に、私立学校（大学、小・中・高等学校等）が設置・運営されます。大学の学長は、学校法人の理事として経営に参画します（私立学校法第38条1項1号・2項）。これにより、大学における経営側（理事長）と教学側（学長）が十分にコミュニケーションを取ることができるようになります。

ちなみに、国立大学法人のガバナンスの仕組みでは、学長は、国立大学法人の長として法人を代表し、その業務を総理（学校法人の理事長に相当）すると同時に、大学の校務をつかさどり、所属職員を統督する大学の学長（学校教育法第92条3項）としての性格を有します（国立大学法人法11条1項）。また、予算の作成、重要な組織の改廃その他の重要事項を審議する役員会（学長・理事で構成、同法第11条2項）、経営に関する重要事項を審議する経営協議会（学内者と学外者で構成、同法第20条）、および教育に関する重要事項を審議する教育研究評議会（学内者の代表者で構成、同法第21条）、という合議制の審議機関が法定され、意思決定プロセスの透明性確保や、適正な意思決定の担保といった観点から、大学運営上の特に重要な案件について審議されます。また、監事が2人置かれます（同法第10条1項）。公立大学法人も、国立大学法人と類似したガバナンスの仕組みがとられています（地方独立行政法人法第71条参照）。

## 3 学長のリーダーシップと教授会等の関係

今回の学校教育法の一部を改正する法律の眼目は、大学が人材育成・イノベー



ションの拠点として教育研究機能を最大限に発揮していくためには、学長のリーダーシップの下で戦略的に大学を運営できるガバナンス体制を構築することが重要であるとする立場から、大学運営における学長のリーダーシップの確立の促進と、副学長・教授会等の職や組織の規定を見直すことにあります（文部科学省「学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律及び学校教育法施行規則及び国立大学法人法施行規則の一部を改正する省令について（通知）」平成26年8月29日参照）。

#### （1）副学長の職務

今回の改正法は、副学長の職務を「学長の職務を助ける」から「学長を助け、命を受けて校務をつかさどる」に改めました（学校教育法第92条4項）。これは、学長の補佐体制を強化するため、学長の指示を受けた範囲において、副学長が自らの権限で校務を処理することを可能にすることで、より円滑かつ柔軟な大学運営を可能にするためであります。

#### （2）教授会の役割の明確化

教授会の役割は、「重要な事項を審議する」から、次のように改正されました。すなわち、教育研究に関する重要な事項で教授会の意見を聴くことが必要であると学長が定めるものについて、学長が決定を行うに当たり「意見を述べるものとする」と改められました（学校教育法第93条2項）。これは、教授会は教育研究に関する事項について審議する機関であり、また、決定権者である学長に対して、教授会が意見を述べる関係にあることを明確化するためであります。また、教授会は、学長および学部長その他の組織の長（以下「学長等」という）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、および学長等の求めに応じ、意見を述べるができる旨の規定がなされました（学校教育法第93条3項）。これらの規定を通して、円滑な大学運営を図るという観点から、学長と教授会が適切な役割を果たし、相互に伝え合って、意思疎通を図っていくことが求められます。

### 4 大学ガバナンスと内部統制の関係

大学におけるガバナンスとは、前述のように、学校法人の効率的な経営組織と経営者に対する効果的な監督・監査組織を意味するといえます。このようなガバナンスの実効性を確保するためには、適切かつ効率的な内部統制を構

築することが必要不可欠といえます。このように、内部統制は、大学の経営者が組織を規律するために自主的に設定した仕組みであります。

内部統制には、一般的に、①業務の有効性および効率性、②財務報告の信頼性、③事業活動に関わる法令等の遵守（いわゆるコンプライアンス）、④資産の保全、という四つの目的が挙げられます。これらの目的は、お互いに独立して存在するものではなく、相互に密接に関連しています。また、内部統制の目的を達成するために必要とされる内部統制の構成部分として、①統制環境、②リスクの評価と対応、③統制活動、④情報と伝達、⑤モニタリング、⑥ITへの対応、という六つの基本的要素が挙げられます。これらの基本的要素も、相互に結び付いて、内部統制全体を実効的なものにします（企業会計審議会「財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準」平成23年3月30日改訂参照）。

内部統制の基本的要素の中で、統制環境とは、組織が有する誠実性・倫理観、経営者の意向・姿勢、経営方針・経営戦略、組織構造・慣行などのような、組織の気風を形作ったさまざまな要因とすることができます。これは、他の基本的要素の基盤となる最も重要な基本的要素であるといえます。リスクの評価と対応とは、自然災害、競争の激化、不正行為の発生、個人情報流出などのような、組織目標の達成を阻害する要因を、リスクとして識別・分析および評価し、当該リスクへの適切な対応を行う一連のプロセスをいいます。統制活動とは、全学的な組織規程、職務権限規程、個々の業務手順を示した業務マニュアルなどのような、経営者の命令および指示が適切に実行されることを確保するために定める方針および手続きをいいます。モニタリングとは、内部統制が有効に機能しているかどうかを継続的に監視・チェックして評価および是正するプロセスをいいます。IT（情報技術）への対応とは、組織目標を達成するためにあらかじめ適切な方針および手続きを定め、ITの利用状況を把握した上で、業務の実施においてITに対して適切に対応して、ITを有効かつ効率的に利用することをいいます。

### 5 大学において伝えること

大学において伝えることの意義については、これまでの大学ガバナンスと内部統制の説明において述べたところで折りに触れて少しだけ言及してきましたが、最後に、今号のテーマである「伝」についてまとめてみたいと思います。

前記の内部統制の基本的要素の中の一つである情報の伝達とは、まず、経営上

必要な情報が適切かつ適時に取捨選択され、次に、収集された組織内外の必要な情報が適切に流れる仕組み（情報システム）の中に取り入れられ、さらに、その把握された情報は目的に応じて分類・整理・選択などの処理がなされます。そして、最終的に、大学内外および関係者相互に正しく伝えられることを確保することです。また、その伝達によって必要な情報が関係者に共有されることは、重要なことでもあります。

例えば、新たに策定された経営方針の内容が学内に正しく伝えられて理解されなければ、学内の業務が混乱します。他方、学内の業務上のミスや不正行為・法令違反等が発生した場合に、このような情報が経営者に迅速かつ正確に伝えられなければ、そのような事故・事件に対して適切な経営判断や対処ができなくなります。経営者はそのようなことを知らなかったでは済まされず、さらには、その情報が新聞紙やテレビのニュースで流されたときは、大学の信用や名誉が著しく損なわれます。

また、近年、組織内の法令違反等の問題が生じている場合に、それを知る組織内の構成員からの情報を吸い上げる仕組みとして、内部者通報制度を導入する学校法人が多くなっています。本学も、公益通報者保護法（平成16年法律第122号）に倣って「学校法人福岡大学公益通報に関する規程」を制定しています。これにより、本学内に埋もれている法令違反行為の事実を本学の職員が相談・通報という形で伝えることができる仕組みを定め、また、通報者に対する不利益取扱いの禁止規定も設けています。これにより、本学の信用や名誉が損なわれることが、一定の程度、防止ないし軽減され得ることが期待されます。

さらに、今日では、文部科学省をはじめ国・地方公共団体の監督機関その他の外部団体等に対する情報や開示等が求められることがあります。公益性・公共性を有する大学は、このように国等から要求される場合だけでなく、もっと前向きに教育研究の情報や財務情報を可能な限り開示して、正確な情報を広く社会に伝える姿勢をとることが重要であります。このように可能な限り情報公開を進めることによって、大学およびその経営者は社会に対する説明責任を常に意識することになって、その経営を規律し、ひいては大学のガバナンスの向上に繋がることとなります。

畠田 公明（はただ こうめい）

1953年生まれ。福岡大学副学長。法学部教授。博士（法学）。著書は『会社の目的と取締役の義務・責任－CSRをめぐる法的考察－』（中央経済社、2014年）、『会社法講義・I、II』（中央経済社、2009年、2010年）、『コーポレート・ガバナンスにおける取締役の責任制度』（法律文化社、2002年）など。

## 「鬼」と伝統文化

人文学部教授 白川 琢磨

## 1. プロローグ

2014年8月に、上海の華東師範大学で国際シンポジウムがあった。「記憶の場としての東アジア」を主題とした中国、日本、韓国、米国等の文化人類学・民俗学の研究者によるかなり大規模な研究大会であった。ここで私は「鬼」をテーマにした研究報告を行ったが、それには理由がある。2002年に福岡大学に赴任して以来、北部九州を中心に歩き回ってきたが、さまざまな儀礼や祭礼、民間神楽や伝承の中で、これまで多くの鬼に出会ってきた。

「九州は鬼の宝庫である」。この言葉は、2007年1月の『文藝春秋』の巻頭特集で初めて書いたのだが、それ以来いろいろな所で書いてきた私の正直な印象である。しかし、それだけではない。これまで、中国、台湾、韓国、ベトナム、ラオスなど東アジア圏の学生や院生と調査を共にする機会があったが、彼らは総じて、日本人である私から見れば、異様に鬼を「怖れる」のである。一方、日本人は鬼



伏見神社の「荒神」



豊前友枝神楽の「御先」

を怖れないどころか、例えば那珂川町伏見神社の岩戸神楽では、「荒神」と呼ばれる鬼にわが子を抱いてもらうために母親たちが参集し、神社側では整理券を配って対処している始末である。中国を中心とする他のアジア圏とは対照的な日本人の鬼に対する態度、もし起源が同一であるとすれば、日本とアジアとの鬼に対する「記憶」のズレはどこから生じているのか。

もう一つ、エピソードを紹介したい。私の父は2003年1月2日に四国の実家で亡くなった。それは、ちょうど娘が福岡で高校を受験する年であった。娘にとっては二重の辛い試練であった。だが幸い、3月の受験でとても無理だと思われていた志望校に無事合格し、わが家は彼女の「神秘的な経験」の話で持ち切りであった。それは、受験の時に前の座席が偶然空席であったのは、きっとおじいちゃんが居て守ってくれたのだとか、どこの家庭にもある他愛もない話なのだが、科研の共同調査で偶々わが家を訪れていた中国人学者はこの話を聞き逃さなかった。彼は、突然真剣な表情に変わり、娘の腕を血管が浮き出していないかチェックし始めたのだ。おじいちゃんといっても死者であることに変わりはなく、死霊は鬼に関係し、どちらにしても「良くない」ことであると大いに心配してくれたのである。その後、彼は、調査地で別の韓国人学者にもこの話を確認し、同意を得たのである。

## 2. 文化と民俗

さて、鬼はわれわれ日本人には比較的なじみやすい存在であるかもしれないが、いきなり比較文化の事例に直面すると戸惑う方も多いであろう。そこで、文化や民俗という概念について少し解説しておこう。文化人類学は、文化について研究する学問である。では文化 (culture) とは、何かということになるが、私はコンピュータの比喩を使って説明している。最近では、学生を含めほとんどの人がパーソナル・コンピュータを使っているので、ハードウェア・ソフトウェアの用語が分かりやすい。ハードウェアというのは、コンピュータの「機械」の側面で、IBM だの NEC だのは、ハード面の名称である。人類学では、人間のハード面の特徴を表す場合は「ヒト」と表記する。文化とは、コンピュータでいえば、いわばソフトウェアに該当するものである。ハードのみというコンピュータはなく、OSをはじめとしてさまざまなソフト (プログラム) がインストールされて機能できるように、ヒトも言語ソフトや親族ソフト、あるいは宗教ソフトなどが内蔵

されて初めて「人間」として存在できるのだ（「コンピュータ ソフトがなければただの箱 人間も文化がなければ ただのヒト」）。このように考えれば、鬼という要素は主に宗教ソフトに関係する問題であることが分かる。

しかし、人間にとっての文化と、コンピュータにおけるソフトウェア（プログラム）には重大な違いがある。例えば、あるゲームをやりたくて、コンピュータにゲームソフトをインストールした場合、そのソフト（プログラム）自体は「あらかじめ分かっている」。ところが、人間の場合、どういうソフト（文化）が内蔵されているのかが分からないのである。われわれ日本人の宗教ソフトとは何なのか。ソフトは分からないが、結果として行われてきたゲームを見ながら、そのプログラムを「類推」するしかないのである。

ここで「民俗 (folklore)」が登場する。民俗学者、篠原徹によれば、民俗とは「学校教育以外で伝達されてきた知識」の全体である。知識というと、観念的なものだけを連想しがちだが、膨大な実践的知識、すなわち行動プログラムも含まれる。日々のあいさつから祭りのやり方まで、われわれの眼前には膨大な民俗が横たわっており、そして日々更新されている。しかし、その大部分は歴史的に伝承されてきたものであり、伝統と呼んでも差し支えない。文化よりもより具体性に富んだ民俗なら直接的な調査対象となる。気の短い学生ならすぐにでもフィールド（調査地）に飛び込んでしまいそうになるが、この段階で特に注意しなくてはならないことがある。それは、民俗知に特有な癖のようなものである。例えば、複雑で奇妙な祭りなどを調査するとき、調査する学生に与える注意は、「何故 (why)」と聞くな、あくまで「どのように (how)」を主眼とせよということである。儀礼遂行者は何でも「知っている」と思い込んでしまいがちであるが、民俗知は実践知であることがほとんどで、「理由」を聞くことは参考程度にとどめておいたほうがよい。つまり、「何故」という問いは、上述した宗教ソフト、すなわち文化に関わる問いであり、そのプログラムを解明するのが文化人類学や民俗学の目的なのである。

### 3. 鬼と神仏習合

さて、日本人の宗教ソフトとは何だろうか。先ほど「分からない」と書いたが、人によっては、仏教と答える人も居るだろうし、神道と答える人も居る。宗教ソフトは無いと答える人も世論調査ではかなりの割合に上る。この混乱の直接の原

因は、明治初期の「神仏分離」にあった。分かりやすく言えば、国家政策として宗教ソフトの「書き換え」を図ったのである。それまで仏教と混然一体となっていた神道は、強引に仏教的要素を剥奪され、「神社」と「寺院」に分けられ、今日の景観がつくり出された。それ以前の施設は「宮寺」とも「寺社」とも称されたが、そこからあらゆる仏教的要素を排除し、純粋な「神道」や「神官」が据えられた。かろうじて前時代から残った物といえば、鳥居と狛犬くらいであろうか。その目的は神道を国教とするためであったが、話がややこしいのは、それから間もなくして、神道をその他の「宗教」と区別して、「道徳」としてしまったことだ。これによってわれわれの内面に「宗教」を低くネガティブに見る視線を醸成してしまった。さらに、1945年、第二次大戦の敗戦によって、神道は再び「宗教」に復帰する。これでは混乱するなどと言う方が無理である。

しかしながら、この宗教ソフトをブランクにしておくわけにはいかない。ブランクのままでは、眼前に横たわる膨大な民俗、特に宗教民俗の束を解くことができない。だがここに近代以降の「神道」や「仏教」を基本ソフトとして充当することもできない。今日存続しているほとんどの宗教民俗の形成は明らかに「神仏分離以前」であるからである。民俗学では、柳田國男の「固有信仰」をはじめ、民間信仰や民俗宗教など、多様な基本ソフトが考案されてきたが、そのどれも十分妥当というわけではなかった。特に私のように北部九州をフィールドとした場合は説明が行き詰まってしまうのだ（われわれはこの状態をフォークロア・パラドクスと呼んでいる）。そこで神仏分離以前の宗教の「状態」を包括する概念として「神仏習合」を基本ソフトとすることを提案している。神仏が習合する (syncretize) ということは、単に混淆している (mixed up) ということではない。秩序を伴ったシステムとして総合されているということであり、ハイブリッドな一つの宗教と見なすこともできる。だがその実態は明らかではなく、宗教史における解明もまだ始まったばかりと言ってよい。むしろわれわれは宗教民俗を解くための基本ソフトとして神仏習合を措定し、その実態の解明を目指すべきであろう。

さて、「鬼」のテーマに戻り、神仏習合という視座から何が言えるのか、考えてみたい。日本の鬼の起源が中国の「讎」にあり、「追讎」の儀礼として日本に伝わったことは確かであろう。讎は目に見えない「陰」の世界の代表であり、駆逐すべきネガティブな存在である。中国では、やがて「死霊」(鬼)と結び付き、明確に表象化されることはなかったのだが、日本では寺社、あるいは寺院の正月

行事、修正会や修二会の主役となっていく。その代表的事例が、豊後国東半島の六郷満山と称される寺院群である。ここでは「修正鬼会」と呼ばれ、かつては全ての寺院で実施されていたが、今日ではわずか二ヶ寺（三ヶ寺）のみとなっている。長岩屋の天念寺では、旧暦1月7日の夜、厳密に言えば午後3時頃から深夜にかけて延々と22の儀礼項目が実施され、その内最後に、「災払鬼（赤）」「荒鬼（黒）」が登場し、講堂内を燃える松明と斧や刀を手に暴れ回るのだが、その両鬼を「招く」とされる「鈴鬼」に注目してみたい。鈴鬼は全く奇妙な鬼である。男女一対からなるが、その面相は人面で全く怖くない。しかし、鈴や御幣などの象徴に注目すると、「神」と「鬼」の中間的存在と言えるのである。



「神分」(神を招く)



立ち役(香水棒を振り、天部の諸尊を招く)

になりたい」と願ったのである。その基本的な考え方は「六道輪廻」思想であり、われわれ(人)の住む輪廻転生を余儀なくされる世界を「地獄-餓鬼-畜生-修羅-人-天」の六つに分ける。日本の神々は天部に在ることを悟ったのである。天部に在る限り、人と同じく、男女の別もあり、寿命を持ち、喜怒哀楽や苦しみも持つ。ここから脱却して「声聞-縁覚-菩薩-如来」の仏の世界に参入したいと願ったのである。全国の神社には神宮寺が併設され、神前読経として大般若経が読まれていく。やがて、鎌倉時代後半になると、「本地垂迹説」、すなわち日本の神々は、印度の仏が日本の衆生を救うために神の姿で現れたものだという神=仏という考え方が一般的となり、寺社には「本地堂」が建てられるようになる。天念寺では、赤鬼は愛染明王、黒鬼は不動明王の化身であるという伝承があるが、この段階の解釈であろう。ともあれ、鬼は、神仏習合の歩みの中で、神と人の中間の、とりわけ神に近い位置に出現したと考えられる。



鈴鬼(女)



鈴鬼(男)

この長い儀礼次第の意味空間を分節化していくと幾つかの分岐がみられる。前半の中心は「法華懺法」である。六根の罪を懺悔し衆生に代わって悔過する「顕教」の修法である。やがて秘密真言が唱えられ、2人の法咒師(ほずし)によって「密教」世界が開闢するが、その頂点が「神分」である。導師によって全国の神々(権現や明神)が勧請される。さらに堂内に突き入れられた大松明の煙が充満する頃になると、吉祥天や五方竜王など天部の諸尊が招かれ、最後に「鈴鬼」が鬼を招くのである。つまり、ここには「仏」-「神(天)」-「鬼」という連続体が認められ、その意味で鈴鬼は中間的存在なのである。

わが国の神仏習合は、8世紀後半、畿内各地で起こった「神身離脱現象」をもってその嚆矢とする。簡単に言えば、神々が巫女(みこ)の口を借りて「神の身を離れて仏



荒鬼と災払鬼

#### 4. 大善寺玉垂宮の鬼夜

しかしながら、追い払うべき「儺」から一挙に鬼の出現とは飛躍し過ぎではないかと思われる向きもあろう。実はその中間形態も認められるのが北部九州のフィールドの豊かさである。九州は鬼の宝庫であるということは、取りも直さず鬼を育んだ神仏習合文化がよく残されているということであり、また地域の拠点となる寺社が多く、その勢力も強かったということである。例えば修正鬼会は1月7日であることが多いが、1月7日に村の入口などで火を焚く行事を多くの地域で「オーネビタキ」と呼ぶ。明らかに「鬼火焚き」の意味である。また「ホッケンギョウ」とか「ホンゲンキョウ」などと呼ぶ地域もあるが、「法華経会」あるいは「法華行」という意味であり、民俗学者、佐々木哲哉によれば後者は安楽寺信仰圏に重なりとされる。安楽寺とは、太宰府天満宮のことであり、元は安楽寺天満宮という拠点の寺社であった。現在でも1月7日の夜には「鬼すべ」という行事を伝えている。



ダム水没集落の最後の鬼火焚き  
(福岡県朝倉市栗河内：2010年1月7日)

佐賀県藤津郡太良町竹崎といえば有明海に面した漁村であり、今では竹崎蟹で有名だが、その中心となる竹崎観世音寺はかつては33坊から成る顕密寺社集落であった。正月の初めに「修正会鬼祭り」を今に伝えている。鬼祭りといっても鬼が実際に出てくるわけではない。「鬼追い」という演目だが、鬼面が収められた「鬼箱」が鬼副（おんぜえ）と称せられる若者に担がれて、それを奪おうとする若者らにあらがって境内を所狭しと逃げ回るのである。最後に、鬼副は本堂に駆け込んで住職に鬼箱を渡して終わりとなる。まさに鬼は追うだけの対象であり、最後までその姿があらわとなることはない。その点から言えば、修正会の一環で

はあるのだが、「追儺」の伝統には最もよく沿う形態である。つまり、「見えない鬼」の段階を画する事例である。



鬼副が守る鬼箱（竹崎観世音寺）

この「見えない鬼」の段階から、天念寺などに代表される「見える鬼」への過渡的な段階を表すのが、福岡県久留米市の大善寺玉垂宮の「鬼夜（おによ）」である。よく質問されるのが、大善寺玉垂宮とは何かということである。元来は、衆徒方だけでも45坊を数えたとされる大寺社である。ところが神仏分離によって、最も大きな範疇である「寺」が消滅し、高良玉垂命を祭る玉垂宮と仏教的な施設としては「阿弥陀堂（鬼堂）」と「鐘楼」のみが残されたのである。この両施設は鬼夜の執行に不可欠であったというのがその理由かもしれない。安楽寺天満宮も同様である。今日では大善寺という寺名は、地区名にその痕跡を残すにすぎない。

さて、「鬼夜」は大松明と鬼を中心にした複合性に富む儀礼であるが、ここでは専ら鬼を中心にその概略をみていきたい。一方の、1月7日夜、各地区から出される6本の、赤々と燃える大松明であるが、その火の元となる「鬼火」は、大晦日の夜、宮司によって火打石から造られる。各地区で大松明が準備される中で、同日午後、まず「鬼面尊神」の儀礼が行われる。儀礼の執行主体は、旧坊家につながる「赤司家」と「川原家」の男たちである。この儀礼は鬼面尊神が収められた「鬼箱」が本殿から東側に位置する阿弥陀堂（鬼堂）に移され、一旦安置される。鬼堂には赤司家と川原家だけが残し、ツンキリ餅が供される。やがて、午後4時ごろ、鬼箱は本殿に「還御」する。次のピークは午後9時である。鐘楼から響く一番鐘を合図に、本殿の前面の境内は一切の明かりが禁じられ、暗闇となる

中、順次一番から六番の松明衆が松明の下にそろろう。鐘楼から響き渡る「乱声(らんじょう：鐘や太鼓の乱打)」を合図に、本殿から「鬼火」松明が赤司家の者によって運ばれ、一番松明に点火され、順次、六番まで点火されると今度は、境内は明かりと熱に包まれる。その中で赤司家と川原家の2人によって男女一対の「鉾面神事」が行われ、それが終わると松明は順次、本殿西側(裏)に移動していき、辺りは再び漆黒の闇となる。



鬼面(室町時代後期)  
求菩提資料館所蔵



大松明(大善寺玉垂宮の鬼夜)



阿弥陀堂を叩く子どもたち



出現した鬼(中央)

その時である。闇に包まれた阿弥陀堂(鬼堂)を「赫熊(しゃぐま)」(棕櫚で編んだ被り物)を被った子どもたちが取り囲み、「鬼出る!鬼出る!」と叫びながら手にした竹棒で壁面を激しくたたき始める。やがて全身を赫熊で蓑状に覆った鬼が出てくるが、その周囲は子どもたちや警護の者らに取り巻かれ、その姿を見ることはできない。鬼の一団は阿弥陀堂の周囲をゆっくりと「7回半」右回りに回り、その後、鐘楼横の暗闇に潜む。しばらくして本殿裏(西側)に待機した大松明から一番松明が境内を廻り、山門を潜り、その前の潮井場が設けられた川の岸まで来るがそこで火が消される。明るかった境内が再び闇に戻ると、鬼の一団が動き出し、川岸から中央の潮井場まで進み、垢離をとる。鬼はその後、本殿内部に入り、その姿は消失する。やがて2番松明から順次境内を巡り、6番まで全て消火されると、祭りが終了するのである。

大善寺の鬼は複雑な二元的構成の中でその存在を神秘化させている。まず、鬼面(鬼箱)と鬼の二元構造である。もし鬼面を鬼と捉えるなら、当日午後、鬼面

は阿弥陀堂にいったん移されるが、その後本殿に「還御」しているのである。だとすると、夜、阿弥陀堂から出現する鬼は一体何者かということになる。あるいは、午後4時に還御するのが、「鬼箱」だけであり、鬼面は残されていると考えるとつじつまが合うが、そうすると深夜に出現する鬼は「鬼面」を付けていることになるが、その確認を阻むのが「陰」と「陽」の二元構造である。鬼と松明は、儀礼の全過程を通じて陰と陽の二極に位置付けられており、陰の極にある鬼の様相をわれわれは「見ることはできない」。第三の神秘化の軸が「赤司」と「川原」という坊家の二元性である。鉾面神事などに表れる二元性をつなげると、赤司：川原／陽：陰／男：女／松明(火)：鬼(水)という二項対立が導かれるが、それはあくまで象徴的対立であって、川原家のみが鬼を管轄しているわけではない。焦点となるのは、当日午後の鬼面尊神の儀礼において阿弥陀堂に残された河原家と赤司家とその秘密を握っているのだが、われわれはそれを「知ることはできない」。

全体としてこの儀礼が伝えているのは、鬼については、その「存在」を感知することはできるが、それが何であるのかは「知り得ない」仕組みである。地元の伝承では、「鬼夜」は鬼が「改心」する儀礼であるという。竹崎観世音寺や国東天念寺の事例と照合して、神仏習合ソフトによる解釈を示すと、当初、排除すべきネガティブな対象として伝来した鬼(雛)は、「改心」することで、やがて仏に仕える存在として神に近い位置に転生し、最後は愛染明王や不動明王の化身となっていくのである。その点で大善寺玉垂宮の鬼夜は「中間」段階を示す貴重な民俗文化財といえるのである。

## 5. エピローグ：伝えられる「実践」

思わず「段階 (stage)」という言葉を使ってしまったが、鬼が進化するとか、発展すると言いたいわけではない。また鬼箱が、災払鬼や荒鬼より「古い」形態であると言うつもりもない。これまで、民俗学では特定の民俗の多様性を「伝播 (diffusion)」という概念で説明してきた。つまり、似た民俗は自然に伝わった「はずである」という仮説である。しかし、今まで見てきたように「鬼」に関しては拠点となる寺社や宮寺という神仏習合勢力 (force) との関わりが濃厚である。これは「権力 (power)」と言い換えてもよい。つまり、われわれが目にする、鬼に関する儀礼や表象の多様性は、各々が依拠した宮寺や寺社の権力が最高度に達したときの実践形態がそのまま固定 (fix) されたのではないかということである。組織は変わり、権力は衰退・廃絶し、何よりも「神仏分離」という徹底的な文化改変が為されて以後、147年を経てもなおこうした民俗儀礼が存続しているのは何故だろうか。それは伝えられる民俗のかなりの部分が、実践行為 (practice) およびその知識だからである。祇園山笠のような巨大な都市祭礼から村々の小さな祭りに至るまで、年中行事や祭りに携わる人々に伝えられているのは「実践」であり、その改変に対して人々は頑強に抵抗する。たとえ祭祀対象が国家によって変化させられたとしても実践体系そのものは存続する。それは、考古学における遺物と同じく、民俗学者には前時代の記憶装置なのであり、文化人類学にとっては文化を解く鍵なのである。

白川 琢磨 (しらかわ たくま)  
1953年生まれ。福岡大学人文学部教授。専門は文化人類学・民俗学・宗教学。現在、日本民俗学会理事 (2014年10月まで)、日本宗教学会理事、日本文化人類学会評議員、福岡県文化財保護審議会専門委員 (民俗) 等を兼任。

## 特 集

# 川柳における「伝」

— 今を未来に —

『川柳葦群』発行・編集人  
全日本川柳協会常任幹事 梅崎 流青

### 月は東に

あれは何年前のことだろう。確か佐賀で開いた川柳教室の帰りだった。春分の日に近かったので3月20日ごろの春霞の夕刻だった。

正面の山から月が昇ってくる。まん丸い月で小さな雲一片を従えている。地平を離れる月や、地平に沈む夕日の大きさに子どもの頃と変わらぬ感動を今なお持ち続けることを少し滑稽に感じながら帰途を急いだ。

途中、筑後川に架かる橋がある。橋は航行の船舶やあるいは強度を保つためだろうか円形を帯びている。その放物線の頂点でバックミラーは入り日を捉えた。

何の変哲もない日常が終わろうとしている。ふと「アッ」と叫んだ。それは教室で季語の話などを取り出していたからかも知れない。

菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村 (1716~1784年) の句である。江戸時代中期の俳人、画家で後年松尾芭蕉と並び称された。このいかにも絵画的俳句は私の最も好きな句の一つだった。

こうなれば何としても菜の花を探さなければならない。日本の原風景の一つである菜の花。それこそ昔はどこにでも見られた風景が無くなろうとしている。

菜の花もその一つだ。思い巡らす。「菜の花はどこだ」。限られた時間だ。急がねば日が沈む。思い出した。矢部川が有明海に注ぎ込む所に確かにあった。釣りに出掛けた時にその黄色が印象にあった。

あった。春風がかすかにその黄を揺らしていた。幸い月も日も地平線上にあった。正確に言えば月は山、日は海という抜群のロケーションだ。月と太陽のその真ん中にある私。まるで月と太陽を乗せたシーソーの支点、という私の存在がよ



りこの句に対する思いを増幅させた。景色の向こうに果てしなく広がる永遠の時の流れと、それを捉える一瞬の時間こそ与謝蕪村の言葉として伝えたかったのであろう。自然に対する畏敬と、日常を非日常と捉える感覚がなければ到達することの難しい情景描写でもある。この月は満月かそれに近いものでなければならぬ、ということを知ったのも収穫だった。

## 去来するもの

その矢部川と阿蘇山を水源とする筑後川に挟まれた位置に私の住む柳川市がある。

筑後川。143キロメートルという長旅を終え有明海に憩う。

「国土強靱化計画」の一環なのか。入り日さえ遮りかねないその堤防はまるで白い城壁のように自然になじめずにいる。川向こうは佐賀空港。有明海上空を旋回しながら機影は雲に隠れる。

この「城壁」に立ってみた。稲穂は波打ち赤トンボが私を掠める。

ここから見渡せる風景を晩年に訪れた古賀政男は「誰か故郷を想わざる」の原風景と言った。取り入れが終わり冬を経て春の息吹とともに歌詞にある「花摘む野辺」が展開されていたのだろう。

この同じ地点に、その人岸本吟一はただ黙って立っていた。今から10年前のことである。

私は映画人としての実績を持つその人が、作られた美より自然の厳しさがより高鳴りを覚えることを知っていた。

沈黙は時に饒舌<sup>じょうぜつ</sup>である、ということとその横顔が証明していた。

2004（平成16）年11月12日。翌日の「第19回国民文化祭福岡大会」の川柳大会第二次選者としてこの地に来ていた。

晩秋の日暮れは早い。「花摘む野辺」の彩り豊かな景もまるで無彩色。遠く島原普賢岳さえ見える有明海は三角波を宿し波に見え隠れしながら帰港を急ぐ漁船ももう目で捉えられなくなりつつあった。

海に向かって立つ岸本吟一に去来するもの。

高ぶりを抑えきれない84歳の瘦身は風に音があることを教え、これまで歩いてきた「川柳作家」と同じ重みを傾注してきた「映画人」そのものの顔だった。

## 引き継いだ流れ

川柳は俳諧から分かれ「前句付け」という興行的文芸を起点とし、250年の歴史を持つがその選者の柄井川柳の名前がそのまま「川柳」として現在に至っている。

その歴史の中でいわゆる言葉遊びや品位を欠くものが川柳として人々の口の端に上り作られた時代があった。

明治時代以降「文芸としての川柳を」と立ち上がった6人の川柳家がいた。その中の1人が岸本水府。大阪を拠点に『番傘』という川柳誌を立ち上げ現在では1000人を超す同人を抱え川柳界の牽引的存在となっている。

このことは、田辺聖子による「道頓堀の雨に別れて以来なり」に詳しい。

その水府の子息として生まれ後継いだ『番傘』の岸本吟一主幹はその座を他の人に譲り映画製作といくつかの新聞や雑誌の川柳欄の選者として名高い存在だった。

ここ九州では西日本読者文芸欄と一つの同人誌の選者を務めていた。

国民文化祭福岡大会の選者を終えたころ体調の不良を訴える手紙が届き始めた。もうその頃は映画を作るだけの資金や気力はなく川柳を除いて1人の老人となりつつあった。

年齢を重ねるということはある意味で残酷である。記憶や体力を、何より気力を奪ってしまうのか、手紙の末尾には必ず同人誌を頼む、としたためであった。

吟一先生の容態がだんだん深刻になりあの流麗な文字がゆがんできた。時には代筆を頼み同人誌のその後を正面から考えなければならない状況となっていた。

岸本吟一の手掛けた映画は1956年の『流転』『鶴八鶴二郎』から1979年の『闇の狩人』まで40本になる。

2007年2月22日、岸本吟一の逝去は全国紙をはじめ新聞各紙が報じた。

「何て軽いのだろう」と棺<sup>ひつぎ</sup>を担ぎながら先生の遺言とも言うべき同人誌は『川柳葦群』として新しい革袋で出発することを「棺」に報告した。

私の引き出しには逝去1カ月前の「後を願う」「葦の群れよろしきかな」の2通のはがきと、河海に入る十字架をおろす 吟一 という短冊が遺されている。

10年前、晩秋の筑後川に立ち海に向かって考えていたこと。それは十字架をおろした後の岸本吟一の川柳をどう伝えていくか、ということだったのだろう。

## 心の拠り所

一人ひとりの結集された「文化」を後世へ、というのは今そこに携わっている者の努めでもある。しかし、私の同人誌発行の背中を押したのはもう一つの「大きな手」だった。

同人誌にはどちらかといえば各地で活躍している人、指導的存在の人が参集していた。これも岸本吟一先生の遺した財産だといえた。

しかし、その中の1人はほとんど無名に近い人だが私にとっては「大きな手」の持ち主だった。

**もがり笛逝った息子も年男** これは新しく出発した『川柳葦群』創刊号に発表された。作者は「逝った息子」が部屋の片隅で膝を抱きながら嗚咽する場面に二度直面している。

一度目は妻子と別れて母の元に帰って来た時。もう一度はがんを告知されたその日の夕刻。

封書には投句と近況を知らせる一筆箋が同封されていることがある。投句の背景や体調、家族のことなどがしたためてある。その人も息子との2人だけの厳しい生活も川柳として吐き出すことにより心を保つことができる、といつも結んでいた。この同人誌が「私の心の拠り所」とも。

公園でボールやブランコで遊ぶ子どもたちを目で追いながら未来を確信する若い家族もあれば、曲り角の向こうに不安を覚える家族もある。

この人の川柳はどこまでも不安と絶望に近いものだった。蚕が糸を吐くように自身の痛みという糸を吐くこと、つまり読み手に心情を伝えることで心を軽くしたのである。

この同人誌という発表の場はこれからも確保して欲しい、との便りがいつも投句に添えられていた。

逝った息子の部屋で後を追いかかったが心境を川柳として伝えることで平常心に戻れた、と述懐する。逆縁の心痛は想像でその痛みを共有するしかない。

**下着買う百まで生きる準備する** 「日にち薬」のおかげで顔を上げて歩き始めたことが川柳からも読み取れた。

どうして川柳を選んだのか、という理由は人により異なるだろう。だが、このように川柳を書き、同人誌という場所で読み手に伝えることが「心の拠り所」に、

という人は少なくない。

「心の拠り所を確保して」、という投句者の声が同人誌発行へ私の背中を押した二つ目の手だったのである。

この逆縁の母は歳月の厳しさに直面、老人ホームへ入居。1年分の誌代を送り届け川柳から離れた。ホームの住所も名前も伏せたままだった。

## 水面の輪

私の住む柳川市でも市政だよりも言うべき『広報やながわ』を発行している。この一角に川柳欄が設けてある。

これは先に述べた「国民文化祭福岡川柳大会」を柳川市で開催するに当たり「市民からも川柳の輪を広げよう」という目的で発足した。10年を経た今では市民に定着、多くの川柳が寄せられる。

投句は入院中のベッドから、あるいは老人ホームの一室、時には点字での投句もある。点字には選者にも分るようにボランティアの手で文字に変換されている。投句のはがきにはその数だけ人の営みが見え隠れする。

「川柳は人間と社会を詠むもの」ということをあらためて認識する。

これからは二人三脚ゆるり旅 私は熱心に投句を続けるその中の2人に会いたくなった。その人は病院のベッドで小さく身体を折り畳んでいた。壁には今月の投句3句が書いてある。聞けば同室の患者、担当の医師や看護師たちとどの句が入選するか「にわか選者」になるのだという。

毎月の『広報やながわ』発行日には落胆と歓声が病室に充満するのだ。

俗にいう「難病」の病名を抱えた患者のほんのひとときの笑顔が想像できた。

「暗い時こそ明るい歌を」、入院生活の中のささやかともいえる川柳という存在が病状回復に少しでも役に立ったら、との思いで病室を後にした。

## 連絡通路としての川柳

そよそよと雲はどこ行く空の旅 訪ねた老人ホームは田園地帯にあった。あらかじめ訪問を告げていたのでその人は玄関まで出て迎えてくれた。車いすを操っていたがそれまではきっと躍動的だったということを上半身が物語っていた。

車いすの訳は脳出血だと教えてくれた。思っていた通り学校でバスケットボールを教えていたという。枕元にはその「栄光の集合写真」が飾られていた。写真

の人は健康の固まりと言っていい被写体だった。

少し後遺症の残る不自由な話し言葉と車いすの生活は、外部との接触が限られる。

その限られた生活の中で『広報やながわ』への投句は外部との連絡通路であり息をする空気穴でもあった。

現に入選句がホームの掲示板に掲げられ、披露されることが最大の喜びだという。

考えてみれば出会いの数だけ別れがあり、人の数だけ来し方行く末がある。

バスケットボールを手放してもペンと紙があれば窓から見える雲に自身を託し旅することができる。

5・7・5と指を繰り、書く喜び、入選句を確かめる喜び、そして周囲の祝福を受ける喜びは先の入院患者と共通している。

何よりそれらのことを私に伝える表情が何とも輝いている。

ここでも川柳が心のつえとなっているのだ。

今も、介護士の「今では川柳がAさんの生きがいです」の声を反すうしている。

## まどのむこうに

夜空には数えきれない夢がある 八女市を貫き有明海に注ぎこむ矢部川。その矢部川を行き交う漁船のエンジン音が聞こえそうな所に柳川市立中島小学校がある。

「本をもっと読もう」とのスローガンで始まった市内の小、中、高校を対象としたものに「ヤング川柳」がある。始まって20年の歳月を数える。

中島小学校からも多くの川柳が寄せられ、課外授業の一環として川柳を「受け持った」ことがある。

17音字に合わせ小さな指を折りながら仕事の父、家を守る母、甘える弟や妹に向けるまなざしがここにもある。それらの家族に対する家族愛が川柳となって表れているのだ。

ひとりじゃないよまどのむこうにみんないる これは市内の福岡県立特別支援学校小学1年生の入選句だ。

入選句は小冊子として各学校に配布、入賞者の表彰は毎年初冬に行われる。

## イノチ一個となりにけり

川柳をはじめ短歌、俳句も時代と無関係ではない。わけても、人間や社会を対象に詠う川柳は時代を切り取ることも柱の一つだ。

あの3・11大震災では破壊された人々の営みが被災地から川柳として発信された。

持ち物はイノチ一個となりにけり 東松島市で家屋家財あらゆるものを全て津波に攫われ自失の口から呻き声としての5・7・5。九州から東日本。遠い被災地ということはどうしても被災者の痛みも思いも「地理」が遠くする。そんなことでいいのだろうか、と気付かせてくれたのがラジオから届いた聞き覚えのある声だった。

宮城県を中心に発行している『川柳宮城野』の雫石隆子主幹の雪解けを促すような温かい東北弁の語り口。ラジオはあの大震災川柳を特集していたのだ。

これらの川柳が一気に「距離」を縮めた。

このように川柳は過去を今に、今を未来に伝承する「縦軸」と、同人誌や広報などに発表し面的な広がりにより心の安寧を見いだす「横軸」とがある。

川柳が社会や個人に対しどれほどの「コミュニケーション力」があるか分からないが時代の証言者としての役割や、川柳の書き手や読み手の「心の拠り所」となっているのは確かである。

梅崎 流青（うめざき りゅうせい）

1946年生まれ。全日本川柳協会常任幹事。『川柳葦群』発行人・編集長。佐賀や柳川などで川柳教室の講師、福岡大学主催の全国高校生川柳コンクールの選考委員を務める。

# 集団で求められる

## コミュニケーション能力

人文学部准教授 池田 浩

### 1 はじめに

近年のスマートフォンの普及は目覚ましく、Facebook や Twitter、LINE などの SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）は私たちの生活とは切り離せない存在になっている。特に、大学生や若年者を中心にこれらの日常的な利用は目覚ましく、友人とのコミュニケーションにおいて必要不可欠なツールになっている。

そうした SNS を通じて、大学生が友人に何かを伝えたり、逆に友人からメッセージを受け取るというコミュニケーションの機会や頻度は、それが存在しなかった時代と比較すると飛躍的に増えている。では、昔と比べて、大学生のコミュニケーション能力は向上したのかといえば、必ずしもそうとは言えないだろう。

では、われわれの社会ではどのようなコミュニケーション能力が求められているのだろうか。本稿では、筆者が専門とする集団心理学の観点から、集団活動において必要とされるコミュニケーション能力について議論していく。そして、本学が「対人力」で評価されている理由について考察していく。

### 2 集団コミュニケーションの落とし穴

われわれは、大学や企業、コミュニティなどさまざまな社会的場面で、複数の人とコミュニケーションを行う。例えば、会議やミーティング、話し合い、また大学のゼミなどはその典型的な場面といえるだろう。しかし、普段、友人と SNS や直接対面でコミュニケーションを取れているからといって、集団においても円滑にコミュニケーションを行えるのかと言えば、必ずしもそうではない。就職活動を行う 4 年次生の多くが、採用試験の一つであるグループディスカッションで

思うように発言できなかった経験をするのは、集団でのコミュニケーションの難しさを如実に表しているといえる。

では、何が難しいのだろうか。それを理解する上で、集団心理学の興味深い実験を紹介しよう。アメリカの社会心理学者であるステイサーは「隠れたプロフィール」という集団実験を行っている。この実験では、提示された 2 人（仮に、山田さんと鈴木さん）のどちらが管理職の候補としてふさわしいかを、実験に参加した 5 人が話し合い決定することが行われた。そこで、山田さんと鈴木さんのどちらが管理者として適切かを判断するために、2 人の長所に関する情報が必要になるが、表 1 に示すように、鈴木さんは三つの長所、そして山田さんは五つの長所をそれぞれ持っているとしよう。ただし、これらの 2 人の長所に関する情報の与え方に工夫がなされている。鈴木さんについては、5 人の参加者全員が三つの長所情報を受け取っている。これを「共有情報」と呼ぶことにしよう。それに対し、山田さんに関する五つの情報は、5 人がそれぞれ個別に与えられており、5 人は他の人がどんな情報を持っているかは分からない。この山田さんに関する情報を「非共有情報」と呼ぶことにしよう。

このような条件の下で、山田さんと鈴木さんのどちらかを選ぶために話し合いが行われると、集団ではどのようなコミュニケーションが展開されるだろうか。実は、表 1 を見る限り、長所の数が多い山田さんが選ばれるだろうと思うが、実際の実験では鈴木さんが選出されることが多い。それは、話し合いの中では、みんなが知っている鈴木さんの長所に関する話題ばかりが多く取り上げられ、個別に持っている山田さんの長所についてはあまり取り上げられなかったからだ。

表 1 5 人の実験参加メンバーが受け取った管理者候補 2 人に関する長所情報

実験参加メンバー	管理者の候補	
	山田さん	鈴木さん
A さんが受け取った情報	頭脳明晰	明朗、誠実、行動力有り
B さんが受け取った情報	冷静沈着	明朗、誠実、行動力有り
C さんが受け取った情報	誠実	明朗、誠実、行動力有り
D さんが受け取った情報	ユーモア豊か	明朗、誠実、行動力有り
E さんが受け取った情報	行動力あり	明朗、誠実、行動力有り
長所の数	5	3

### 3 集団では独自の情報を伝えることから始まる

このステイサーの実験は、われわれが集団でコミュニケーションを行う上で重要なことを教えてくれている。すなわち、われわれは集団でコミュニケーションを行うとき、誰もが知っている共有情報ばかりを伝達し、本来話題にすべき非共有情報や独自の情報はあまり伝えず、結果として集団において話題に上りにくいということである。

実は、集団が個人を超えた大きな力を発揮するためには、一人一人が独自に持っている情報や知識が重要な意味を持っている。昨今、女性の活用やダイバーシティ（多様性）の重要性が議論されているが、それは多様な背景を持つ人ほど、独自の情報や知識を保有しているからに他ならない。しかし、集団において誰もが知っている情報だけしか発言されなければ、一人一人が有意義で貴重な知識や情報を持っていたとしても宝の持ち腐れになってしまう。またそれどころか、集団になることがかえって足かせになってしまい、集団として愚かな決断を下してしまうことさえある。

それに対して、一人一人が独自の有意義な情報や知識を集団で共有すると、集団は多様な観点から判断することが可能になるだけでなく、創造的なアイデアや発想も生まれやすくなる。わが国において、古くから“三人寄れば文殊の知恵”ということわざがあるが、これらは独自の知識や情報を集団の他の人と共有し、それを生かして初めて現実味を帯びる。

しかし、集団で独自の情報や知識を他の人に伝えるのは容易<sup>たやす</sup>いことではない。なぜかと言えば、自分が伝える情報や知識が、それが有益だったとしても、他の人からどのように評価されるのか気になり、伝えることを躊躇<sup>ためら</sup>ってしまうからである。また、自分の考えや意見をうまくまとめきれず、伝達するタイミングを逸してしまうこともあるからである。

このように考えると、集団のコミュニケーションでは、まずはわれわれが他の人が持っていない独自の情報や考え、知識を他の人に適切に伝えることが重要であるといえるだろう。ただし、自分の意見を述べるにしても、それが集団に貢献するものでなければならぬ。よく発言はするけれども、その内容が単なる批判のように攻撃性を帯びているのであれば、集団全体を白けさせ、かえって集団の雰囲気を損なってしまう。

### 4 集団では他者の意見を聴くスキルも求められる

われわれにとって自分の意見や情報を伝えることが難しいと指摘したが、見方を変えると、それは他の人も同じである。このように考えると、われわれは話し手であると同時に、良い聴き手として他の人が心の内に秘めている有意義な情報や知識を引き出す必要があることに気付く。心理学では、これを「聴くスキル」と呼び、人間関係を円滑にするために必要なスキルと位置付けられている。

では、集団ではどのような聴くスキルが求められるのだろうか。まずは、聴き手として、他の人に発言を促すことはもちろんのこと、何か発言があれば適切に相づちを打つ。それが相手に興味と関心を抱いていることのメッセージになり、話し手の緊張と不安を和らげてくれる。

さらに、集団でのコミュニケーションに積極的に関与できるように質問することも有効である。質問の仕方には「はい」か「いいえ」でしか答えられない質問「閉じた質問」と自由な回答ができる質問「開いた質問」がある。当然、後者の「開いた質問」を行うことで、他の人の意見や考えを引き出すことができる。

### 5 集団ではみんなの視野を広げさせることが求められる

集団コミュニケーションの大きな利点は、複数の人による多様な意見や考えによって新しい視点や発想が生まれることである。そのためには、お互いに意見を発するだけにとどまらず、それらの意見や情報同士をぶつけ合う必要がある。

そのために求められるコミュニケーション能力とは、まず第一に、一見すると異なった意見や情報であっても、その中に潜んでいる「共通性」を見いだすことである。集団の中で共通性を見いだしてあげることで、多様な意見を整理することにつながるだけでなく、意見をまとめて、何かしらの結論を下すことにも役立つ。

また第二は「差異性」である。類似した意見や情報であっても、それらの「差異性」を見いだすことは、集団内に緻密なコミュニケーションを促す。集団で適切な判断を下す際には差異性は有効な方法と言える。

そして、第三は、意見や情報同士の「統合」や「上乘せ」である。共通性や差異性を踏まえた上で、意見や情報同士を組み合わせたか、ある意見に異なる意見を上乘せすることで、新しい発想やアイデアが生まれる。例えば、筆者はこの原稿を「タブレット型パソコン」で執筆しているが、これは、外で作業をするには

適しているが、やや持ち運びには重いノートパソコンと、携帯性に優れているが作業をするには不便なタブレットとを組み合わせた便利なものである。世の中の新しい商品やサービスの多くはそうした発想から生まれている。

以上のことから、集団でコミュニケーションを効果的に行うためには、以下のような三つの能力が求められているといえる。

- ① 自らの意見や知識、情報を論理的に伝えること
- ② 他の人が持っている意見や知識を引き出してあげること
- ③ 共通性、差異性、統合と上乘せを通して集団のみんなの視野を広げさせること

## 6 福岡大学が「対人力」部門で全国1位に評価された理由

以上の三つのコミュニケーション能力は、集団活動を行う際に意識しなければならないが、当然、すぐに身に付くというわけではない。集団で議論や討論する経験の積み重ねが必要であることは言うまでもない。

さて、就職・転職支援を行っている日経 HR が企業の人事担当者を対象に、新卒社員の出身大学のイメージ調査(上場企業3,540社を対象、有効回答社数433社)を実施した結果、福岡大学は「対人力」の項目で全国1位の評価を受けた(『日本経済新聞』2014年6月16日朝刊)。また、さらに詳しい項目として「コミュニケーション能力が高い」や「ストレス耐性がある」「課外活動に積極的に取り組んでいる」についても高い評価を受けている。筆者は、その部門で評価された理由として2点が関わっていると考えている。

一つ目は、福岡大学が文系および理系の9学部からなる総合大学であることである。9学部の中には、他大学にはあまりないスポーツ科学部や医学部(看護学科も含む)や薬学部などを含んでいる。文系と理系でも物事の考え方や価値観が違うだけでなく、医学部や薬学部の学生はまた違った個性を備えていることに気付かされることが多い。そうした多様な学生が集まるキャンパスにおいて、部活やサークルなど学部を超えた交流の機会が前述の評価を生む一因になっていることは間違いない。総合大学の最大の魅力はここにある。

二つ目は、福岡大学のユニークな試みである「教養ゼミ」の存在も大きいと考えられる。これは、共通教育科目(一般的に知られている教養科目)を少人数のゼミ形式で学ぶものである。2014年度は、心理学だけでなく、哲学や宗教学、歴

史学、経済学、物理学など多様な専門分野からなる34のゼミが開講されている。

筆者は、福岡大学に着任した2010年から現在に至る5年間、心理学Aおよび心理学Bの教養ゼミとして「チームワークの心理学」(前期)と「リーダーシップの心理学」(後期)を担当している。それらのゼミは、理系や文系の多様な学部の学生が受講しているだけでなく、Jリーグの元プロサッカー選手だったスポーツ科学部の学生や起業を目指している商学部の学生、政治家を志している法学部の学生、また東日本大震災の被災地に長期休暇のたびにボランティアに出掛ける看護学科の学生など個性溢れる学生が参加している。当然、これらの学生が他の学生に与える刺激は大きく、ゼミでのディスカッションが授業回数を重ねるごとに盛り上がりを増している。こうした学部を超えた交流や議論の機会と経験が、福岡大学の学生の対人力やコミュニケーション能力を高めていると考えられる。それは、これから時代を拓いていく若者たちに最も必要となる「力」なのかもしれない。

池田 浩 (いけだ ひろし)

1977年生まれ。福岡大学人文学部准教授。博士(心理学)。専門は集団心理学、産業・組織心理学。

## 随筆

## 私たちの生活を支える 「交通×情報」

工学部教授 辰巳 浩

### はじめに

交通は私たちの暮らしに欠かすことができないものです。通勤や通学、買物、通院など、さまざまな場面で人々は移動しています。日常生活での移動手段としては、主に徒歩、自転車、自動車、鉄道、バスなどが使われますが、特に自動車、鉄道、バスを安全で快適に利用するためには、情報が非常に重要な役割を果たしています。例えば、自動車を利用する際、初めて行く目的地であれば、どの道を通ればよいのかなどの情報を得て運転します。また、鉄道やバスなどの公共交通を利用する際には、どれに乗ればよいのか、いつ頃来るのか、運賃はいくらのかなどの情報を得る必要があります。こうした交通における情報のやりとりは以前から行われていますが、近年では情報技術を活用するなどさまざまな取り組みが行われています。本稿ではそうした取り組みをご紹介します。

### 自動車交通×情報

前述のとおり、自動車を運転する際には外部からさまざまな情報を取り入れる必要があります。目的地までのルートに関しては、従来は地図を見てあらかじめルートを決め、案内標識や交差点名を確認しながら運転していました。しかしながら、近年では、カーナビが普及し、画面上に現在地を表示してくれるとともに、目的地の施設名称や電話番号などを入力すると、音声などで道案内もしてもらえるようになりました。さらには、渋滞情報なども知らせてもらえます。ここでは、どのような情報伝達が行われているのでしょうか。まず、カーナビはGPS

アンテナを通じて複数のGPS衛星からの電波を受信し、高度な演算を行うことにより現在地を特定します。また、ドライバーが入力した目的地との関係から電子地図上で最短経路を探索します。この結果から、進むべき方向を音声などによりドライバーに伝えます。さらに、渋滞情報について見てみましょう。渋滞情報はVICSセンター（道路交通情報通信システムセンター）から発信されています。VICSセンターでは、道路上に設置されたたくさんの車両感知器により、渋滞状況のデータを収集しています。このデータをカーナビに伝達する方法としては、FM多重放送により送られる電波をカーナビが受信する方式と、道路に設置されているピーコンと呼ばれる装置から出される赤外線や電波を受信する方式があります。このようにしてVICSセンターからカーナビに渋滞情報が伝達され、画面上に渋滞箇所が表示されたり、音声で渋滞を知らせたりすることにより、ドライバーに伝達されます。



渋滞情報収集のための車両感知器

また、近年では高速道路等の料金所で停車することなく通行料金を支払うことができるETCも普及しています。ここでも情報のやりとりが行われています。自動車が料金所のETCレーンに進入すると、ETC車載器と料金所ゲートに設置されたアンテナとの間で電波による料金の精算に必要な情報の交換が行われます。そこで交換される情報は、自動車の種類、ETCカードの番号、入口料金所、出口料金所、通行料金などです。

このように自動車とドライバーと道路施設が情報のやりとりを行うシステムのことをITS（Intelligent Transport Systems：高度道路交通システム）と呼びますが、近年では安全性向上のための技術開発も進んでいます。例えば、見通しの

悪い交差点での出会い頭の事故を防ぐため、横から来る自動車を道路に設置した感知器で把握し、ビーコンを使ってその情報をドライバーに伝達するものや、高速道路での見通しの悪いカーブの先の停車車両や渋滞の情報を道路に設置した感知器で把握し、ビーコンを通じて後続車に知らせることにより、追突を防ぐものなどがあります。



ビーコン

## 公共交通×情報

鉄道やバスなどの公共交通に乗る際に必要となる情報は、路線情報、ダイヤ情報、運賃情報、乗り継ぎ情報などです。従来は、時刻表を見るか、駅やバス停に掲示されている情報を見ていましたが、近年では交通事業者などのウェブサイトでも確認できるようになり、スマートフォンなどのモバイル機器を用いれば、どこにいても情報を入手できるようになりました。また、路線検索サイトを利用すると、前述の情報に加え、目的地までの最短経路や最も運賃の安い経路、乗り継ぎ情報なども簡単に得ることができます。福岡市では、今のところ公共交通の乗り継ぎ利用は決して便利であるとは言えませんが、今後交通事業者同士が連携して乗り継ぎ利用がより便利になってくると、こうしたウェブサイトの利用価値が高まることでしょう。

ところで、わが国の鉄道はおおむね定時運行がなされていますが、バスは道路渋滞の影響を受けるためにしばしば遅れが生じます。時刻表に書かれた時刻になってもバスが来ず、いつ来るのかも分からないと利用者は不安になったり、イライラしたりします。この問題を解消するためにも情報技術が活用されています。

それがバスロケーションシステムで、西鉄バスでは「バスナビ」と呼ばれています。このシステムでは、まずバスに搭載されたGPS機器により、バスの現在位置が特定されます。この情報はバス事業者の情報センターに送られますが、西鉄バスの場合、通信には携帯電話の回線が用いられ、3分間隔で発信されるとともに、バス停でドアが閉められた際にも発信されます。バスの現在位置情報が情報センターに届くと、ダイヤ上の時刻と現在時刻の差から遅れ時間が計算され、現在位置情報とともに「バスナビ」のウェブサイト上にアップロードされます。また、主要なバス停ではモニターにその情報が映し出されます。このように、たとえバスが遅れるにしても、利用者にその情報が伝わることにより、バスの利便性は高まります。

その他、公共交通での運賃の支払いにも情報技術が用いられています。JR九州の「SUGOCA」、福岡市営地下鉄の「はやかけん」、西鉄の「nimoca」などの交通ICカードです。乗車の際、駅の改札機やバスのICカード機器にタッチすることにより、どこから乗ったのかやその時刻などがカードに記憶され、下車時にもう一度タッチすることにより、カードから乗車駅情報が送信されてその間の運賃が計算され、カードに記録されている残高から引き落とされる仕組みとなっています。こうした情報のやりとりは狭い範囲だけに届く電波により行われています。このように、情報技術の活用により、公共交通の運賃支払い時に切符を買ったり、小銭を準備したりする必要がなくなり、利便性が向上するとともに、改札口やバスの運賃支払い時の混雑の緩和にも役立っています。

## 公共交通の利用促進×情報

前節では公共交通における情報技術の活用についてお話ししましたが、それは公共交通を利用することが前提の人々に関わるものでした。しかしながら、実際には普段公共交通を全く利用しない人もいます。特に地方都市では、公共交通が充実しておらず、利便性が高くないため、普段どこに行くにも自動車を使い、公共交通を全く利用しない人が数多く存在します。

一方、近年では公共交通の利用促進が求められています。人々が多く集まる都心部では道路が渋滞していますが、これ以上道路を作ることは財政的な面でも用地の確保の面でも難しくなっています。これに対し、道路を作る代わりに、どうしても自動車を利用する必要がある人以外については、できるだけ公共交通



に転換してもらうことで渋滞を緩和することもできます。また、人々がまばらにしか住んでいない郊外部では、自動車での移動は快適ですが、公共交通の便数が非常に少なかったり、あるいは廃止されたりして自動車を利用することができない高齢者や子どもたちなどは移動に困っているのが実情です。そこで、できるだけ多くの人に公共交通を利用してもらうことで公共交通を存続させる必要があります。

このように、都心部であっても郊外部であっても近年では公共交通の利用促進が図られていますが、その方法の一つにモビリティマネジメント(MM)があります。モビリティマネジメントとは、公共交通に関する情報を与えることにより、自発的に自動車から公共交通への転換を促す取り組みです。具体的には、普段どこかに移動する際、何も考えずに車を利用している人々に対し、公共交通の路線図や時刻表、運賃表などの情報を与え、もし公共交通で行くとしたら、どのように行けばよいかを考えてもらいます。そうすると、一部の人にとっては、実は公共交通で行った方が都合がよい場合もあります。このように、公共交通に関する情報を提供することにより、公共交通の優位性に気付いてもらい、自発的に公共交通に転換してもらうというものです。

### おわりに

以上のように、交通と情報は密接な関係にあり、さまざまな情報の伝達することで快適で安全な移動環境を実現しています。また、近年ではオートパイロットシステムと呼ばれる自動車の自動運転システムの開発も国内外で始まっており、そのシステムの中でもさまざまな情報技術が活用されています。今後、私たちを取り巻く交通環境は情報技術の活用によりさらに進化していくことでしょう。

辰巳 浩 (たつみ ひろし)

1966年生まれ。福岡大学工学部教授。専門は交通計画・都市計画。現在、国土交通省社会資本整備審議会専門委員、福岡市総合交通戦略協議会会長、土木学会西部支部幹事長等を兼任。

## へびの毒について

### ～福大の毒へび女どりこからのメッセージ～

理学部助教 塩井 成留実

### はじめに

毒へびは、「神」なのか？「悪」なのか？

神話、伝説、絵画、寺院、聖書…と、いろんなところに毒へびが登場してきました。毒へびの研究に携わって約十年の月日が経とうとする私は、いまだその答えが分かりません。

毒へびの毒成分についての研究は古く、1909（明治42）年の野口英世著書『SNAKE VENOMS - an investigation of venomous snakes-』が世界で初めての論文だといわれています。へび毒成分の研究は、神経系のイオンチャネルの発見や血圧降下剤であるカプトプリルの開発など、生命科学の発展に大きく貢献してきました。私が「毒へびの研究をしています」と言うと、初対面の人とでも話が盛り上がります。就職活動の面接では、私についてよりも「毒へび」についての質問を多くされたのを覚えています。これは、「毒へび」もしくは、「毒」という言葉にヒトが興味を持っているからでしょう。自称「福大毒へび女どりこ」の私は、毒へびの研究の虜になってしまいました。

では、「毒」とは一体何なのでしょう？

ここでは、私がよく受ける質問とその答えを始めに述べます。その後に、私が皆さんに五つの質問をします。その質問の内容に関係する幾つかの情報を私のエピソードも踏まえて提供します。答えは、皆さんが考えてみてくださいね。

まず、**福大毒へび女どりこ**が皆さんの質問に答えます。

**Q：研究室に毒ヘビを飼っているのですか？**

**A：**飼っていません。私たちの研究室では、毒ヘビ（主にハブやマムシ）の毒およびその血液成分を取り扱っています。試料採取は、鹿児島県の奄美大島や徳之島、沖縄県で行っています。毒ヘビを飼うときは、福岡市（動物管理センター）への届け出と飼育するための施設が必要です。

**Q：えっ、「毒ヘビ」の研究ですか？ヘビのどこが好きなのですか？**

**A：**いえ、いえ。私は「ヘビ」が好きなのではありません。私は、毒ヘビの毒成分や血液成分についての研究を行っており、毒ヘビが獲物を効率よく食べるために進化の過程で得た「毒」と自分の毒から身を守るシステムに興味を持っているだけです。

**Q1 皆さんにとってヘビは怖い生き物ですか？**

**❗ 世界でのヘビの被害**

ここ福岡大学の周辺（福岡市城南区七隈）では、日常生活の中でばったりと毒ヘビに出会うという確率は大変低い。世界保健機関（World Health Organization, WHO）のウェブサイト（図1、<http://www.who.int/mediacentre/>、2014/11/17アクセス）によると、世界では、年間184万人がヘビの被害に遭い、死者は9万4千人に上る。特に南米、アジアやアフリカなどの田舎の地域では、身体の小さい子どもが農作業中に毒ヘビに咬まれて死亡するという事例が多い。医療設備が充実している都心までの移動に時間がかかること、また、世界の毒ヘビの種類が多様であり、どの種の毒ヘビに咬まれたのかの情報が不確かなことが、治療の遅れとなり死亡につながっている。世界では、毒ヘビの被害は大きな社会問題である。一方、日本での毒ヘビの被害について調べたところ、厚生労働省(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/>、2014/11/17アクセス)では「毒ヘビ及び毒トカゲとの接触」として記録されており、詳しくは把握されていなかった。ジャパンスネークセンター（群馬県太田市、<http://www.snake-center.com/>、2014/11/17アクセス）に問い合わせたところ、日本での毒ヘビの被害は、年間3,000件程度であり、



図1 世界のヘビの被害（WHOのウェブサイトより）

そのほとんどがマムシによる被害であった。日本の南西諸島に生息するハブの被害は年間100件程度である。

**Q2 えっ、日本にも毒ヘビがいる!? 皆さんは毒ヘビに出合ったらどうしますか？**

**❗ 日本の毒ヘビ**

日本では、ニホンマムシ(学名：*Gloydus blomhoffii*)、ハブ(学名：*Protobothrops flavoviridis*)、ヤマカガシ(学名：*Rhabdophis tigrinus*)の3種類の毒ヘビが生息し、ニホンマムシとハブはクサリヘビ科マムシ亜科(Crotalinae)に属する。分かりやすく説明すると、マムシ、ハブは世界で有名なガラガラヘビの兄弟である。日本では、南西諸島に生息するハブの被害に対して、鹿児島県と沖縄県を中心に大々的な対策が取られている。私たちは、2012年8月に現地調査の



写真1 観光客用のパンフレット（2012年8月、沖縄県那覇市内宿泊施設にて）

ため沖縄県を訪れた。沖縄県の宿泊施設には「ハブ注意」のパンフレットが各客室に用意されていた（写真1）。沖縄県衛生環境研究所（<http://www.eikanken-okinawa.jp/>、2014/11/17アクセス）の方々との打ち合わせでは、ハブ被害のデータや実際にハブに咬まれた患者さんの写真などの紹介があった（写真2）。ハブに咬まれると腫れ、内出血や筋壊死が症状として現れ、ひどい痛みを伴う。鹿児島県奄美大島や沖縄県では、定期的にハブ対策のセミナーが開催されているそうだ。



写真2 沖縄県の毒ヘビ咬傷  
(沖縄県衛生環境研究所より)

### 毒ヘビの種類

毒ヘビは、主に二つのグループに分類することができる（図2）。一つは、神経毒を主体とするコブラ科やウミヘビ科で、これらの毒は獲物の神経系に作用する。もう一つは、出血毒を主体とするクサリヘビ科で、局所的な出血、筋壊死や浮腫を引き起こす。詳細なデータは省略するが、マウスの致死量のデータを比較すると、神経毒を主に持つコブラなどの毒に比べて、マムシやハブの毒はその約50分の1とあまり強くない。美しく死にたいと願った絶世の美女クレオパトラが「なぜ、自殺にエジプトコブラを使ったのか?」。その謎解きにも関係するかもしれないが、出血性毒ヘビ（日本ではハブやマムシ）に咬まれると、その局部を中心に出血し、皮膚がただれ、浮腫や筋壊死と重篤な後遺症を引き起こす。そのため、死ぬことはないができるだけ早く、適切に処置をすることが必要である。出血性毒ヘビに咬まれたときの治療法は、咬傷局部周辺を切開するなどの

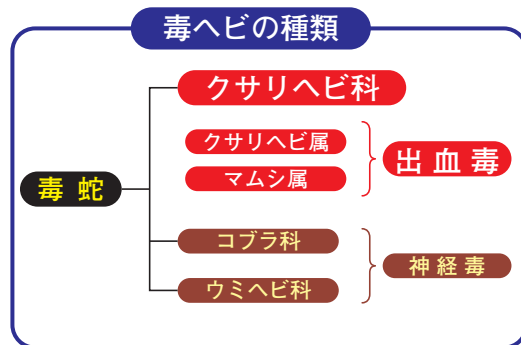


図2 毒ヘビの種類

外科的処置後、最終手段としてウマ抗血清が現在でも使用される。しかしながら、ウマ抗血清は、その純度や効能が低い、また、その抗血清に対して患者の免疫系が過剰に反応し、最悪な場合はアナフィラキシーを引き起こすなど、多くの問題点を抱えている。いまだ効果的な治療薬はない。

### Q3 ヘビの「毒」とは何か、知っていますか?

#### ヘビの毒と生体への作用

ヘビの毒液中には、さまざまな成分、特にタンパク質が多く含まれている。私たちは、ハブおよびマムシを研究対象としているため、ここではハブやマムシの毒成分についてと、それらの生体への作用を紹介する（図3）。実際は、これ以上に多種類のタンパク質が含まれており、それぞれの毒タンパク質によって私たちの体に対する作用は異なる。中でも、ハブやマムシ毒の主体となる毒は、出血因子と呼ばれるタンパク質分解酵素（専門用語では、活性中心に亜鉛イオンを持つメタロプロテアーゼ）であり、それらは、血管上皮細胞やその細胞の足場となっているコラーゲン（血管基底膜）を壊すことで、出血を引き起こす。一方、私たち哺乳類には出血をしたときに、その出血を止めようとするシステム（血液凝固系）が備わっている。しかし、毒成分中には、その血液凝固系を壊すものも含まれている。つまり、それぞれの毒タンパク質が自分たちの役割をしっかりと果たすことで、生体の恒常性を破壊し、恐ろしい「毒」として効果を発揮する。

- ・金属プロテアーゼ ④ハブやマムシ毒の主成分  
例) 出血因子：血管上皮細胞や血管基底膜を破壊する
- ・非出血性金属プロテアーゼ  
例) アポトーシス誘導因子：血管上皮細胞の細胞死を起こす
- ・ホスホリパーゼ A<sub>2</sub>  
例) 筋壊死因子：リン脂質を分解する。筋肉組織細胞の破壊を引き起こす
- ・セリンプロテアーゼ  
例) 血管透過性因子：血管から血液成分が出ることを亢進する
- ・ディスインテグリン  
例) 血小板凝集阻害因子：血液凝固に必要な血小板の凝集を妨げる
- ・神経毒因子  
例) イオンチャンネル阻害：神経系の受容体に結合して情報伝達物質の結合を妨げる などなど

図3 ハブやマムシの毒の成分と生体に対する作用

## Q4 なぜ、ヒトは「毒」という言葉に魅力を感じるのでしょうか？

### ❶ エピソード1：マスコミからの注目

「毒ヘビ」もしくは「毒」についての話題は、新聞やテレビにもよく取り上げられている。最近では、2014年11月5日にNHK総合の人気番組「探検バクモン」で、お笑いコンビの爆笑問題が「超強力！ヘビパワー」というタイトルで、ジャパンスネークセンターを紹介していた (<http://www.nhk.or.jp/bakumon/index.html>, 2014/11/17アクセス)。私も、2014年に入って西日本新聞やTBSの「トコトン掘り下げ隊！生き物にサンキュー」から問い合わせを受けた。

### ❷ エピソード2：福大生 vs 高校生の毒ヘビ討論会で勝利したのはどっち？

国際科学技術財団の協力を得て、2014年11月8日に「やさしい科学技術セミナー in FUKUOKA University」を開催した (<http://www.japanprize.jp/subsidy.php>, 2014/11/17アクセス)。そのセミナーのサイフェンスカフェ（討論会）では、研究室の福大生と福岡市近隣の高校生とが「毒」について討論をした。この企画は、ヘビ毒とフグ毒について事前に調べた内容をお互いに発表し合い、福大生と高校生の交流を通じて、さらに「生物毒」に興味や関心を持ってもらいたいという目的だった。参加していた高校生の調べている量と内容がとても充実していたため、毒ヘビ女（自称）と言っている私でさえ、コメントができないときがあった。このセミナーは想像以上に盛り上がり、参加していた高校生は「お勉強」「宿題」としてではなく、「知りたい！」という姿勢で調べた様子が発表の内容からうかがえた（討論会の様子：<http://youtu.be/YYGdhiQZXqc?t=1h3m42s>, 2014/11/17アクセス）。

### ❸ エピソード3：昆虫好きの息子の話（余談）

私には、3人の子どもがいる。長男は昆虫が大好きで、特に毒を持つ生物に興味を持っている。3歳の妹や1歳半の弟に赤色のコガネムシが飛んでくると「これは色が付いている！毒を持っているから離れて（半泣き）！」と一生懸命叫んでいる。確かに毒を持つ生物は、カラフルなものが多い。「なぜ、生物が毒を持つようになったのか？」という疑問に対する答えは、毒を持つ生物によって異なる。生物は、捕食（食べる）・被食（食べられる）という食物連鎖の中で生き抜くために、環境に適応して進化してきた。毒ヘビの場合は、唾液腺から毒腺

が進化しているという論文が報告されている。また、ハブは成人の拳ぐらいのネズミでも丸呑みし、糞には毛しか出てこないという。つまり、毒液中に含まれる酵素群によって効率よく消化しているのではないかと推測され、ハブは新鮮なまま効率よく獲物を食べるために毒を持ったという説の方が、研究論文や実話を参考にしても有力である。

毒ヘビは世界的に古くから研究されているにもかかわらず、それぞれの毒成分の作用機序についての詳細は分かっているものが少ない。また、発見されていない成分もおそらく数多く存在する。毒を持つ生物によって、また、同じ種の生物でも環境によって毒の成分やその作用が異なっているという論文は少なくない。実際に、奄美大島（徳之島）、トカラ列島（小宝島、宝島）、先島諸島（石垣島、西表島）に生息しているハブ間で、毒成分の酵素量やその性質が異なるとの報告がある（この研究は熊本県崇城大学の千々岩グループが行っている）。同じハブでも島間で毒酵素の働き方が違う。それはなぜか？現在のところ、捕食する獲物が島間で異なっているからではないかと推測されている。多種多様な毒ヘビの毒は、研究者を虜にしまうのかもしれない。

- ・「毒」とは抽象的な表現である。それぞれの毒タンパク質は、生体（獲物）のどこかにターゲットとしているところ（もの）があり、確実にその働きを破壊する。
  - ・毒ヘビの毒成分の作用について、その詳細がまだ分かっていないものが多い。
  - ・毒ヘビの毒成分中には、まだ発見されていないものが存在する。
- 私が思い付くことを挙げてみた。ヒトは、謎めいている「毒」に魅力と可能性を感じるのかもしれない。

## Q5 なぜ、塩井成留実が「蛇ヘビ」研究の虜になったのか？

この答えは、私しか分からないので、私が答えます。

### ・現在の研究紹介

突然ですが、皆さんは「毒を持つ生物は、自分の毒が怖くないのか？」と不思議に思いませんか？ハブやマムシは、気性が荒く、お互いにけんかをして咬み合う光景がよくみられます。しかし、ハブは、ハブに咬まれても死にません。それは、ハブやマムシの血液中には、自分の毒の作用を中和するものが含まれているからだと考えられています。上記でも述べましたが、毒ヘビの毒成分は主にタ

タンパク質酵素です。私たちは、毒タンパク質の研究をしているわけではなく、その毒タンパク質の働きを抑える（専門用語では「阻害」といいます）毒ヘビ血液中のタンパク質の研究をしています。毒ヘビの毒成分に限らず、さまざまな生物の「毒」については多く報告されていますが、毒ヘビの血液成分に関する情報はほとんどありません。私たちは、ハブやマムシの血液成分を網羅的に調べ、新しいタンパク質を多く見いだしてきました。その中には、ある毒タンパク質を強く阻害するものがあります。私たちの研究の内容は「ヘビの毒について」ではなく「ヘビの毒の働きをなくす阻害タンパク質について」です。いつか機会があれば「ヘビの毒の働きをなくす阻害タンパク質について」というタイトルでも紹介させていただきます。

#### ・毒ヘビの研究をするきっかけ ～毒ヘビの研究を通じた、ヒトとの出会い～

現在の研究のモチベーションにもなっている二つのエピソードを紹介します。

#### ❶ エピソード1：寺田成之教授との出会い

長崎の田舎から進学のために福岡へ出て行く時、父は私に「大学生活中に自分が“師”と呼べる人を見つけて、大学を辞めてもいいから何があってもその人に付いて学びなさい」という言葉をくれました。

福岡大学理学部化学科は、大学3年次生の後期に研究室配属があり、卒業論文の指導教官や研究テーマが決まります。大学3年次生だった私は、研究室を研究テーマの内容で選んだというよりは、寺田成之教授に卒論を指導してもらいたいと思っていました。寺田教授は、タンパク質の講義内容や毒ヘビのネタになると、生き生きした目で楽しそうに話していたのを覚えています。また、試験前に寺田教授の部屋を訪れた時、研究室に放置してあったピーカー中のミョウバンの結晶を見て、寺田教授は「いや～、僕も自分たちが見つけたタンパク質の結晶を見たいね～」と輝いた目でおっしゃっていました。当時は「タンパク質の結晶」「立体構造」など、専門用語はチンプンカンプンでしたが、寺田先生のようなヒトを虜にする研究とは何か？ それを知りたい、また、自分もその面白い研究に携わりたいと思い「毒ヘビの研究」という新しい世界の門をたたくことになりました。

#### ❷ エピソード2：奄美大島に向かう船の中で現地の方との出会い

私たちの研究室では、サンプル採取のために8月に鹿児島県奄美大島の東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設 (<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/amami/amami-top.html>, 2014/11/17アクセス) を訪れます。鹿児島市から奄美の古仁屋港まで約17時間船に揺られて現地に向かうのですが、私が大学院生のころ（約7年前）、船の中でハブの被害に遭った女性とお話する機会がありました。その女性は、若い時に目の前の赤ちゃんを助けるため、素手でハブをつかんだ時に咬まれたことがあると、その咬まれた痕を見せてくれました。涙ぐんで話をしてくれました。今、子どもを持つ親の立場になり、自分の子どもの前に毒ヘビがいたら…と想像すると、鳥肌が立ちます。毒ヘビの被害の数はがん患者などに比べて少なく、その治療薬の市場ニーズは多くありません。また、私たちの研究は基礎研究であり、すぐに薬の開発に結び付くとは限りません。しかし、私はこのような基礎研究こそ大学研究者が推進すべき研究ではないのかと考えています。そして、少しでも毒ヘビの恐怖や苦しみを抱えている人の助けになればと思い、日々の研究に精進しています。

私は、毒ヘビの毒成分およびその血液成分を取り扱って研究していると、いまだ分かっていないことや報告されてないことがたくさんある現状に気がきました。私たちは、新しいタンパク質を数多く発見して、その役割について調べています。現在の研究は「なぜ、毒ヘビは自分の毒では死なないのか？」という素朴な疑問から始まりました。「毒ヘビの血液成分は、なぜ効率的に毒の働きをおさえるのか？ どこで？ どうやって？」と、謎だらけです。

どのようにして研究でその真相を証明していこうかと悩ましいですが、まだ誰も知らない答えを探すことに魅力を感じ、実験も楽しくて仕方ありません。また、学生たちやいろんな分野の専門家と「毒ヘビ」または「毒」について議論、討論しているとあっという間に時間が過ぎてしまいます。

私は「毒ヘビは、どうやって自分の毒から身を守る？」。その謎解きに挑んでいます。

おわりに

～福大の毒ヘビ女からのメッセージ～

「なぜ?」「どうして?」

それ（疑問に思うこと）は、何かの始まりです。

自分の知らない世界をのぞき見るきっかけかもしれません。

自分の知らない世界…。

なんだか、ワクワクしてきませんか？

納得する答えになかなかたどり着けないこともあるでしょう。

もしかしたら、答えなんてないものもあるかもしれません。

たくさんの情報を得たとき、それは本当に正しい情報なのでしょうか？

いろんな情報を自分でまとめて、答えを見つけることや考えることは  
難しいように思うかもしれませんが、いろんな人に話を聞いてみてください。

自分で、また、**友達**や**家族**とその答えについて「ああでもない、  
こうなんじゃない?」と悩んで、答えを見つけようとするのも楽しいと思います。

その答えが分かったときの興奮は皆さまに**素敵な笑顔**を与えたいと思います。

福岡大学理学部についてはこちらのウェブサイト (<http://www.sci.fukuoka-u.ac.jp/index.html>) をご覧ください。また、私が投げ掛けた質問に対する皆さんの答え、ご意見やご感想は、国際科学技術財団のウェブサイト・研究助成ブログ (<http://www.japanprize.jp/subsidy.php>) までご連絡ください。

塩井 成留実（しおい なるみ）

1981年生まれ。福岡大学理学部助教。研究テーマは毒ヘビの毒およびその血液タンパク質についての解析。

## 「学んで予防！《福大病院健康セミナー》」 を開催して

福岡大学病院医療情報部事務室長 金森 勝俊

はじめに

2014（平成26）年9月18日午後2時、衝撃が走った。

2013（平成25）年9月にスタートした「学んで予防！《福大病院健康セミナー》」が丸1年を迎えたこの日、会場となった福大メディカルホールに向かう方たちの長蛇の列ができていた。その数は約200人以上で、一気に大混乱となった。300人が収容できるメディカルホールは受付開始後10分で満席となった。事前に準備したサテライト会場でも椅子が足りなくなり、病院内の椅子をかき集める事態に。400部用意した資料は足りるのか？ すぐに増刷開始…。



2014(平成26)年9月18日、セミナー開催前の様子



福大メディカルホールへ向かう参加者の列

このセミナーの企画当初は「100人ぐらい集まれば大成功」と考えていたが、始めてみるとたくさんの方々が参加してくださっている。毎回、初めて参加される方も多いが、リピーターも増えてきた。常連さんとも顔見知りになり「今日も来たよ!」「今日は町内の会議が終わったけん来たばい」と声を掛けてもらえる。同じ町内の方、お世話になった自治協議会の役員の方々も来てくれる。「あ、そ

こには毎回定位置に座る方が…。城南区医師会の理事も来てくれている。毎回、本当にありがたいという気持ちでいっぱいになる。

## その1. 始まりは思いつきから

2012（平成24）年秋、ある日の午後、福大病院西別館4階医療情報部長室で志村医療情報部長とのひよんな会話からこの企画は始まった。「福大病院ではメディカルセミナーという医療者向けの講演会を開催しているが、地域住民に向けての情報発信ってやってないよね」「地域との連携強化のためには医療機関ばかりではなく、地域コミュニティーへの情報発信も必要だよ」と、志村部長。それに対して「市民の方々が聴きたいテーマで定期的に健康講座を開催してみても？」「福大病院だけの単独開催ではなく、この周辺にはたくさんある病院や診療所があるので、そういった先生方にも協力してもらってコラボレーションしたら面白くないだろうか？」と私が答えると「それって面白いかも」「公民館などに出向く出前講座の逆バージョンだね」と、志村部長。近隣の病院や医療センターなどでは、既に取り組みされているが、そういったことを大学病院が主催しているのはあまり聞いたことがない。福大病院には地下鉄福大前駅と直結した福大メディカルホールがあるから、雨の日でも濡れずに会場に入れる。「福大病院を知ってもらいたいチャンスだね。ちょっと企画してみよう。そして病院の執行部に相談しよう」という話になった。

## その2. 思いつきから企画へ

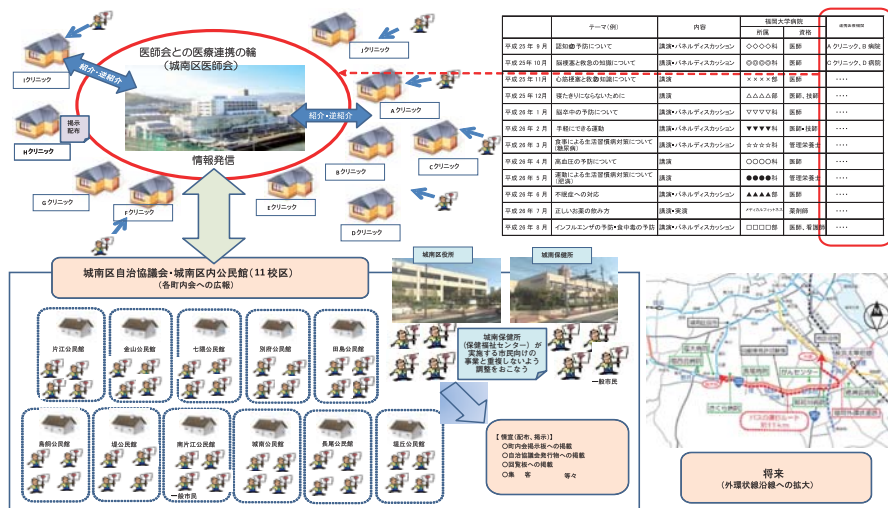
まず、この企画をどう実現するか？ ①どういったコンセプトにするか②講演者を誰にするか③開催する時間帯をどうするか④テーマをどう選ぶか⑤企画をどのように広報するか。こういったことは福大病院だけで企画を考えても面白くない。春や秋の学会シーズンになるとさまざまな学会や多くの医療機関がいろいろな市民公開講座を開催しているので、コンセプトが大事になる。病院が企画するので、病気がテーマになるのは避けられない。しかし、病気だけをテーマにした企画はそこら中に溢れている。ではどうするか？ どのような企画なら来てもらえるか試行錯誤を繰り返した。まずは企画に向けて、病院執行部の了解を得ないと先に進まない。そこで2012（平成24）年11月14日、病院執行部会において企画提案を行った。目的や内容、参加対象者、また当院の事業計画である「地域との

連携の強化」に役立つことなどの概要をまとめ、志村部長が熱弁を振るった。すると、何とか実施に向けての了解を得ることができ、正式に医師会や城南区役所と相談できる準備が整った。ただし一言「できるだけ費用を掛けないように」とチクリ。年が明けた1月、福岡大学の地域ネット推進センターから城南区役所企画振興課を紹介してもらい、事前打ち合わせの場を設けていただけるとの朗報が届いた。城南区役所に向くと、席上には地域支援課や城南保健所健康課の方も同席してくださっていた。城南区はこの企画を非常に好意的に捉えてくださり「地域のニーズを知りたい」というこちらの要望に対しては、アンケートの作成から自治協議会長や公民館長が一同に集まる会議への参加まで協力してくださった。その結果、健康講座（自治協議会や公民館において保健所が主催するもの）に参加する住民を対象にアンケート調査を行うことができ、475人からの貴重な情報が収集できた。3月になって、講演者を誰にするかについて、福岡市医師会から紹介された竹田城南区医師会長、講演会を担当する繁田理事や地域連携担当の安藤理事に対して、住民へ行ったアンケート結果を基に次の六つの説明を行った。

- ① 福大病院としては今まで以上に地域への情報発信を行っていききたい。
- ② 城南区の医療機関と連携して講演会を開催したい。
- ③ 福大病院だけではなく地域の先生方と一緒に開催したい。
- ④ 地域住民が知りたいことに応える内容にしたい。
- ⑤ 参加者として期待できるのは60歳以上の方が大半であるため、平日の昼間の時間帯に開催したい。
- ⑥ 認知症や脳梗塞、生活習慣病、寝たきりの予防など、高齢者特有の不安や目の前にある危機に対しての情報を求める声が多い。

以上の説明の結果、協力することを快諾していただいた。

5月には城南区医師会理事会で理事の先生方から賛同を得ることができたが、一般の健康講座では数十人の参加者しかいないこともあり「福大病院ではどの程度の参加者を見込んでいるのか？」など心配の声が上がった。城南区11校区から各10人ほど参加してもらえれば、100人を越えることが期待できる。これまでの経験で、会場に100人入れば講演者もやる気になってくれるのではないかと伝えたところ、安心してもらうことができた。



城南区医師会（地域医療機関）との共同による「学んで予防！《福大病院 健康セミナー》」開催概念図

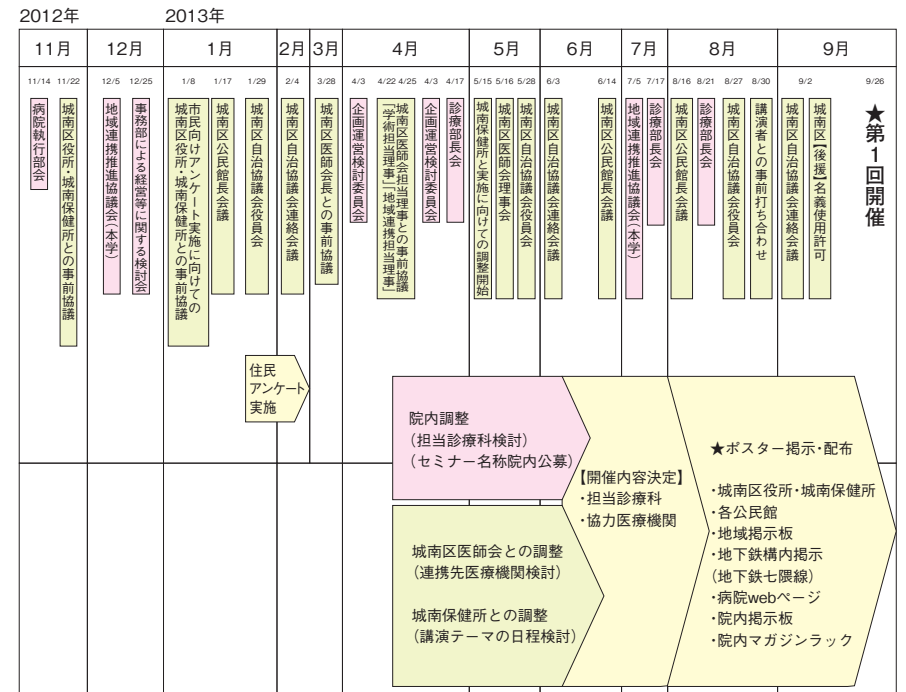
その3. 開催に向けての準備へ

アンケート結果を踏まえた城南区医師会との打ち合わせの結果、次の三つのことが決まった。

- ① 病気の予防や健康をテーマに毎月1回開催すること。
- ② 開業医の休診が多い水曜日から木曜日の午後に開催すること。
- ③ 参加者が冬でも明るいうちに帰れるよう午後4時までに終了すること。

その他で決まっていないのは、一番大切な、セミナーの名称と開催スケジュールとなった。そのため、まずは第1回の開催に向けて病院内の調整に奔走することになった。これまでもさまざまな会議で説明してきたが、実現が近づいたことでさらに説明を重ねた。それと同時に、セミナーの名称については病院内で公募した中から「学んで予防！《福大病院健康セミナー》」が選ばれた。選ばれた理由は、執行部の一人が「参加者自らが福大病院に足を運び、病気の予防や健康について学んでもらいたい。この名称には、その願いが込められている」と発言し賛同を得たからだ。実は、このタイトルを候補の一つとしてノミネートしたのは自分だったが、いいタイトルが選ばれたと思った。次は、スケジュールだ。自治協議会の役員からも「あらかじめスケジュールが決まっていると興味があるもの

に参加できる」と助言を得ていたので、1年間のスケジュールを決めることにした。アンケートで期待の多かったテーマや季節柄伝えたいこと。また、あまり知られていないけれど大事なことを織り交ぜたい。まずはメインとなるテーマを決め、その後、脇を固めていくことにした。しかし、ここからが大変だった。福大病院の講演者選定や医師会との調整などで、第1回の開催が正式に決まったのは5月に行われた城南区医師会理事会だった。



第1回開催に向けての「学んで予防！《福大病院健康セミナー》」開催検討スケジュール

その4. 第1回開催に向けて

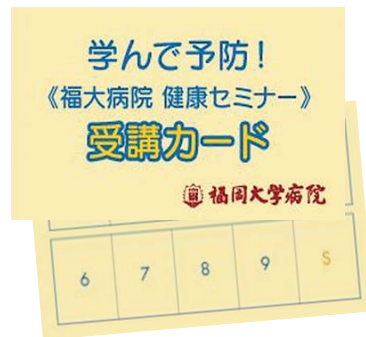
第1回のテーマは、地域住民475人に対するアンケート調査の結果一番関心が高かった「認知症の予防について」とし、2013（平成25）年9月26日午後2時30分から開催することになった。講演者との事前打合わせは開催まで1カ月を切った8月末に行われたが、先生方はさまざまな講演会で多くの経験を積まれて



いたのでアイデアが湧き出てきた。福大病院の合馬先生が「認知症と予防について～今すぐ始めよう！認知症予防～」をテーマに、医師会より推薦された濱田先生と江下先生がそれぞれ「“認知症”正しい理解でより良い介護！」「認知症予防と城南区地域連携」をテーマに、認知症に対する家族の気付きや認知症の治療や介護、福岡市や城南区の取り組みについて講演していただくことになった。次に、多くの方に来ていただけるよう公民館を回り、地域の掲示板へのポスター掲示や、回覧板で他の地域の方にも知らせていただけるようお願いをした。リピーターが増えるようにとの工夫も考え受講カード（スタンプカード）を発行し、参加10回目と20回目に記念品をプレゼントすることにした。開催日の1週間前になると、天気が気になりだした。台風は？ 雨はどうか？ 残暑は？ 夜のNHKニュースの天気予報を見て一喜一憂、このまま天気が続くよう毎晩願っていた。そして迎えた2013（平成25）年9月26日、天気は晴れだが少し暑い。受付開始1時間前の午後1時から準備を始めたところ、既に参加者と思われる方々が集まっている。講演者も時間通りに来場され、スライドの確認が終わった。そして午後2時の受付開始、列を作っていた参加者の入場が始まった。各部署から集まったスタッフは、資料を渡し会場への案内やホール内での誘導など、キビキビと動いている。開演5分前にはおおむね入場が終了した。



第1回セミナーの様子



受講カード

講演が始まると、参加者は一生懸命に講演を聴いているが、そこで予期せぬクレームが届いた。「手元が暗いからメモが取れない。もっと明るくしてほしい！」といううれしいクレームだった。参加者がメモ欄を作った資料にメモをしている。3人の先生がテンポ良く話を繋いでくれ、あっという間に90分が過ぎ、会場から

は多くの拍手を頂くことができた。参加者は予想を大きく上回る241人と、これまでにこのホールで開催した講演会の最高記録ではないか。講演後の質疑応答では自分や家族の病気に対する不安があるのか、多くの質問が寄せられ先生方が丁寧に答えてくれた。参加者からは「楽しかった」「ためになった」「来て良かった」との声を多く頂き、思わず涙が出てきた。一方、アンケートには手際の悪さや進行の不手際を指摘する声も記されていた。また、講演者の先生方からも多くの助言をいただくことができ、次回に向けた改善の材料にすることができた。

第1回講演終了後の歓談の様子  
(左から坪井教授、江下先生、濱田先生、合馬先生)

## その5. 課題と対策

こうして回を重ね春になり、第10回を過ぎたころから参加者が300人を超え、ホールの収容人数を超える可能性が出てきた。そこで急ぎょ、病院新館地階の多目的室に同時中継の設備を備え、サテライト会場として利用できるようにした。ところが、サテライト会場の試験運用を始めた2014（平成26）年9月18日（第14回）には545人の参加者が押し寄せた。テーマは「健康に歩く！～足の血管を大切にしましょう～」。内容が良かったのか、資料は事前に400部用意していたが、増刷しても終演までに配布が間に合わなかった。開演しても参加者が増え、サテライト会場でも椅子が不足して多くの方々に迷惑を掛けてしまい、参加者からも運営の不手際に対するお叱りの声が多く寄せられた。言い訳はいくらでもできるが、とにかく、せっかく来ていただいた多くの方々に迷惑を掛け不快な思いをさせてしまったことは事実だった。



2014（平成26）年9月18日（第14回）参加者で満員となった福大メディカルホール



病院新館地階多目的室のサテライト会場も参加者で満員に

病院内では「これ以上参加者が増えたらどうするのか？ 事前申し込み制にしたらどうか？」との意見もあったが、参加者の大部分を占める高齢者からは事前予約が苦手と聞いていたし、FAXが自宅にない方もいる。事前予約制にしたばかりに参加者数が伸び悩んだ講演会を数多く見てきた。

そして、医療情報部でも十分にシミュレーションを行い「今回こそは」と迎えた2014（平成26）年11月20日（第16回）、天気は快晴だった。開場前の行列に対しては受付開始50分前より整理券を配布して、受付開始と同時に20人ずつ受け付けを行った。600部用意した資料が手際よく配布されていく。受付者数が340人を超えたところからサテライト会場に案内し約400人の参加者は開演までに会場にきっちり収まった。限られたスタッフが自分の役割を果たしてくれた成果だった。講演は滞りなく進み、予定通り終了した。おなじみさんが声を掛けてくれた。「また、次も来るよ」「ありがとう」。スタッフからも「前回より改善されている」と励ましの声を頂いたと報告があった。



2014（平成26）年11月20日（第16回）の様子

### 終わりに

このセミナーは、企画段階から城南区医師会と福岡市城南区役所の協力が得られてスタートすることができた。福岡市交通局も地下鉄七隈線沿線を中心にポスターの掲示などで協力してくださっている。さらに第15～17回においては、地下鉄グッズの提供などタイアップキャンペーンも展開してくださっている。今後もこの沿線でのタイアップ企画が進みそうである。城南区役所の橋渡しで、10月から城南区に隣接する中央区草香江公民館に健康セミナーを案内したところ、公民館長や自治協議会会長が「地下鉄を利用することで六本松と福岡大学病院が10分しかかからないことに気付いた」「あらためて交通アクセスの良さを実感した」「今日はよく来てくれた」と喜んでくださった。講演した先生方はこれまでに25人を超えた。開催前の事前打ち合わせでは、半信半疑な方も多いが、終了後には上気した顔で「やって良かった！」「また機会があればやりたい！」と好評のようである。こうして少しずつではあるが、地域との連携の輪が広がっている。既に2016（平成28）年3月までの予定が組まれている。今後、どんな方々が参加してくれるか楽しみであるし、どう地域に根付かせていくか思案のしどころだ。近ごろ、病院の中を歩いていると廊下ですれ違う方や待合室に座っている方の顔がセミナー参加者に見える。中には「今度、行きますよ！」と声を掛けてくだ

これまでの「学んで予防！《福大病院健康セミナー》」の参加者数

		テーマ	参加者数
第1回	2013/9/26(木)	認知症の予防について	241
第2回	2013/10/24(木)	脳卒中の予防について	202
第3回	2013/11/14(木)	インフルエンザや食中毒の予防について	169
第4回	2013/12/19(木)	胃や腸で気になることはありませんか？(胃もたれやお通じについて)	221
第5回	2014/1/16(木)	寒い時期、心臓病から身を守ろう！	250
第6回	2014/2/5(木)	息切れを“トシ”のせいと思っていませんか？	231
第7回	2014/2/27(木)	花粉症などのアレルギーについて	241
第8回	2014/3/20(木)	寝たきりにならないための基礎知識	290
第9回	2014/4/17(木)	運動による生活習慣病対策～肥満や糖尿病の予防～	320
第10回	2014/5/22(木)	高血圧の予防から治療まで	346
第11回	2014/6/19(木)	ちょっとしたことで悩みすぎることはありませんか～不眠症やうつ予防について～	373
第12回	2014/7/24(木)	夏バテや熱中症の予防について！～夏のりきるための食事のお話～	350
第13回	2014/8/21(木)	東洋医学ってなんだろう～漢方薬や鍼灸治療について～	374
第14回	2014/9/18(木)	健康に歩く！～足の血管を大切にしよう～	545
第15回	2014/10/22(木)	お口の中のケア・歯周病の予防～おいしく食べて病気を予防～	279
第16回	2014/11/20(木)	胃や腸の病気の予防と治療	401

## 地域ネット推進センターだより

# 地域のスポーツ学習支援活動

スポーツ科学部講師 田場 昭一郎

さる方もいる。思わず「こんにちは。ありがとうございます」と言ってしまう。

医療情報部のスタッフは、もう次の準備を始めている。公民館には約9,000枚のチラシを配布した。事前打ち合わせの準備も進めている。そうやってどんどん先に進んでほしい。このような素晴らしいスタッフに恵まれて本当に良かった。次回（第17回）は、一番人気の「認知症の予防と治療」がテーマだ！

### 後日談…

タイアップキャンペーンでお世話になった福岡市交通局橋本管区の松原駅長から「橋本駅に隣接するショッピングモール“木の葉モール橋本”の支配人から、ぜひ福大病院とのタイアップ企画を行いたいと提案があった」という連絡が入った。福大病院の取り組みを木の葉モール橋本の支配人に話したところ「前向きに進めたい」とのことだったので、担当者と次の五つのことを打ち合わせるようになった。

- ①ネーミングはどうするか？
- ②開催頻度は？
- ③ターゲットは？
- ④広報や集客の方法はどうするか？
- ⑤スタンプカードの共通化はどうか？

今後、どういう展開になるか楽しみで、うれしい気持ちが膨らむ一方、うちのスタッフの顔が脳裏をよぎる。年末の忘年会や年頭のあいさつで、「今年は電子カルテシステムの更新を控え、多忙な1年になる」と話したばかりなのに…。「また仕事を増やして！」と叱られそうだ。

前述の2014（平成26）年12月18日に開催した第17回「認知症の予防と治療」は、過去2番目となる444人の参加者を迎えることができた。そして次回、2015（平成27）年1月15日には「脳卒中の予防と治療」のセカンドクールが開催される。同年3月には、開催第20回を迎えることになっている。10回参加の記念品は、奥菌事務長と考えた「熱中症／インフルエンザ警告計」が参加者から好評だった。20回参加の記念品の予定は未定だが、早く決めなければ。

金森 勝俊（かなもり かつとし）  
1961年生まれ。福岡大学病院医療情報部事務室長。

### 1 教育現場における水泳

地球上に存在する全ての生命の源は「海」であり、私たちが住む地球の約70%はその「海」で覆われています。さらに「人」の体は約60%（胎児は約90%、赤ちゃんは約75%、子どもは約70%、成人は約60%、老人は約50%）が「水」で構成されています。つまり「人」と「水」は切っても切り離すことができない関係にあります。また、四方が海で囲まれた環境において文化が発展したわが国では歴史的にも日本泳法（古式泳法）が武芸の一つとして継承されてきました。その中では通常の泳ぎ方だけでなく、甲冑を着用（武装）して泳ぐ着衣水泳、格闘技術（立ち泳ぎの体制での火縄銃の射撃、海や川での戦闘）としての水泳、護身（自己保全能力）のための水泳が武士のたしなみとして行われてきました。また浮世絵師の葛飾北斎（かつしかほくさい）の北斎漫画でも日本古来の水泳が絵画として残っています。このように江戸時代初期から「水術」「踏水術」「游泳術」という教習体系として日本泳法の各流派が確立され、明治以降も「水練」として学校教育に導入、技術とともに精神的なものも含めた水泳の指導法が伝承されてきました。しかし近年は、生活環境の変化から水泳に苦手意識を持つ児童が増加傾向にある一方、幼いころからスイミングスクールに通っている児童は水泳に対して自信を持ち、小学生の泳力の差も学力と同じく二極化現象にあります。そこで今一度、水泳（泳ぐ）という授業（体力・技能・精神）について考える必要性を感じます。

人が運動を行う環境は、基本的に「陸上での運動」と「水中での運動」に大きく分けられると考えます。つまり、陸上で行う「各種スポーツ」と水中で行う運動の総称でもある「水泳」を同等に比較することに甚だ疑問を感じるし、多くの人が「水泳＝競泳」というイメージを持っている傾向にあると感じます。泳げな

いは苦手意識が強く、水泳に嫌悪感さえ抱く者も少なくないのは確かでしょう。しかし、苦手であるからこそ、生命に関わる水泳を積極的に取り組み、その意味や意義を伝えていかなければならないと考えます。安易な授業科目の選択制導入により、選択した科目を学習する「意義」について焦点が定まらないままに「一芸に秀でたものがあれば申し分ない」といった風潮を見直すべく、今一度、教育の在り方を考える必要性を感じます。

## 2 那珂小学校での水泳指導

児童教育における水泳の授業で1人の教師が30人以上の児童を細かく指導するのは極めて困難であり、このような状況では教師の注意力低下により危険性も高まります。文部科学省の学習指導要領に基づき、幼児期から中学校までの義務教育の中で「泳ぐことの意義」を理解して「適切な泳法」を学び、そして自分の身を自分で守るための「自己保全能力」を身に付ける必要があります。そして「水」と共存して生活していることへの理解をさらに深めるためにも「水と親しむ」といった環境提供とその現場教育が手薄になってはいけません。

福岡大学水泳部では、このような教育的背景を踏まえて小学校の現場に関わっている先生、そして大学の地域ネット推進センターの方々のご協力によって、平成22年度から福岡市立那珂小学校で水泳授業のサポートを行っています。この時に現場指導のアシスタントに当たる学生たちは、児童の腕や足を取って声を掛けながらサポートし、特に水を怖がる児童に対しての接し方に細心の注意を払いながら、児童と同じ目線になってコミュニケーションを取ります。そして、授業が終わった後も児童と一緒に給食を取って帰ります。この短時間のサポートの中で



那珂小学校での指導風景



福岡大学でのスノーケリング指導

児童と学生が信頼関係を築くためには、相手の気持ちになって思いを伝えるソーシャルスキル（社会技能）が問われます。今回の『七隈の杜』のテーマに相応しい、泳ぐという技の「伝」が垣間見える実践的な教育です。

## 3 スノーケリングの導入（泳ぎが苦手な子どもに対する実践事例）

一般の成人にも「泳ぐことの意義」に理解を得られないような現状の中で、児童教育の現場でも冒頭で述べたような二極化現象が起っています。その現状を踏まえ、水泳の授業を苦痛（泳ぐことが苦手）に感じている児童、生徒、学生、そして大人のためにも水泳指導の多様化が求められます。水という特殊な環境の中で、浮くこと、潜ること、沈むこと、走ること、浮遊すること、これらのさまざまな運動形態により、水中では多岐にわたる効果が得られます。苦手意識を持つ子どもたちに対して、指導者が楽しく泳ぐという技を伝えることによって意識を変えることができ、二極化の問題も軽減できると考えます。

そこで泳ぐことが苦手だと感じる児童（特に泳げない子ども）にフィン（足ヒレ）やマスク（鼻まで覆われたマスク）を使ってみました。水への恐怖心を克服させるための手段として、あえて機能性の高い道具の活用です。その結果、これまで「呼吸が苦しい」「沈むから怖い」といった負のイメージによって水を怖がり、水泳から逃げていた子どもたちの表情が一変して「もっとやりたい」「今までに知らない世界」「いろんな海に行って潜ってみたい」という声を聞く事ができました。今後の教育は「水泳を通して水との共存を伝えていく方法」を開拓していかなければならないということに気が付きました。実際に「水泳が嫌い」または「水泳が苦手」と思っている大学生も、大学で必修科目として導入されている



ピュアロードと呼ばれる屋我地島の海岸



沖縄のダイビングスポット

る授業内容を工夫することで、一般の方々が思っている以上に前向きに取り組んでくれます。私自身もこれまでずっと水泳に関わってきた“つもり”でいましたが、そんな私が「もっと水泳を身近な運動として上手に伝えていきたい」と原点に立ち戻るきっかけとなりました。

#### 4 自然と共存することの意味

先日、ある人が鈍行列車の旅で感じたことを新聞紙面で語っていました。「リニア中央新幹線に関する記事によると“時速500<sup>キロ</sup>を超えるスピード”や“走行区間の約86%がトンネル”という謳い文句、自然を見て何かを感じることもなく、ただ時間を節約して移動することによって得られる経済的効果が近未来に本当に必要なのか、自然の風景がもたらす生きた時間を取り戻すような心のゆとりも必要なかもしれない」といった内容でした。水泳の授業において自己保全能力を身に付けることはもちろん重要です。それに加えて、海に囲まれた島国である自国の自然環境を知ることや、太陽と月と海の潮干き（満潮や干潮）の関係なども伝えることができれば、水難事故、降水事故、洪水事故による被害を少しは防げることでしょう。2014年の10月に沖縄の北部に位置する屋我地島と古宇利島にアクアスポーツの視察に行きました。その時にちょうど台風18号と遭遇し、本当の海の怖さを肌で感じました。台風の通り道と言われる沖縄の現地の方々が自然とうまく共存している姿に触れることができ、多くのことを感じました。

自然災害というのは、情報収集が豊かになっても防ぐことができるものではなく、最終的に自分自身の体力（泳力）があったとしても助かるかどうか分かりません。しかし長い人生の中で、自然災害に巻き込まれる可能性はゼロではないからこそ「水泳」つまり「水」とうまく共存する術（すべ）を身に付ける教育が必要です。そういう意味でも、「水泳教育」は他の体育・スポーツ種目よりも重要な教育内容と言えるかもしれません。水に関わる現場からそのことを次世代に伝えるためにも、水泳教育に携わっているわれわれには責任と義務があると感じます。水に関われたことに誇りを持って、これからも多くの児童、生徒、学生、そして成人の方々に「水泳の必要性和楽しさ」を伝えることができると、切に思います。

田場 昭一郎（たば しょういちろう）

1972年生まれ。福岡大学スポーツ科学部講師（水泳部監督）。研究テーマは競泳における実践研究とコーチング、水泳・水中運動の実践研究。

## 国際交流

## 日本での10年間を振り返って



商学研究科商学専攻 博士課程後期修了

于 曉 爽 (中国)

私は、于曉爽（ウギョウソウ）と申します。福岡大学大学院商学研究科で博士課程前期と博士課程後期合わせて6年半学び、2014年9月13日に博士（商学）の学位を取得することができました。博士論文のタイトルは「戦略的人的資源管理と企業文化—中国企業における人的資源管理の指針を求めて—」です。2014年10月1日からは大学院の研究生としてさらに勉強を続けております。



大連中山広場

私は2004年4月6日に日本に参りましたので、日本に来てから既に10年半がたちました。私は中国で大学を卒業した後4年間企業で働きましたので、日本に来た時には26歳になっておりました。その上、日本に来てから大学に入り直し、博士課程後期を終え、博士学位の取得まで相応の時間が掛かりました。少し回り道をしたかもしれませんが、しかしながら、今考えてみますと、回り道をする過程で、日本人のいろいろな方にお世話になり温かい親切を頂き、それによって「生きていく上で何が大切であるか」を学ぶことができました。日本で勉強を続ける力を



与えていただいたと思います。せっかくこのような文章を書く機会を与えていただきましたので、日本での10年間を振り返り、頂いてきた温情の数々をもう一度かみしめ、私自身が今後生きていく上での糧とさせていただきますと思います。

私は、遼寧省遼東半島最南端の港町大連で生まれました。大連は、旧ロシア人街や日本統治時代の建物が残る異国情緒豊かな町として有名です。近年は多くの日本企業の工場や支店が進出している町としても有名です。高校の数学教師だった父は私が高校1年生の時に急逝しましたが、亡くなる前日まで全ての教科を家庭教師さんながらに指導してくれたことを覚えております。母と姉は現在も大連で元気に暮らしております。私は、大学卒業後、主として日本企業と取引を行う貿易会社に入社し、4年間事務を担当しました。社長の奥さんは、毎日私のためにお弁当を作ってください、今でも感謝しています（その代わりに、毎日社長の愚痴を聞かされました）。お客さんは日本人ばかりでしたので、日本人の厳しい品質基準に接し、次第に日本の経営管理や日本文化に興味を持つようになり、4年後に日本留学を決心しました。

まず最初に、北九州市（大連の姉妹都市）にある折尾愛真短期大学に入学しました。来日した翌日の入学式後の経験を今でも忘れることができません。私はアパートに帰る途中、完全に道に迷ってしまい、泣いていました。その時、お風呂

帰りと思われる母娘（たぶん50歳台と30歳台）が、コンビニで店員に住所までの道筋を聞いてくれ、わざわざ土砂降りの雨の中、傘もささずに20分以上かけて探してくれ、最終的に私をアパートまで連れて帰ってくれました。その時、私は日本語がよく話せなかったため御礼を十分に伝えることができなかつたことを悔やんでおりますが、その母娘は「勉強頑張ってください」と逆に励ましてくれました。その時のことを思い出すと、今でも母娘の温かい気持ちに涙が出ます。

短大を卒業後、九州国際大学の3年次生に編入しました。母と姉に学費を頼ることはできなかつたので、アルバイトを探し、スーパーマーケットのレジを担当しました。店員の皆さんは私に親切にしてくれました。自転車を盗まれたときには、おばさんが自転車をプレゼントしてくれました。貧しい食生活をしている私のために、いろいろな食品をくれる人もいました。大学を卒業して福岡大学大学院博士課程前期に進学するためそのアルバイトを辞め、引っ越しをする際には、3人のおばさんがお金を出し合って饞別せんべつをくれました。その中の一人は、私が福岡市へ引っ越した後も、安否を尋ねる手紙をくれました。おばさんたちの優しい気持ちにどれだけ勇気づけられたか分かりません。おばさんたちとは今でも交流を続けております。

福岡市へ引っ越し、大学院に進学した後も、博士課程前期1年次生までは、北九州市で勤めていたスーパーと同系列のスーパーでレジのアルバイトを続けました。ここでもアルバイトの仲間たちがとても親切にしてくれて、福岡市に引っ越したばかりで周りに友達が1人もいなかったにもかかわらず、寂しい思いをすることはありませんでした。この時の仲間たちは、今でも忘年会や送別会に誘ってくれます。その後、国費留学生に選抜されたことを含めていろいろな奨学金を頂



大連星海広場



大連の日本風情街

き、また福岡大学内のいろいろなアルバイトをさせていただくことにより、大学の外でアルバイトをする必要がなくなり、大学院の勉強にさらに集中できるようになりました。福岡大学内では、大学院事務課、図書館、留学生別科、言語教育研究センター、総合情報処理センター、商学部などでアルバイトをさせていただきました。特に、大学院事務課では現在に至るまでの5年半以上にわたりお世話になり、仕事上のことから健康管理に至るまで公私にわたってご指導いただき、感謝に堪えません。

肝心の大学院での勉強については、私は学問の飲み込みが悪く、日本語の文章力も足らず、何度も研究を途中で投げ出したくなりましたが、指導教授の中川誠士先生には辛抱強くご指導いただきました。特に、英語文献の読解力を基礎から鍛えていただき、また一つの英語文献を何度も何度も繰り返し読み返して理解を深めていくことの大切さを教えていただきました。これまで以上の努力を今後続けていくことで、先生のご恩にお応えすることができればと思います。

この10年間に於いて、前述した以外の方々からも、ここでは書ききれないほどの親切とご恩を頂いてまいりました。その親切とご恩に対する感謝を忘れずに、これから私が出会うであろう人たちに、日本人であろうと中国人であろうと、私が頂いてきたのと同じ親切と誠実さを持って接していきたいと思っております。



博士課程学位授与式で指導教授の中川誠士先生と

于 暁爽（う ぎょうそう）  
1977年中国大連生まれ。2004年4月に来日。2014年9月に福岡大学大学院商学研究科商学専攻博士課程後期修了。



## 国際交流

# 有缘千里来相会

人文学部東アジア地域言語学科 4年次生

三田村 康夏

「有缘千里来相会（縁あれば千里を越えてやってくる）素敵な言葉だね。」

私の留学生活が終わりに近づき、帰国する前に、ある友人が私に宛てた手紙の最後はこの言葉で締めくくられていました。思わず涙が溢れ、帰国の荷造りをしながら感動で胸がいっぱいになったことを、今でも鮮明に覚えています。ちょうど帰国前に「私の留学生活はどうだったのだろうか？」と考えることがありますが、友人からもらったこの言葉が胸にストンと落ちた気がしました。

しかし、この言葉で留学生活を締めくくるまでには本当にいろいろなことがありました。

私が留学をしようと思ったきっかけは、1年次生の春休みに参加した中国・揚州大学への短期研修でした。揚州と言えば、唐の時代の詩人・李白が書いた『烟花三月下扬州（かすみ煙る暮春揚州へ下る）』の詩の舞台になった場所として有名です。かすみがかった景色の中に歴史的な古都の雰囲気漂う街並みが印象的でした。趣ある街の雰囲気も留学の決め手となりましたが、一番の理由は、研修期間中に会った現地での友人の存在でした。そこで出会った友人と過ごした時間、充実感が忘れ難く「もっと友人たちと交流したい」という単純な理由から、交換留学への応募を決め、幸運にも揚州大学に交換留学生として派遣されることが決まりました。



留学前、不安な気持ちもありましたが、それでもやはり好きな場所で、好きな人たちに囲まれての留学生活は期待の方が大きく、少し興奮気味に飛行機へ乗り込んだことを覚えています。

しかし、いざ留学生活を始めてみると理想とは違い、日に日に不安な気持ちが募っていきました。原因は「言葉」でした。留学前に日本で2年ほど中国語を学んでいたにもかかわらず、聞き取れない、伝えられないという状況が多くあり、自分の中国語のレベルに愕然としました。特に最初のころの授業は、予習にかなりの時間をかけて臨んでやっと理解ができるレベルで、毎日授業が終わるころには本当にぐったりしてしまいました。また携帯電話やインターネット、銀行などの手続きも多く、中国語を理解できないことが原因で、一つ一つの手続きに時間が掛かり、本当に心が折れそうになりました。

そんな中でも、私が一つ一つ乗り越えていけたのは、やはり友人たちの助けがあったからです。例えば、留学先の日本語学科の友人は自分たちも勉強のために日本語を使いたかっただろうに、私のためを思っていつも中国語で会話をしてくれました。時に私から日本語で説明を求めようとしても、分かりやすい中国語に直して説明するなど、私に「諦めないこと」を常に意識させてくれました。

また友人たちは言語以外のことも、私に教えてくれました。例えば、私が友人



と一緒に日用品を買いに行ったときのこと。そのころの私は中国の生活にも慣れ、不満や疑問に思うことが出てきた時期でもありました。私は買い物中に「中国にはこれがない、あれがない」と、日本の生活と比べてばかりいました。その時に友人が一言「康夏が今生活しているのは中国だよ」と言いました。その言葉をもらった時は、ハッとさせられました。それからは、中国の生活に「慣れる」だけでなく「受け入れる」ことを学び、以前よりもさらに言語や文化について興味を持ちながら生活をするのができ、日に日に自身の中国語の上達も実感することができました。

私は、友人たちから受け取るものばかりが多く、そのたびに自分も何かしたいと感じていました。しかし、その気持ちを伝えたくても、どのように伝えて良いのか分からず、歯がゆい思いをすることが多かったのです。そんな中、私が常に心掛けていたことは「行動を起こして伝える」ということです。行動を起こすと書いても何か特別なことをしたわけではありません。授業の準備をしっかりする、友人に積極的に会う、小さなサプライズをする、など本当にささいなことでした。

中でも特に私が印象に残っている出来事として、学生ツアーで行った黄山旅行があります。その旅行には顔見知りの友人も参加していましたが、さまざまな学部学科からほぼ初めて出会う現地の学生が参加していました。初めはなかなか打ち解けられず「交流したい」という思いばかりが先走って、うまく会話が弾まず、

結局新しい友人の輪に入ることができずにいました。そんな時には「行動で示す」ことを意識するようになりました。登山を引っ張るグループに自ら加わり、初めは少し相手側も驚いた様子でしたが、とにかく元気に笑顔で登山をすることや、周りの状況をよく見て、遅れを取っている人がいたら、そばに居るようにすると、相手側も次第に私を受け入れてくれるようになりました。みんなで頂上まで登り切り、一緒にその達成感を分かち合えたときは、みんなと一つになれたと感じることができました。旅行の終わりには、1人の友人が「盛り上げてくれてありがとう、みんな康夏ともっと交流したいと言っているよ」と声を掛けてくれ、最後には「出会えた記念に」と、コップをプレゼントしてくれました。同時に、中国でコップをプレゼントするという事は「一杯子(コップ) = 一輩子(一生)」の意味があると教えてくれました。私が友人たちと出会えた縁を大切に感じていたように、友人たちも私との縁を大切にしてくれていたと感じ、とてもうれしかったです。

留学中には、本当に多くの人がいつも私に情を持って接してくれました。

「有缘千里来相会(縁があれば千里を越えてやってくる)」。

この言葉は私の一生の宝物であり、私の人生のテーマです。留学中に得た縁をこれからの糧にして、また新たな縁もたくさん築いていきたいと思います。



黄山旅行で友人たちと記念撮影

三田村 康夏(みたむら やすか)

1992年長崎県生まれ。福岡大学人文学部東アジア地域言語学科4年次生。2013年2月から2014年1月まで中国の揚州大学に留学。

# 学校適応支援教室 「ゆとりあ」の取り組み

福岡大学臨床心理センター附設学校適応支援教室  
「ゆとりあ」教室長（人文学部准教授） 松永 邦裕



2014年4月に移転した学校適応支援教室「ゆとりあ」の外観

不登校は、いまだに深刻な問題であり、近年では、その実態も一層多様で複雑になってきています。こうした状況の中で、本学では、学生の教育、研究、大学の地域貢献を目的に、2006（平成18）年に、本学の臨床心理センターの附設施設として、学内に不登校の子ども（小中学生）を対象とした通級型の支援教室（学校適応支援教室「ゆとりあ」：以下、「ゆとりあ」）を開設しました。本教室のような取り組みは、全国の大学でも例のない取り組みです。本教室は、不登校の子どもたちが通う定員10人の民間施設（いわゆるフリースクール）ですが、心理的・発達の要因のため不登校状態にある子どもたちに集団活動を通じた臨床心理学的・教育的支援を行っています。さらに、9年目を迎えた2014年4月からは、福岡大学病院側に教室を移転し、装いも新たになりました。ここでは、「ゆとりあ」の取り組みを紹介しながら、通級した児童生徒たちや保護者、スタッフである学生にとっての意義について考えてみたいと思います。

## 「ゆとりあ」に通ってくる子どもたち

表1に8年間（2006～2013年度）の通級生の人数を示しています。8年間の通級生の実人数は39人です。近年、発達障害と不登校の関連性について注目されていますが、本教室においても、不登校の背景に何らかの発達障害が存在する子どもたちの割合が多く、そのほとんどが高機能（知的遅れのない）の発達障害の子どもたちです。しかし、発達障害といっても、そのほとんどが通常学級に在籍しており、一見障害の存在に気付かれない子どもたちです。

表1 8年間の通級生の構成

N = 39	男子	女子	計
小学生	5	7	12
中学生	22	5	27
計	27	12	39

## 「ゆとりあ」での支援

本教室では、保護者会を行ったり、通級生の在籍校を訪問するなど、家庭や学校とも連携しながら支援を進めていますが、日々の教室内での支援は、主に表2のような集団活動プログラムによるものです。不登校の子どもは、対人関係のトラブルやいじめなどの経験から、自己評価が低く、不安や緊張が強い傾向にあります。このようなことを踏まえて、臨床心理学の専任教員等の指導の下、臨床心理士を目指す大学院生と教職を目指す大学生とが、曜日ごとにチームを組み、さまざまな集団活動プログラムでの支援を行っています。

表2 週間活動プログラム（平成25年度）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
てくてく タイム	慣用句 音読	ナンプレ	ストレッチ	英単語ビンゴ	社会クイズ
活動1	芸術活動	科学の実験	創作活動	SST	調理活動
活動2	スポーツ	レクリエーション	ゲーム・スポーツ	ゲーム	自然体験（園芸）

※ 「てくてくタイム」：計算・英語などの課題学習を15分程度行う

## 集団活動プログラムの実践例（調理活動）

調理活動には、「料理を作ること」と「みんなで一緒に食事をする」という二つの活動があります。料理を作る活動では、スタッフ側の配慮の下、子ども

私たちは、仲間と協力しながら料理に取り組み、達成感や満足感を味わっているようです。また、食事という行為が人間関係の事態であると指摘されていますが（参考：滝川一廣1983『〈食事〉からとらえた摂食障害—食卓状況を中心に』（下坂幸三編 食の病理と治療）金剛出版、50-73ページ）、仲間同士で食事をする行為自体、単なる食物（栄養）摂取だけでなく、仲間であることを確認するという人間関係的な行為です。本教室の調理実習の後の食事場面でも、だんだん食べ残しも少なくなり、おしゃべりしながら楽しく食事ができるようになったことは、子どもにとって安心できる場での仲間体験となっているようです。



調理活動を行う通級生と学生スタッフ

### 通級生や保護者に伝わったもの

前項で「ゆとりあ」の活動の一部を紹介させていただきましたが、このような支援が当事者である子どもたちやその保護者にはどのように伝わり、捉えられているのでしょうか。本教室では毎年年度末に、通級生や保護者を対象に本教室についての感想をインタビューしています。その一部を紹介します。

#### 通級生のインタビューの回答

【教室の魅力は？】：人と話す機会が少ないので、ここで、（友達やスタッフと）話をするのが楽しみだった。理由は分からないけど学校はなぜか肩が重くなる。

【自分の成長したところは？】：ここで話をしているから、言葉が出やすくなって、自分の気持ちを話せるようになった。親とか先生とかとも話しやすくなった。

【学生スタッフはどうでしたか？】：学校の先生より悩みや気持ちを話しやすい。親とは趣味の話は合わないし、受験の時も志望校のこととか話しやすかった。人に話した方が楽。今まであまり話せなかった。

#### 保護者の感想

【ゆとりあの感想】：学生さんたちの子どもたちに対する思いは、親とも同級生とも違い子どもにとっては良い経験になったと思います。責められることもなく安心できる場を提供いただき最後まで通級できたことは、学生さん方の思い

があったからだと思います。

通級生や保護者の回答からは、学校に登校できない不登校の子どもたちにとって、「ゆとりあ」のスタッフとの関わりが、子どもたちのエネルギーを引き出し、次のステップにつなげていく体験になっていることがうかがえます。

また、これは、スタッフの主観的な評価ですが、入級当初は、服装や髪など全く気を使わなかった子どもが、年齢相応の格好に変化していくことも多く、学生スタッフや仲間との交流を通して、青年期らしい姿に変わっていくことに子ども自身の成長を実感することもあります。

### 「ゆとりあ」の支援の独自性

「ゆとりあ」は、学校に比べ、少人数で、枠組みが緩やかなことにその機能と独自性があります。具体的には、上手・下手などの能力や技能が評価されない活動のプログラムが用意されていること、臨床心理学的な視点（アセスメント）に基づいたそれぞれの子どもの特性に応じた個別支援がなされること、実際に学校での仲間との交流をする前段階として、子どもにとって「ナナメの関係」として映る学生スタッフが存在していることなどが挙げられます。「ゆとりあ」という安心できる環境とスタッフの関わりが、やがて子ども同士の仲間体験とつながる中で、学校などの集団に適応する大きなエネルギーになっているのではないのでしょうか。

### 学生スタッフにとっての「ゆとりあ」

「ゆとりあ」が教育研究施設として大学内に設置されていることの意義は、大学の地域貢献や専門的学問性の深化という側面だけでなく、学生教育（キャリア発達）の面からも大きな意味を持っています。

臨床心理士を志望する大学院生や教職志望の大学生にとって、「ゆとりあ」での実習体験は、講義で学ぶ不登校や発達障害とは違って、直接当事者と関わり、お互いに気持ちを通い合わせるものであり、まさに生きた学習です。学生スタッフは、活動の準備のため、多くの時間を費やし、時にはうまくいかないこともあります。そのような学生スタッフの姿が、通級してくる子どもたちにとっても現実を一生懸命に生きようと努力している身近なモデルとして、生き生きと映っているのではないのでしょうか。

通級生（子どもたち）と学生（支援者）が関わる（こころを伝え合う）中で、お互いが成長できる場であり続けられるように、今後も努力したいと考えております。引き続き、学内外の皆さまからの温かいご理解とご支援をお願いします。

松永 邦裕（まつなが くにひろ）  
1964年生まれ。福岡大学人文学部准教授。臨床心理士。  
研究テーマは子どもの心理臨床。福岡市いじめ防止対策  
推進委員を務める。

## 私たちのメッセージ



漫画家 キリエ

子どものころ、妹が悪さをすると、母は私にも罰を与えた。私が悪さをしたとき、何もしていない妹も一緒に罰を受けた。私と妹は、陰で母の悪口を言い合ったものだ。

「お母さんひどいよね！」

「何でいつも2人まとめて叱るんだろう？」

大人になった今なら分かる。母は、子どもたちの「共通の敵」になることで、姉妹の結束を強くしようとしていたのだ。

「親は必ず先に死ぬんだから、2人で助け合いなさい。お互いを大切にしまさい」  
それが母の口癖である。

「キリエ」は姉妹漫画家だ。漫画は主に妹が作っている。姉の私は妹が考えたストーリーを構成したり、作画のアシスタントをしたりする。編集者とのやりとりや雑務も私の仕事だ。互いの足りないところを補い合い、二人一組で活動している。

2014年8月、小学館の『週刊ビッグコミックスピリッツ』にデビュー作が掲載された。

これから私たちは、漫画を通して、何かを伝えたいと思っている。そのために、大切にしていることが三つある。

一つ目は「知ること」。人に何かを伝えるためには、まず知識を得なければならぬ。

私たちは福岡大学商学部第二部を卒業した。2歳違いだが、同学年である。私が介護福祉士の資格を取るために2年遅れて入学したためだ。同じゼミに入り、

同じ授業を受け、共通の友人がたくさんできた。とても楽しい学生時代だった。授業はどれも興味深いものばかりだった。大学は、私たちに「学ぶことの楽しさ」を教えてくれた。今でも、月に何度かは、図書館を利用するために大学へ行く。作品を作るために、多くの本を読み、勉強しなければならない。福岡大学での4年間でなければ、今の私たちはないと思う。

二つ目は「考えること」。知識や経験を通して、考察することだ。日ごろから、さまざまな社会問題について、自分たちの立場や意見を明らかにするよう心掛けている。エンターテインメントにそういったことは必要ないように思われるかもしれないが、漫画のキャラクターの何気ない言動一つにも、作者の価値観は反映される。何を善とし、何を悪とするか。表現者は常に問われ続けると思う。

三つ目は「愛すること」。これが一番大切だと思う。

人見知りで大人しい性格の妹は言う。

「もし、私が作ったキャラクターが、孤独な誰かの友達になって、その人の毎日が少しでも楽しくなったなら、生涯売れなくても、漫画家になったことを後悔しない。描く意味がある」

何のために伝えるのか。それは「誰かのため」だ。人を励まし、人生に何らかの価値を与えるメッセージこそ「伝える」意味がある。

どんなに優れた知識も、深い考えも、相手を想わなければ伝わらない。

例え理不尽に菓子を没収しようと、母の想いは伝わるのだ。



小学館新人コミック大賞受賞作品『ヒトリシズカ』

2014年6月、私たちは『ヒトリシズカ』という作品で小学館新人コミック大賞を受賞した。授賞式でスピーチをすることになり、2人で壇上に上がった。そこから会場にいる母に手を振った。誰よりも私たちの幸せを願い、常に想ってくれたことへの、感謝の気持ちを伝えた。

「お母さん、ありがとう！」

母は涙ぐみ、会場が拍手で沸いた。

この賞は私たちにとって特別なものになった。

この日を迎えるまで、家族は悲しみの中にいた。賞に投稿することを決めた直後に、母方の祖母が余命宣告を受けたのだ。

「もってあと1週間」

母と私たちは毎日ホスピスに通い、交代で祖母に付き添った。2週間、3週間が過ぎても祖母は頑張ってくれてくれた。4週間経った3月19日、私は病室で読むための本を借りようと福大の図書館に立ち寄った。その日はたまたま卒業式であった。

薬で眠る祖母に語り掛けた。

「はかまの女の子たちがきれいかったよお」

祖母は何も答えなかったが聞こえていたと思う。

私は続けた。

「必ず漫画家になって、おばあちゃんのこと伝えるからね」

その2時間後、祖母は亡くなった。葬儀の10日後が賞の締切日だった。妹と私は泣きながら作品を仕上げた。登場人物の女の子に祖母の名前をつけた。

最後の1カ月、祖母はいろんな話をしてくれた。

「あんたたちのお洋服を縫ってあげるとき、うれしくてうれしくてたまらんかったあ」



「第74回小学館新人コミック大賞」授賞式で

祖母が縫ってくれた私と妹の服は、50着以上ある。

祖母や親、そして今まで出会った多くの人からもらった優しさを、私たちは漫画を通して返そうと思う。

これから出会う読者に伝えたい。

「私たちの作品を読んでくれてありがとう。本当に本当にありがとう。あなたが最高に幸せでありますように」

桐衣 奈央（きりえ なお） 1982年福岡県生まれ。  
 桐衣 知代（きりえ ともよ） 1984年福岡県生まれ。  
 ともに、福岡大学商学部第二部を2009年3月に卒業。現在、姉妹漫画家「キリエ」として活動中。2014年6月、作品『ヒトリズカ』が「小学館新人コミック大賞」を受賞。母は2012年に作品『ガラシャ夫人のお手玉』で「小学館文庫小説賞」を受賞した作家の桐衣朝子氏。

## 私たちの卒業制作は、 警固公園（2014年グッドデザイン賞受賞）です

創立80周年を迎えた福岡大学は、2014年11月28日、「私たちの卒業制作は、警固公園です」というコピーにメッセージを込め、新聞広告を出しました。この広告は、福岡市天神の警固公園を再整備するというプロジェクトに携わった学生たちの成長の姿を多くの方に知ってもらうためのものです。彼女たちが携わった警固公園は、今では人々が安心して過ごせる「防犯と景観」を兼ね備えた憩いの空間となっています。しかも、この公園は2014年グッドデザイン賞にも選ばれました。彼女たちが大学で培ったさまざまな力は、社会人として活躍するそれぞれの「今」につながっているのです。



2014年11月28日付新聞広告

新聞広告本文

福岡大学工学部社会デザイン工学科、景観まちづくり研究室。2011年から、この研究室の学生4名が、天神の警固公園を再整備するというプロジェクトに取り組みました。学生たちは、利用者へのヒアリングや動線調査をもとに、問題点や改善策を話し合い、模型を作成し、市長へのプレゼンテーションも行いました。実践の現場では、学生だからという甘えは通用しません。メールの書き方ひとつまで厳しい指導を受けながら、社会人としての対人力も身につけていきました。大坪さんは、公園内に設置するサインのデザインを担当し、原田さんは、1ミリのズレもない模型作りに力を注ぎました。竹田さんは、最適な園路の幅を決めるため実際に公園の真ん中で模造紙を広げて何度も検証し、田浦さんは、公園内の喫煙状況を調べるため、早朝から煙草の吸い殻を探し歩きました。実際に街の一部を自分たちの手で作りあげた経験は、彼女たちにとって大きな喜びや刺激となり、それぞれの「今」につながっています。すべての学生がそれぞれの4年後に向かって、価値のある時間を過ごせるよう全力でサポートする。それが私たち福岡大学です。



(左)柴田教授の指導のもと、学生たちが制作した警固公園の模型



(右)警固公園の再整備事業について高島福岡市長にプレゼンテーション



「防犯と景観」を兼ね備えた憩いの空間「警固公園」

# みんなの広場

## グローバル人材育成推進事業 「海外短期教育研修」を終えて — 講義での伝え方 —

法学部講師 桧垣 伸次

筆者は、2014年9月中旬に、海外短期教育研修のため、3人の同僚と共にアメリカ合衆国ネブラスカ州オマハ市にあるネブラスカ大学オマハ校（University of Nebraska at Omaha、以下、「UNO」とする）を訪れた。本研修は「英語で効果的に教える方法（How to Teach Effectively in English）」というテーマの下で行われ、①専門科目の英語による授業をより効果的に行うための技法を習得、②教員間の交流とネットワーキング、クラス見学／聴講、③異文化の理解とグローバルな思考力の向上、の3点を目標とするものだった。筆者は将来的に英語で授業を行う予定があるため、英語がさほど得意ではないにもかかわらず、無謀にも(?)本研修への参加を申し込んだ。

ところで、講義は日本語で行う場合であっても、非常に難しい。講義は何かを「伝える」場でもある。しかし、こちらが伝えたいと思っていることが十分に伝わっていないと感じることがしばしばある。特に受講者の多い講義はそうである。多くの教員が取り組んでいるように、筆者もレジュメを作成したり、新聞記事や映像を用いたり、さまざまな工夫をしてきたつもりであ



ネブラスカ大学オマハ校

る（少なくとも主観的には）が、うまくいっているとは決して言えない。日本語での講義でさえそのような状態なのに、ましてや母国語ではない英語で講義を行うことはより難しい。今の状態では、講義を通して伝えたいと思っていることはほとんど伝えられないだろう。そのように考えていたところ、本研修に参加する機会を頂いた。結論から言うと、筆者は研修を通じて、英語での講義方法のみならず、普段の日本語の講義にも役に立つ情報、スキルを得ることができたと感じた。そこで、本稿では、UNOでの海外短期教育研修の体験について簡単に紹介したい。

筆者たちは、2014年9月某日に福岡空港を出発し、成田国際空港、ダラス・フォートワース国際空港を経由して、土曜日（現地時間）にオマハ空港に到着した。その日は滞在先ホテルに移動し、翌日以降の予定を確認するのみだった。夜には、現地で人気（らしい）の“PONZU”という日本料理屋を勧められたので、同僚と共に行ってみた。筆者はうどんを注文したが、ネギではなくパクチーが添えられていたのには驚いた。現地の好みに合わせたアレンジなのだろうか…。

翌日の日曜日は、研修の講師の一人でもある Marlina Davidson 氏の案内のもと、オマハ市内を視察した。オマハ市は、ネブラスカ州最大の都市であり、1965年から静岡市と姉妹都市提携を結ぶなど、日本との交流も深い。ちなみにネブラスカ州は肉牛の生産が全米1位で、特に「オマハステーキ」は世界的にも有名とのことだ。また、オマハ市は、著名な投資家 Warren Buffett 氏生誕の地であり、彼の生家は観光スポットになっている。



オマハステーキ

もちろん観光ばかりしていたわけではなく、月曜日からは、研修が本格的に始まった。研修内容としては、①FD（Faculty Development）ワークショップ、②クラス見学、③英語での授業・プレゼンテーション講座、④模擬講義、などがあった。月曜日から金曜日までの5日間、毎朝9時から講義に出席し、夕方ホテルに戻るという日々で、久しぶりに学生気分を味わった。

FDワークショップでは、UNOのコミュニケーション学部の教員による、効果的なクラス運営のための教授法、ファシリテーションスキルなどの講義を受けた。具体的には、アメリカと日本の教育方法の違い、学生の学習スタイルの違いや、それに対応した教育方法、相互作用的な教育方法、クラス・マネージメントなどについての講義があった。もちろん、講義といっても、講師が一方向的に話すのではなく、受講生にも多くの発言の機会があった。講義の進め方自体が参考になった。

筆者にとって特に印象的だったのが、学習スタイルの違いについての講義だった。簡単に紹介したいと思う。この講義では、さまざまな学習スタイルについての説明があった。それによると、人間の学習スタイルには大きく分けて、①視覚重視、②聴覚重視、③触覚重視、④運動感覚重視の四つのタイプがある。①のタイプは、意味を追求することにより学ぶタイプであり、「Why?」という問いに最も興味を持つ。②のタイプは、アイデアを考え出すことにより学ぶタイプであり、「What?」という問いに最も興味を持つ。③のタイプは、理論を検証することにより学ぶタイプで、「How?」という問いに最も興味を持つ。④のタイプは、試行錯誤により、隠れた可能性を求めることにより学ぶタイプで、「If?」という問いに最も興味を持つ。筆者には、この分類が妥当なものか判断する能力はない。しかし、重要なのは、人間にはさまざまな学習スタイルがあり、①のタイプは議論を好む、②のタイプは講義形式を好むなど、それぞれに合った教え方があるという点である。さまざまな学習スタイルがあるということはもともと理解していたつもりだったが、あらためて体系的な説明を受けることにより、それに対してさまざまな講義スタイルを取り入れていなかったことに気付かされた。FDワークショップでは、まずこの点を確認した上で、さまざまな教育方法についての講義があった。その内容についてここで詳細に紹介できないのが残念である。

また、研修中に、現地の大学教員との交流も兼ねて、講義を見学する機会があった。筆者の専門は憲法学であるが、残念ながらロー・スクールはUNOにはない



(ネブラスカ大学のロー・スクールはリンカーン校にある)。そのため、憲法の講義を見学することはできなかったが、二つの法学の講義を見学することができた。筆者は以前、アメリカの他の大学のロー・スクールの講義を見学する機会を得たことがあるが、UNOで見学した法学の講義は、ロー・スクールとも異なるタイプの講義だった。ロー・スクールは法律家を目指す学生ばかりであるが、UNOの法学の講義はそうではない。その意味では、筆者が福岡大学で担当している講義は、UNOの方に近い。ロー・スクールとは異なり、UNOでは法学が専門の学生が受講しているわけではない。そこで、法学にそれほど興味がない学生に興味を持ってもらうために、どのような工夫をすべきかについて、担当の教員（Lewis教授、O'Hara教授）と意見交換をしたが、これが非常に参考になった。

このように、ワークショップや講義見学などがあったが、本研修では体験型の研修もあった。筆者たちは、最終日に模擬講義を行い、UNOの学生に受講、評価してもらうことになっていた。その準備も兼ねて、英語での授業・プレゼンテーション講座を通じて、多様な学生に対応した効果的な講義方法について学んでいた。視覚教材の使い方はもちろんのこと、講師が一方向的に話すのではなく、講義中にうまく質問を投げ掛ける、作業（アクティビティ）の時間を設けるなど、具体的なスキルについてもアドバイスを受けた。その中で、講師の前で講義をする姿を録画し、録画した映像を見ながら修正点を見付けていくという作業が2回あった。自分が講義をしている姿を見るのは初めてだったが、滑舌は悪いし、英語の発音もイマイチ、態度もスマートではない…。そのような自分の姿を見るのはあまり楽しいことではなかった。しかし、自分の講義を客観的に見ることにより、足りないものを自覚することができたので、良い経験ではあった（またやりたいとは思わないが）。

そしていよいよ最終日が来た。朝から緊張しつつ、模擬講義を行う教室に向かった。模擬講義といっても小規模のものであり、受講者は10人弱であった。筆者の講義のタイトルは「Hate Speech and Freedom of Speech（ヘイト・スピーチと表現の自由）」だった。内容は、ヘイト・スピーチとはどのようなものであり、憲法学上どのような争点があるか、それに対する双方の意見の紹介などである。そして、講義内容を踏まえて、ヘイト・スピーチの規制の是非についてどのよう

に考えるか、隣の人と話し合い、その後に各自の意見を紙に書くという作業をしてもらった。最後に質疑応答も行った。

模擬講義が終わると、受講生に評価シートを記入してもらい、講師からの評価を聞いた。この評価シートの項目が非常に興味深かった。評価項目は、①導入部分は効果的だったか（興味を引くような導入だったか）、講義の流れはスムーズだったか、説明は明確だったかなど、内容面に関わる部分、②声量は十分だったか、態度や表情はどうだったか、つなぎの言葉は的確だったかなど、伝え方に関わる部分、そして、③パワーポイントのデザインやフォント、データなどは適切だったかなど、視覚教材に関わる部分、の三つに分かれ、全部で30項目あった。つまり、講義の際に気を付けなければならない点が、少なくとも30項目はあるわけだ。多様な学生に対応するために気を付けるべき点は多い。筆者についていえば、学生の評価が一番低く、講師からも指摘された点は、動きが小さいことと、アイコンタクトが十分でない点、つまり伝え方に関する点だった。あまり意識したことはなかったが、ジェスチャーだけではなく、体全体を動かすこと（歩き回るなど）が、学生の注意を引き付ける点で重要であるとのことだ。



研修資料の表紙

研修の最後には、UNOのスタッフとの食事会があった。コミュニケーション学部の学部長に研修の修了証を頂き、ようやく肩の力を抜くことができた。ちなみに学部長は日本の食べ物が好きで、福岡のラーメンや、広島のお好み焼きが気に入りとのことだ。

このようにして無事に(?)研修を終え、再びグラス・フォートワース国際空港、成田空港を経由して福岡に帰ってきた。日米では文化などさまざまな違いがあるため、本研修で学んだことが全て日本で応用できるわけではないだろう。本研修は、あくまでも「英語で効果的に教える方法」についての研修だ。しかし、「授業」という場を通じて何かを「伝える」ための手法という意味では、本質の部分においてそれほどの違いはないだろう。本研修は、英語での講義を想定した内容だったが、冒頭でも述べたように、筆者は、普段の日本語の講義にも役に立つ情報、スキルを得ることができたと感じた。徒然なく書き連ねており、実のない内容になってしまったかもしれないが、以上が、筆者の本研修についての所見である。本研修で学んだことを活用して、より良い講義を目指していきたい。

桧垣 伸次 (ひがき しんじ)

1982年生まれ。福岡大学法学部講師。専門は憲法学。主としてヘイト・スピーチ規制論を研究。現在、春日市溜池保全審査会委員。

## 厚生労働大臣表彰を受賞して

福岡大学筑紫病院栄養部副技師長 花田 輝代

### はじめに

2014(平成26)年8月23日に2014(平成26)年度の「優良特定給食施設」として、福岡大学筑紫病院が厚生労働大臣表彰を受賞しました。給食の管理運営が特に優秀であり、先駆的で他の模範とすべき特定給食施設であるという評価をいただき、今回の表彰となりました。

福岡大学筑紫病院栄養部は1日約700食の食事を管理栄養士4人で管理運営し、給食は専門の給食会社に委託しています。給食会社にも管理栄養士、調理スタッフがおり、病院職員を合わせると総勢30人で患者さんの栄養管理業務を行っています。2008年にはNST(栄養サポートチーム)を立ち上げ、医師や看護師、薬剤師、検査技師らと連携を図りながら全入院患者さんの栄養管理を行っています。

2013年5月には病院が新築され、緑豊かな“ガーデンホスピタル”として生まれ変わりました。新病院の基本方針は、「快適で人にやさしい病院」「高度医療を実践する機能性を重視した病院」「安心安全で信頼の高い病院」「環境にやさしい病院」「医療の変化に追随する病院」「効率のいい使いやすい病院」です。また、栄養部では「栄養は全ての治療の基本である」と考え、食事・栄養の側面から、個々の患者さんのQOL(生活の質・人生の質)の向上を支援することを理念としています。特に食事に関しては、“ホスピタリティー”すなわち「おもてなしの心」を大切にしたい患者給食の提供に努めていますが、新病院建築を機に、作業効率とおいしさを両立できる新しい給食システム「ニュークックチルシステム」を導入しました。今回、厚生労働大臣表彰の受賞の要因と考えられる「ニュークックチルシステム導入」や「おいしい病院給食」の取り組みについてご紹介したいと思います。

### 「ニュークックチルシステム」とは

「ニュークックチルシステム」とは、患者さんの食事時間に合わせ、1日3回調理して提供する従来の給食システムに対し、計画的に事前調理した食事を後日

安全に提供するサービスシステムです。具体的には、1～2日前に加熱調理したものを直ちに冷却しチルド保存します。そして、提供する日にチルド保存された料理をそのまま盛り付けし、再加熱カート（配膳カート）で自動加熱します。その原理は電磁誘導加熱（IH：Induction Heating）を応用しており、家庭で使う電磁調理器と同じように安全な加熱方式となっています。一人分ずつセットされたトレーの中で、主菜、副菜、汁物を別々に加熱でき、各メニューに応じて加熱時間・火力を調整することができます。さらに、まだ実現はできていませんが、カート内でご飯を炊くことも可能なので、近い将来、一人分ずつの炊き立てご飯を提供することも夢ではなくなりました。また、冷たい料理は0～3℃のチルド室に保管したまま配膳されるので大変冷たく、温かい料理は湯気が出るほどのアツアツ状態でおいしく提供できるようになりました。

さらに「おいしさ」とは別に、作業効率の向上・従業員満足度の向上という面でも給食管理業務が大きく変わりました。従来の病院給食には、調理師の技術や経験に委ねられるという側面がありました。しかし新病院では、“人”の経験に委ねることなく科学的に裏付けられた情報やデータを基に温度や調理時間を正確に管理して一定の品質を維持する仕組みを作り上げました。また、病院給食は1日3食、365日提供するため、早朝勤務があり土日の休みも取りにくいといった環境にあります。従来は早朝からの準備が必要でしたが、新システムでは朝食の盛り付けなどは前日に行い、当日の朝はトレーごとカートで自動加熱するだけになりました。そのため、早朝勤務の軽減につながりました。また、土日の調理作業を組み込まない計画を立てることで土日の休みも取得しやすくなり、従業員が働きやすい環境をつくることができました。

### 調理・配膳風景

新病院の厨房はオール電化システムを採用し、衛生的にかつ機能的に設計されました。

納品された食材は下処理室で洗浄、消毒、カットされ、調理室で調理されます。調理の多くは煮る、焼く、蒸すなどの多機能を備えた“スチームコンベクションオープン”で行います。これは、あらかじめメニューごとに調理時間、加熱温度をセットしているので、ボタン一つでいつでも一定レベルのおいしい食事を作ることができます。そして、加熱調理されたものは直ちに冷却されチルド庫に保管

されます。

食事は、チルドのままベルトコンベアで一人分ずつトレーメイク（写真1）され、再加熱カート（写真2）にセットしていきます。再加熱カートは集中監視コントロールシステム（無線方式）（写真3）を採用し、全てのカートタッチパネルで簡単にコントロールでき、作業の効率化に大変役立っています。



写真1 トレーメイク



写真2 再加熱カート



写真3 集中監視コントロールシステム

### 新システム導入前後の患者嗜好調査結果

新システム導入前後の患者嗜好調査結果では、主菜の温かさについては「丁度よい・普通」と答えた患者さんが77%から84%に増加し、汁物については57%から83%に増加しました。中でも「丁度よい」はどちらも20%台から50%程度に増加し「冷めている」は10%以下に低下しています。

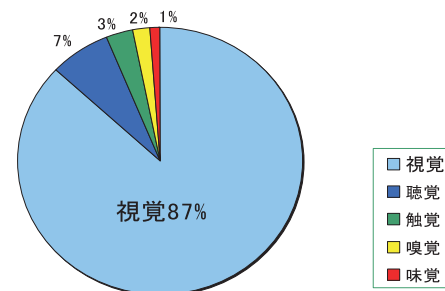
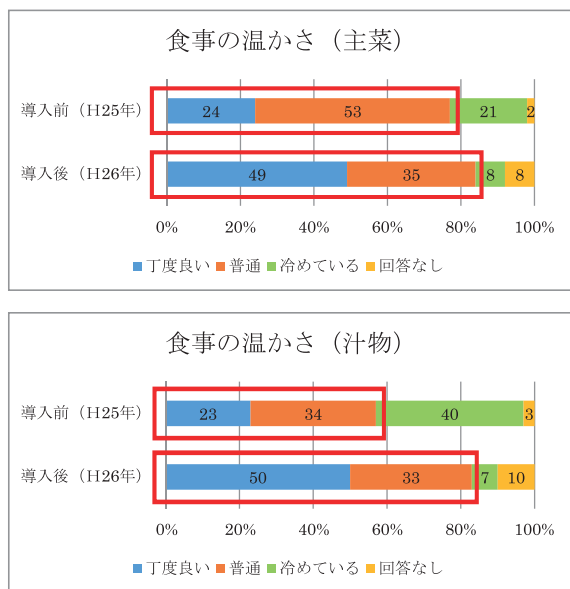


図1 味を味わう五感の割合

写真5 色にこだわった料理の工夫

### 「おいしい病院給食の工夫」視覚にこだわった食器・食事の工夫

福岡大学筑紫病院の食器は基本的に陶器（写真4）を使用しています。「おいしさ」を左右する五感の中で、視覚がとても大きな要因になっている（図1）とことから、食事や食器の“色”“見た目”にもこだわって食事（写真5）を提供しています。



写真4 食事は陶器を使用

### 「おいしい病院給食の工夫」メッセージカード

入院中でも患者さんに季節を感じていただけるようさまざまな行事食を実施していますが、その際にはスタッフ手作りのメッセージカード（写真6）を添えて「おもてなしの心」をお届けしています。



写真6 手作りのメッセージカード

### 最後に

病院経営の視点において、病院食の善しあしが病院選択の一つに挙げられ、食事内容は患者サービスやQOLの向上に重要な役割を担っています。新病院建築に際しては、このようなニーズに応えながら、これからの少子高齢化社会において労働生産人口が激減する10年・20年先を生き抜くために人の経験だけに頼らないしっかりとした給食システムの構築が何より重要と考え、今回ご紹介した

「ニュークックチルシステム」を導入しました。そして、私たち福岡大学筑紫病院栄養部の業績や日々の努力が認められ、このたび、厚生労働大臣表彰をいただくことができました。今回の受賞を励みに尚一層努力していく所存でありますので、皆さまのさらなるご指導とご支援、ご協力をお願いいたします。



2014（平成26）年8月23日  
厚生労働大臣表彰を受賞



福岡大学筑紫病院栄養部のスタッフ一同

花田 輝代（はなだ てるよ）

1965年生まれ。福岡大学筑紫病院栄養部副技師長。2010年に九州大学大学院医学系学府医療経営管理専攻で医療経営について学ぶ。現在、福岡県栄養士会理事、福岡NST研究会世話人等を兼任。

## 伝統の応援団復活への想い

福岡大学応援指導部応援団 第57代団長 藤田 大輝

福岡大学応援団は1957（昭和32）年に創設されました。この時から今日まで、半世紀以上の長い時間にわたって、福岡大学応援団は伝統の応援歌や演武を作り上げ、福岡大学の発展を影から支えてきました。そこにあった想いは、母校愛であり「福岡大学こそが最高の大学である」という学生の主張であったように思います。そんな応援団が、団員不足のため活動休止に追い込まれたのは、1999（平成11）年春のことでした。この時の福岡大学応援指導部は、プラスバンドとチアリーダーは存続しているものの、応援団員はゼロの状態でした。それは、応援歌や演武など「伝統」の断絶を意味しました。以降、とある気概溢れる先輩が、福大応援団を復活させようとしてご尽力されたものの、その先輩のご卒業と同時にまとも応援団は活動休止となってしまいました。

私は2012（平成24）年に福岡大学法学部法律学科に入学しました。入学当時の私の将来の夢は、大学卒業後、法律専門職に就くことでした。そのため、大学生活での正課外の時間も、勉強に充てようと考えていました。しかし「勉強さえすればよいのか？」という思いが私の頭の中を巡りました。なぜなら、私はいつも自分自身に精神的な未熟さや弱さを感じていたからです。

私は、中学校、高校と部活動に励み、平均的に努力し、練習をさぼることは一度もありませんでした。しかし、それは平均的な努力でしかなく、あくまで「ふつう」だったのだと思います。結果、中学、高校ともに部活動で優秀な成績を残すことはできませんでした。これは勉強においても同様で、成績はいつも中の上か上の下をキープしていたものの、決して一番になることはありませんでした。このような過去を振り返り、自分が最善の結果を出すことができなかつた背景には、自分に精神的な弱さがあったのではないかと考えたのです。重要な場面になると、いつも私は急に自信を失い、弱腰になり、あと一步というところで踏み出せなかつたのです。私はそんな自分が嫌い、変えたいと考えていました。なぜなら、こんな自分のままでは重要な場面で、まともや最後の一步を踏み出す勇気が出ず、法律の専門職に就くという夢がかなえられないか、もしくは法律の専門職に就くことができても自分の目的を十分に果たせないだろうと考えたからです。

そんな時、私は高校生時代のとある出来事を思い出しました。それは、野球応援の経験です。私は高校時代、硬式テニス部に所属していましたが、顧問の先生が大の応援団好きだったという理由で、学校行事の一つであった野球部の試合の全校応援をまとめる応援団を務めていました。その際に参考にしていただいていたのは、東京六大学の応援指導部・応援部の映像です。そこには、自分自身と自分の大学に誇りと自信を持つ男たちの姿が映っていました。そして、応援団という組織を調べていくうちに、応援団とは「誰かを応援するだけでなく、その活動を通して自らを磨き高めていくもの」だと知りました。

そして「自分に弱さを感じている私でも、応援団に入団し経験を積めば、大事な一歩が踏み出せるようになる」と確信に近い何かを感じたのです。

福岡大学入学後、各部やサークルの勧誘週間が始まってすぐに、私は応援団の勧誘ブースを探しました。応援指導部リーダー部門の勧誘ブースは、すぐに見つかりました。そこには、きれいな長ラン(裾の長い学生服)を着用した男性が立っていました。学ランが新品のようにきれいだったことに疑問を持ちつつも、応援団という組織では特に上下関係を大切にしていると聞いていた私は、先輩方に失礼があつてはいけないと考え、気を引き締めて声を掛けました。すると、予想外に、そこにいた先輩方は笑顔で迎えてくださいました。話を聞いてみると、どうやらそこにいたのはチアリーダーの先輩方の方でした。私が応援団への入団希望者だと伝えると、先輩方は応援団員がゼロという現状を教えてください、応援団OBであるK先輩に連絡を取ってくださいました。K先輩は、幸いにも大学の近くにいらっしゃり、すぐに勧誘ブースまで来て話を聞いてくださいました。おそらく、そこで私がK先輩にお話した入団の志望動機は不確かで、誤った認識もあったと思います。それを全て理解した上で、K先輩は「もう一度、福大応援団を復活させてみないか?」「できるサポートは何でもしよう」と言ってくださいました。私はその言葉に支えられ、小さな一歩を踏み出すことを決めました。

それからの1年は、不安と戸惑いの日々でした。最初はチアリーダーの先輩の後ろにくっつき、初めての福西戦(福岡大学対西南学院大学の野球試合)や神宮大会の応援を経験しました。しかし、その年に他の応援活動は一切ありませんでした。私は、一個人の無力さと仲間の必要性を痛感しました。応援団の練習は、週に1回程度K先輩が指導に来てくださいましたが、基本は一人の練習で教えていただいた伝統の演武も2、3曲程度だったので、私には時間が余ってしま

た。同じ志を持つ仲間を集めようとポスターを作ってみました。掲示場所が限られていたこともあり、仲間は集まりませんでした。しかし、私の存在を待っていてくれた人はいました。応援団の復活を待っていた人はいたのです。私が福岡大学同窓会に出席して演武を披露した時、何人もの方が涙を流しながら力強く握手してくださいました。ある人は、応援団の活動が世間に知れ渡るように、新聞記事で紹介してもらえるように手配をしてくださりました。新聞に応援団の記事が掲載されると、そこからラジオ出演、テレビ出演と話が広がり、結果として、新聞社2社、ラジオ局2社、テレビ局2社に取り上げていただきました。これが応援団本格復活の大きな力になったことは、言うまでもありません。これらの報道の後にはたくさんの反響がありました。応援団にOB会等への出演依頼、体育部会への応援依頼が増えたことはもちろん、数人の方から直筆のお手紙や応援メッセージを頂きました。お恥ずかしい話ですが、私は涙をこらえることができませんでした。その時まで、心のどこかで「応援団は必要なのではないか」と考えていました。「福岡大学応援団がその歴史を絶やしてしまったのも、時代から必要とされなくなったからではないのか」と考えたこともありました。しかし、それは間違いでした。私は今、過去も現在も、そして未来でさえも「応援団は必要とされる存在である」と確信しています。大切なことは「応援団の魅力を世間に伝えること」であり、それが私の使命なのだ実感しました。

ここまで人を引き付ける応援団の魅力とは、一体何なのでしょう。この答えは、人によって異なると思います。しかし、ここでは恐縮ながら私の考える応援団の魅力をお伝えしたいと思います。



演武を披露する筆者(写真中央)

一つ目は、伝統を守り、大学の象徴となり得る点です。応援団が福岡大学の校歌や応援歌を在学生に伝えることで在学生に共通の帰属意識が芽生え、学生が卒業してからも母校に誇りを持てるきっかけになる点です。このような誇りは、多くの学生が大学を卒業してから実感するものなのかもしれません。

二つ目は、誰かを応援する自己犠牲の精神です。誰かを応援することは、決して楽なことではありません。猛暑の夏でも、極寒の冬でも、屋外で学ランを脱ぐことはできませんし、上に何かを羽織ることもできません。また、応援しているチームが勝利を収めても、必ずしも選手から感謝の言葉を得られるわけではありません。それでも応援団は応援をやめません。それは応援団にできることが応援だけだからです。応援団は、誰かのために何かできることがあれば、全力で行います。誰かのために自分の力を使うことに幸せを感じるからです。この応援団の見返りを求めない姿は、多くの人の目に美しく映るはずで、言葉では表現しつくせない熱い気持ちを、胸に湧き起こさせます。この魅力は、本学の在学生、OBにかかわらず、全ての人に伝わると信じています。

三つ目は、押忍の精神です。押忍の精神とは、本学応援団では「何事も押し忍ぶこと」と伝えられています。私は「自分の信じることのために、どんなに辛いことがあっても耐え抜き、好機を待つということ」だと解釈しています。応援活動が楽ではないことは前述しましたが、応援のための練習や本番当日までの準備も決して楽ではありません。しかし、これに耐え、たくさんの方と直接お会いし、互いに理解し合いながら理想の応援を形成していく経験は、自分自身にとって大きな付加価値となります。自分の信念のために、苦難を耐えることができるようになれば、人間の可能性は限りなく広がると考えています。これは、応援団を経験した者だからこそ実感できる魅力でしょう。

私の踏み出した小さな一歩「福岡大学応援団」は、現在10人の仲間が集まり、総勢11人という九州で最も大きな応援団になりました。また、演武・応援歌は、「校歌」「覇者の道」「我が福大」「マルンの旗」「七隈とんび」「福大節」「福大どんたく」「福大音頭」「上り下り」の9曲に加え、現在も増え続けています。応援団の宝である団旗や太鼓も披露することができます。応援する対象は、野球部だけにとどまらず、さまざまな部活動・団体に広がりました。私は一歩、また一歩と、小さな歩みを進めるたびに、応援団と共に自分の成長を実感しています。

自らの成長のために応援団への入団を決めた私でしたが、今では新たな目標ができました。それは「福大応援団を絶やさない」ということです。応援団の魅力を次世代に伝えることができれば、応援団という組織は未来へと引き継がれていくはずで、応援団をこれからの未来へ残し、応援団を求める人を再び落胆させないために、私は伝えていかななくてはなりません。そして、伝統と魅力を伝えるとともに、応援団も変化していかなくてはなりません。伝えることと変化することが正反対であるとは、私は思いません。次世代に伝え、時が進むにつれて変化していく。それこそが進化であると考えます。次世代に伝えるべき応援団の本当の魅力を残すために変化をもたらすこともまた、現代に応援団を復活させた私の責任であると考えます。伝えることは、難しいことです。文字だけでは、言葉だけでは伝わらないこともあります。だからこそ、私は行動であなたの信頼を勝ち取ります。全力であなたを応援します。これが、応援団なのです。

藤田 大輝（ふじた だいき）  
1994年山口県生まれ。福岡大学法学部法律学科3年次生。  
福岡大学応援指導部応援団第57代団長として体育部会各部の応援や各同窓会での演武披露、地域貢献活動を行う。

## 継続は力なり

卒業生 佐藤 紀子

### はじめに

「継続は力なり」

中学校時代の陸上の恩師である梶原龍士先生（現福岡大学陸上競技部長距離監督）からいただいた言葉です。

子どものころの夢はピアノの先生。人前で話すことが苦手な私は、演奏を通して自分の感情を表現できるピアノが大好きでした。発表会やコンクールで大勢の人の前で演奏するときの緊張感や達成感を今でも覚えています。



子どものころのピアノコンクールの様子

一方で、走ることも大好きでした。兄と一緒に砂浜を駆けたり、月に向かって走っては「追い付かない」と言いながら走り続ける、ちょっと変わった子どもだったようです。思えば小学校の陸上クラブから始まり、中学校、高校、大学と陸上部に所属し、社会人になった今でも走り続けています。

陸上人生の中で、私はさまざまな思いや経験をしてきました。

走ることが楽しくて仕方がなかった小学校時代。勝負をすることの厳しさ、勝負に勝つ喜びを知ることができた中学校時代。仲間と一緒に目標に向かう楽しさを学んだ高校時代。その後福岡大学へ進学した理由は「全国大学女子駅伝出場」と「マラソンへの挑戦」でした。

私がマラソンに目覚めたのは、大学院（スポーツ健康科学研究科）へ進学した

際、指導教官だった田中宏暁教授の「ニコニコペースで走れば誰でもフルマラソンを完走できる」という言葉との出会いでした。先生の言葉に従い、初マラソンに向けて自分のニコニコペースを測定し、そのペースを守って走りました。その結果、初マラソンの記録は2時間43分25秒。レース1週間前から高熱を出し、レース当日の朝まで走れるかどうか分からない状態の中、体調の不安とは裏腹に「私は走れる！」という揺るぎない自信を持っていたことを今でも覚えています。

大学時代に出合ったマラソン。私にとってマラソンは、自分を表現できる場所です。マラソンレースでは自分がいつでも主人公になります。

社会人になった今は、現役時代に世界最高記録を更新した重松森雄監督の率いるクラブチーム「ファーストドリーム AC」に所属し走り続けています。監督は「人として魅力あるランナーになりましょう」「できるだけ高い山（マラソン自己記録）を目指しましょう。そこから見る景色は最高ですよ」と、私たちに励ましてください。

自分への挑戦、それを支えてくれるたくさんの方がいるからこそ、私は大きな夢を描き楽しい42.195キロメートルのストーリーを演じてみたいくなります。

### 結婚そしてギネス記録達成

2013年度は、私にとって大きな出来事が二つありました。結婚そしてギネス世界記録（夫婦のフルマラソン合計タイム）の達成です。

「仕事が終わったら走りに行く」という繰り返しの生活の中で「結婚はどうなるのだろうか？」と自分自身もそして周りの友達からも心配される中、毎日の練習場所である大濠公園で結婚相手に出会いました。

彼が抱いた私への第一印象は「女性にしては速い！」ということだったそうです。それを聞いた時「今までのトレーニングが報われたな」と思いました。速く走れていなかったら出会えなかった相手だったかもしれません。

そんな出会いから、結婚式までのスピードも猛ダッシュでした。

というのは、私たちが出会った年に行われたマラソン大会で、夫婦合計タイムのギネス記録を更新されたご夫婦の記事を彼が見つけてきたからです。「私たちが夫婦になって挑戦したら記録が狙える」と思った瞬間、結婚と記録更新のマラソンのスイッチがオンになったのです。

2014年2月23日に行われた「東京マラソン2014」の記録は主人が2時間39分14



秒、私が2時間49分9秒、夫婦合計が5時間28分23秒。見事にギネス記録を更新することができました。東京マラソンのゴール地点には、先にゴールした主人、兄、そしてファーストドリーム ACのエース吉富さんの3人が出迎えてくれました。本当に幸せな瞬間でした。

帰り道にギネスビールを買い、宿泊先で結婚することでかなえられたギネス更新の大きな喜びを二人で祝い乾杯しました。



ウエディングドレス姿でマラソンする筆者



ギネス記録更新の記念写真

## 今後の目標

今私は福岡安全センター(株)健康グループに所属し、福岡大学出身の後輩たちと一緒に福岡大学スポーツ科学部田中宏暁教授の推奨する「にこにこステップ運動スロージョギング®」の普及活動に取り組んでいます。

つえについて教室に参加されていた方が3カ月後にはつえがいなくなり、楽しみにしていた海外旅行にも行けるようになったなど、仕事を通して元気な笑顔にたくさん出会えることに日々感謝しています。

これからも心と体の健康、最近では脳の活性化にまでつながるといわれているニコニコペースの運動を、一人でも多くの方に伝えていきたいと思っています。

夫婦のマラソン生活については、これから生活環境も変わっていくと思いますが、60歳で夫婦そろってサブスリー（3時間以内）を目標に、これからも二人で走り続けていきたいと思っています。

## おわりに

「継続は力なり」と言っても、仕事でもマラソンでも続けていく中でいろいろな壁にぶつかることもあります。そのときは、おいしいコーヒーとマフィンでもいただきながらほっと一息ついてみる、そんな時間も大切にしたいですね。



疲れたときは休息も大事

佐藤 紀子（さとう のりこ）

1980年福岡県生まれ。2005年3月に福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科修士課程修了。2014年2月の「東京マラソン2014」でギネス世界記録（夫婦のマラソン合計タイム）を達成。現在は福岡安全センター(株)で健康グループ主任として勤務。

## 「伝える」と「伝わる」の違い

卒業生 藤吉 洋輔

ネット社会によって、コミュニケーションの方法が大きく変化した。人と人が面と向かって話す機会も減り、コミュニケーションのトラブルもきっと増えたのだろう。近頃、「伝える」に関する書籍をよく書店で見掛けるのも、実際に困っている人がたくさんいることをよく表している。私も多くの書籍を読んだが、結果として大学時代に学んだことが、より良いコミュニケーションのための極意だとあらためて思った。

福岡大学入学時よりマスコミの仕事に憧れていた私は、放送研究部に入部した。放送研究部は、自分たちが制作したラジオドラマと映像作品を学術文化祭・七隈祭と年2回の大きな行事で発表し、大学や地域の行事などで司会をしている。活動は週に4日。行事の前ともなると、ほぼ毎日活動をしている。大学生活の多くの時間を、私は部活動に費やした。放送研究部に入部したことで、多くのことを経験し、また成長できたと思う。



放送研究部の仲間たちと

部活動での私の役割はアナウンスではなく、主に裏方として企画立案や映像の編集であった。そこで4年間、何度も「伝えること」の難しさを痛感した。作品を作る際は、毎回伝えたいことがあってそれが伝わるように制作をしている。見た人、聴いた人に、そのメッセージが伝わって明日からの行動に変化を起こしたい。そう思って、数日徹夜して編集作業をすることが4年間で何度もあった。

しかし、実際は人の心を動かす作品は、すぐにはできなかった。一瞬の笑いは取れても、記憶に残るようなものはできなかった。友人たちがアルバイトでお金を貯めて旅行をするなど大学生活を満喫している中で、毎晩遅くまでパソコンの前で自己満足にすらならない作品を作り続け、「なんて無駄なことをしているのだろう」と卑屈な気分になることもしばしばあった。もちろん、部活動を辞めよ

うと思ったことも数えきれないほどある。

そんな中、偶然 YouTube で見た CM に衝撃を受けた。東京ガスの「家族の絆」という CM だ。その90秒の映像は、私に涙を流させ、家族の絆を考えさせ、「このCMを流している企業はきっと良い会社なのだろう」と思わせた。自分の悩み続けている問題を解決するもの、学ぶべきものは、広告の世界にあると思った。

広告に興味を持ったその頃、運良く広告代理店の方とお話をする機会があり、出版社の株式会社宣伝会議が主催する「コピーライター養成講座」を教えてもらった。この講座では広告業界の第一線で活躍する現役クリエイターが講師となり、その思考のプロセスを教えるだけでなく、実際に自分が考えたアイデアを添削してくれる。まさに自分の求めているスキルを磨く場だと思い、すぐに受講を決めた。

まず、講座の初めに言われたのが「広告は経済活動である」ということ。アートではないので格好良いだけでは駄目で、見た人が商品を買ってくれることがゴールであること。非常にシビアな世界だと感じた。一方で、作家やタレントではない普通の人が、マスメディアを使って日本中にメッセージを発信できるすごさを感じた。例えば、テレビCMにしても、全国ネットで視聴率10%の枠なら単純計算で1,300万人に届く。映画や書籍などでもメッセージは発信できるが、それらはいくまでもエンターテインメントの世界であるのに対し、広告は直接的に実社会と関わっている。ある意味、広告は個人単位で考えれば政治家より頻繁に社会を動かせるのではないだろうか。

半年にわたる講座の中で、特に意識させられたことは「伝える」と「伝わる」の違い。冒頭に書いたように部活動では、とにかく作品を通して自分の主張を「伝えよう」と必死になっていた。そこが大きな間違いであった。

「答えはいつも、相手の中にある」。

ある講師の方が言ったこの言葉が非常に印象的だった。「伝えよう、伝えよう」と、一方的に相手に主張を押し付けていては聞いてもらえない。相手に「伝わる」ようにするためには、相手のしてほしいことをとにかく想像して、相手がうれしくなって心が動くようなアイデアを考える。相手が望んでいることと、自分の伝えたいこととの共通点を見つければ「伝わる」言葉が出てくる。この話を聞いてからは、作品を作る際は自分の気持ちをそのまま形にするのではなく、必ず誰か一人を想像して、その人の立場に立って考えるようにした。これを意識するだけ

で大きく作品の質が変化した。それからは、考えれば考えるほど良い作品ができるようになった。

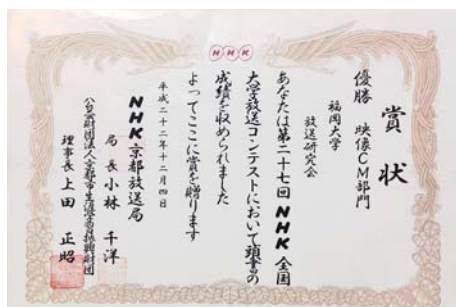
ちょうどこの頃、大学内だけの活動がほとんどであった放送研究部が、もっと外部に出て行こうという方針に変わってきた。それに伴う活動の一つが「NHK 全国大学放送コンテスト」への出品だ。このコンテストはその名の通り全国の大学にある放送系団体が、各部門のテーマに沿った作品を制作し優秀作品を選出するという大会である。これまでも面識



作品制作活動の様子

のある九州内の大学間で同じような活動をしていたが、活動はその程度にとどまっていた。その理由の一つが、どこの大学も同じぐらいの人数規模と施設や機材環境の中で活動をしていたからだ。ある関東の大学だと、部員が100人を優に超えていたり、テレビ局のようなスタジオや映像機器を使っていたりと、家庭用ビデオカメラで作品を作っている私たちとは次元が違い、一緒に作品が並ぶと自信をなくすと思っていた。いざコンテストに出品して、私たちの作品は確かに他の大学に比べて映像はきれいではないし、CGを使うような高度な映像技術もない。ただ、誰よりも見る相手のことを考えて作り、「相手に伝わる作品ができた」という自負があった。結果として、映像CM部門で最優秀賞を頂いた。これをきっかけに、多くの場で放送研究部にお声が掛かるようになり、一気に活動の幅が広がっただけでなく、部員も増えて映像の質も高まった。

この「伝わる」の技術は、部活動にとどまらず、就職活動の際にもそのまま応用でき、就職氷河期といわれた中でも多くの企業から内定を頂いた。エントリーシートを書くにしても、面接を受けるにしても、常に相手の欲することと自分の伝えたい



「NHK 全国大学放送コンテスト」で受け取った賞状

こととの共通点をとにかかく考えた。

そして今、私はこの技術を知るきっかけとなったコピーライター養成講座の運営担当をしている。2014年も全国でこの講座に広告会社のクリエイターはもちろん、ありとあらゆる業態業種の会社に勤める社会人、学生や主婦まで1,000人近い方々に受講していただいた。

この技術を多くの人に知ってもらうことで、コミュニケーションの質が上がり、きっと社会がより良くなると私は信じてやまない。



コピーライター養成講座の講義の様子

藤吉 洋輔 (ふじよし ようすけ)  
 1988年佐賀県生まれ。福岡大学商学部経営学科を2012年3月に卒業。在学中の2010年に「第27回 NHK 全国大学放送コンテスト」の映像CM部門で優勝。現在は株式会社宣伝会議に勤務。九州では年間30講座ほど開催している教育講座の企画運営をメインに、中四国・九州・沖縄エリアの営業、取材を担当。

## 懐かしさに隠れた真実

福岡大学附属大濠高等学校 2年生 吉年 由加里

私は2014年8月にオーストラリアでホームステイをしました。この文章を書くに当たってそれを思い起こしているわけですが、強い「懐かしさ」を感じていません。

私はホームステイ中の平日に、現地の学校で授業を受けていました。主にオーストラリアの歴史や地理について学習しましたが、それ以外に現地の学生（いわゆるバディ）とペアで他の授業にも出席しました。現地の学校の授業は選択制で、一つの授業が終わるごとに次の教室へ移動するシステムでした。そのため授業中や移動時間の際、私のバディはたくさん私に話し掛けてくれました。気を使って普段より少しゆっくり話してくれたのである程度のことは聞き取ることができましたが、いざ自分が話す番になると、思うように英語が出てきませんでした。私は「どうにでもなれ」と思い、試しにジェスチャーを使ってみると、意外にも相手に伝わったらしく、相手が笑顔になったのを見てうれしかったことを今でも覚えています。

また、帰国する日の少し前に、バディとホストファミリーにお世話になった感謝の気持ちを伝えるために、それぞれに手紙を書きました。日本語で書くのは簡単ですが、英語でなければ相手には伝わらないので、できるだけ間違いのないよう何度も辞書を引いて単語を調べました。手紙を渡した時、どんな反応をされるのか心配でしたが、バディもホストファミリーも「Thank you」と笑顔で私に言ってくれたことがとても印象に残りました。

この時の出来事を振り返ると、なぜか私は急に懐かしい気持ちになりました。それは、回想で感じる単なる「懐かしさ」とは異質のものです。ジェスチャーや手紙など、普段あまり使わない方法で相手に必死に自分の思いを伝えようとしたのは、果たして、どれくらいぶりだったのだろうか、と。

私たちの世代から、世の中では急速にインターネットやスマートフォンなどでの交流の機会が増えてきました。特にスマートフォンではLINEやTwitterなどで、今まで以上にいつでもどこでも不特定多数の人たちと話す機会が増えてきました。これらの機能を利用している人は徐々に多くなり、むしろ利用していない

人の割合は減少してきていると言っても過言ではないと思います。先にも述べたように、これらの機能には、いつでもどこでも不特定多数の人と話ことができ、電話などを利用せずとも話を容易かつスムーズに進めることができるという利点があります。



バディと最後のお別れパーティーにて

しかし、私はこれらの機能の登場によって、人間関係が今までよりも複雑になったと思います。友達との会話も携帯のみのやりとりとなると、多少の誤解が生じ、一つ一つの言葉に送り手がどのような思いを込めたのかを受け取り手も考えなければならなくなりました。また、自分の知らないところで自分の悪口を言われているかもしれないという不安に駆られたり、根も葉もないうわさが広まったことが原因で心に傷を負ったりということも起こってきています。そして、相手の発言に対して自分がどう振る舞えば、人から何も文句を言われずに済むのかと考えたりするなど、他人の言動に左右されることが増えています。

私が今回「伝えること」について考えるきっかけとなったのは、ホームステイで全く言語の違う世界を経験したことにありましたが、相手に必死に自分の思いを伝えようとする姿勢はどこへ行こうとも大切なはずですが、それが本来的なコミュニケーションであるからこそ、私はある種の懐かしさを覚えているのです。今を生きる私たちは、ネット世界という大きな存在に己の存在意義を脅かされていると思います。科学技術の発展によって生まれた産物を大切にすることも必要ですが、その産物に依存し過ぎることなく人と人が向かい合っコミュニケーションを取ることを大事にしながら、私たちは生きていくべきではないでしょうか。

吉年 由加里（よどし ゆかり）

1997年生まれ。福岡大学附属大濠高等学校2年生。2013年8月にカナダ、2014年8月にオーストラリアにホームステイ。

## 拝啓 未来の自分

福岡大学附属若葉高等学校 1年生 細野 磨希

こんにちは、未来の私。今日は、未来の自分に伝えたいことがあるので、ここに記します。

初めに、未来の私には夢がありますか？ 今の私は、まだ夢を見つけられないまま、途方に暮れています。夢がない今の私は、進む道が分からず、足元がおぼつかないまま毎日を過ごしています。もしかしたら、早く夢を見つけなければと焦っている自分もいるのかもしれませんが。今の私にとって、何気ない日々の中で自分の夢を探すことが、生きる意味なのだと思っています。未来の私には、夢があって、生き生きとした毎日を送ってほしいなと思います。

そういえば、未来の私は、もう「本気」を知っていますか？ 「本気」が分からなくて困っていた過去の自分を振り返って、微笑むようなことがありますか？

「本気」って難しいですね。人として、勉強や運動、恋愛など、何かしらに「本気」になっていても良いと思います。ですが、今の私は、何かに本気になろうと必死です。おかしな話ですよ。本気が何なのか、本気になった自分がどのようなものであるか、気になって仕方がないのです。本気になった場面も知りたいです。勉強か、運動か、人間関係か。今の私が「本気」になれないのは、ただ、私が怖がりなだけなのかもしれません。本気になって出た結果に傷つくことが怖いのかもしれません。本気になるということは、必死で生命の炎を燃やしているということ。今の私には、まだ理解することができない感覚。他人事のようですが、未来の私には、何かに必死になるということを知っていてほしいと思います。

次に、昔から変わらない癖の話をしたと思います。今の私には「考え過ぎる」という癖があります。この癖が良いものか悪いものか判断することは、今の私にはまだ難しいことです。というのも、この癖にはわれながらよく振り回されているからです。

例えば、何か日常生活の中で問題に直面したとき、この癖のせいでよく考え込んでしまいます。そして、考えて考えて、結局行動することができずに、その問題が日常に流されてしまうことがあります。しかし一方で、この癖には良い面もあります。例えば、ある物事についてよく考えるということは、一つの物事に対

して、いろいろな角度からアプローチすることであり、それにより深く理解できるということです。一つの物事に対していろいろと考えたりすることは、私にとって有意義な時間です。そして、よく考えることは、自己分析や自己理解にもつながっていきます。新しい自分の一面に出会う瞬間は、とてもわくわくします。

未来の私には、まだこの癖が残っていますか？ それとも、もうこの癖はなくなってしまいましたか？ 今の私と今までの私が、この癖によってたくさん悩んだことや悩んで出した答えが、未来の私の役に立てていれば良いなと思っています。たくさん考えて悩んだ多くの時間が、無駄ではなかったと、そう思っていることを願います。

ところで、未来の私には親友がいますか？ 今の私には、親友がいます。今の私の親友が、未来の私とも親友でいてくれれば良いなと思っています。高校1年生である今の私は『赤毛のアン』というお話がとても好きです。『赤毛のアン』のお話の中では、主人公のアンが、親友のことを「腹心の友」と表現しています。腹心とは、心から信頼できることであり、またそのような人、という意味があります。今の私の親友と未来でも親友であるならば、それは真に腹心の友であるといえるのかもしれません。それと同時に、私が誰かを大切にできたという証にもなります。そういう未来を思って今を生きるということも、素敵なことですよ。どんなことがあっても、友達を大切にしてください。

未来の私の家族関係はどうなのでしょう？ やはり年を重ねるごとに、家族に対する意識にも変化が表れるものですか？ 今の私は、まだ両親には反抗してばかりで姉妹での喧嘩も絶えません。ですが、私は父のことも母のことも尊敬しています。特に父は、私の人格の形成に強く影響を及ぼしているのではないかと思います。母は、いつも家の中で忙しく働いている印象があります。分かっている、なかなか手伝えることができずにいる今の私。難しい年頃の娘を持つ母はいろいろ大変でしょうし、苦痛だと感じていることもたくさんあると思います。未来の私は、そのことをどのように思っていますか？ 感謝の気持ちはあると思いますが、後悔はしていませんか？ あの時あれを手伝ってれば、あの時こういう風に声を掛けていればと、過去を省みることがありますか？ それは、今の私でも思うことがあるので、未来の私の後悔というのは、大きなものかもしれません。全てにおいて悔いの残らない選択というのは、とても難しいことだと思います。ですが、後悔を小さくすることは可能です。私は、未来の私のためにも、

悔いの残らないような選択・行動をしていきたいと思います。そして全ての時間の私に、家族を大切にしようという思いを伝えたいです。

今は父とも母とも、姉とも妹とも多くの対立があります。それでも、家族が日頃から大きな支えになっていることに、薄々気付いている自分も、きっといるはずだと思っています。そしてそれは、未来の私にもいえることだと思います。あまり強がって家族を突き放してしまわないでください。人生はとても長い時間で憂鬱だと、今の私は思っていますが、生き物の生命の時間が尊いことも理解しているつもりです。その大切な時間を、1分1秒、かみしめながら、人生を全うしてほしいと思います。

私は未来の私に伝えたいと思っていたことを上手く伝えきれていますか？ 未来に自分が存在するかどうかなんて、誰にも分かりません。できることならば、未来の自分に直接会って、いろいろなことを話したいです。自分がどのような選択をして、どのような思いで日々を過ごしたのか、知りたいです。まだ私と同じ高校生には、道に迷って右往左往している人が多いのではないかと思います。未来を思い、期待を膨らませる人もいれば、不確かな未来に少なからず不安を覚えている人もいるでしょう。ですが、どんな気持ちを抱えていても、「人」に流れる時間の長さは皆平等です。そして、10代で過ごす「時」は、未来の自分に大なり小なり影響を及ぼします。だから、当たり前にある毎日を当たり前で過ごすのではなく、当たり前の中に何かを見つけ、その何かに一喜一憂することが大切なのではないかと思っています。

近い将来、この手紙を読んだときに、気持ちは伝わったよ、自分なりに精一杯生きているよと、胸を張って言えるように、今この時を過ごしたいと思います。見ててね、未来の私。

細野 磨希 (ほその まき)  
1998年生まれ。福岡大学附属若葉高等学校1年生。



## 福岡大学所蔵美術名作展

福岡大学は、2014（平成26）年5月に創立80周年を迎えました。中央図書館も2012（平成24）年7月にリニューアルオープンして2周年を迎えました。これを記念して2014（平成26）年11月10日(月)から30日(日)までの間、中央図書館を会場として福岡大学所蔵美術名作展を開催しました。期間中は福岡大学が所蔵する約150点の美術品の中から、洋画、日本画、工芸、彫刻など44点を展示しましたので、その概要の記録、および出品目録を紹介します。

展覧会名称：福岡大学創立80周年記念・福岡大学中央図書館開館2周年記念  
福岡大学所蔵美術名作展

期 間：2014年11月10日(月)～30日(日)

会 場：福岡大学中央図書館1階多目的ホール

主 催：福岡大学

入場者：1,210人

展覧会企画・出品目録編集：植野健造（福岡大学人文学部教授）

補 佐：博物館学芸員課程実習学生（美術コース）

人文学部文化学科：田中里佳、溝口幸恵、田崎優里、水野真由

人文学部歴史学科：西村亜里紗、池田奏子、河野真希、平井水咲子

備 考：会期中の11月14日(金)、21日(金)、28日(金) 12：20～12：50に博物館学芸員課程の実習学生（美術コース）によるギャラリートークを行いました（参加者は各回とも20人）。

【出品目録】

■西洋絵画



- 1 マルク・シャガール ダンの民  
 Marc, CHAGALL People of Dan  
 Witebsk, Republic of Belarus, 1887-Saint-Paul-de-Vence, France, 1985  
 リトグラフ・紙、額装（アクリル入り）  
 画面部 61.4×46.0cm  
 紙 測定できず。  
 右下：Marc Chagall  
 紙右下：Marc Chagall  
 額裏面板貼紙：シャガール エルサレムのための7／ダンの民／リトグラフ／L X I I / L X X V / 930 - 7 / 株式会社 インターコンチネンタルアート



- 2 ベルナル・ビュッフェ 風景  
 Bernard, BUFFET Landscape  
 Paris, 1928-Paris, 1999  
 1976年  
 水彩・紙、額装（ガラス入り）  
 49.0×64.0cm  
 左上：Bernard Buffet  
 右上：1976



- 3 ベルナル・ビュッフェ エスカミリオ  
 Bernard, BUFFET Escamilleo  
 Paris, 1928-Paris, 1999  
 1967年  
 リトグラフ・紙、額装（アクリル入り）  
 102.0×67.3cm  
 左上：Bernard Buffet / 67  
 右下：E. 31 / 50

■日本洋画



- 4 黒田重太郎 夏の花  
 明治20・滋賀県大津市-昭和45・京都市  
 KURODA, Jutaro (1887-1970) Flower of Summer  
 1955年  
 油彩・カンヴァス、額装（ガラス入り）  
 33.7×53.4cm 10号 M  
 右下：J. Kuroda 55  
 画裏面貼紙：夏の花の習作／昭和三十年八月／□□□□荘□／黒田重太郎 「？」(朱字変形印)



- 5 安井曾太郎 風景  
 明治21・京都市-昭和30・神奈川県湯河原町  
 YASUI, Sotaro (1888-1955) Landscape  
 1911年  
 油彩・カンヴァス、額装（ガラス入り）  
 50.2×60.5cm 12号 F  
 左下：1911  
 裏面裏打ち板：「安井曾太郎画室之印 No.」(朱字印) 30.



- 6 梅原龍三郎 石榴梨図  
 明治21・京都-昭和61・東京  
 UMEHARA, Ryuzaburo (1888-1986) Pomegranate and Pear  
 1948年  
 水彩・紙、額装（ガラス入り）  
 23.5×32.7cm  
 左下：「梅原」(白字朱方印)  
 桐箱差し蓋表：石榴梨図  
 桐箱差し蓋裏：昭和二十三年 梅原龍三郎写「梅原」(白字朱方印)



- 7 梅原龍三郎 富士山  
 明治21・京都-昭和61・東京  
 UMEHARA, Ryuzaburo (1888-1986) Mt. Fuji  
 1964年  
 パステル・紙、額装（ガラス入り）  
 19.8×27.5cm  
 左下：le 8 mars 1964 / 「龍」(白字朱方印)  
 額裏面板貼紙：「富士図」一九六四年三月／梅原龍三郎 / 「？」(白字朱方印)



- 8 岸田劉生 村嬢図  
 明治24・東京-昭和4・山口県周南市  
 KISHIDA, Ryusei (1891-1929) Village Girl  
 1922年  
 着色・紙、額装 (アクリル入り)  
 138.4×34.5cm  
 右上：引首印 (白字朱長方印) 二行の讀文 壬戌九月 劉生口人画並題 「劉生」 (朱字方印)  
 額裏面板貼紙：村嬢図 岸田劉生筆



- 11 牛島憲之 朝凪  
 明治33・熊本市-平成9・東京  
 USHIJIMA Noriyuki (1900-1997) Morning Calm  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 24.5×41.0cm 6号M  
 右下：ushi.  
 画裏面左：「朝凪」/牛島憲之



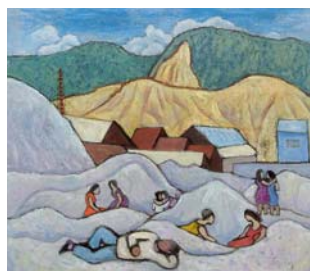
- 12 野間仁根 薔薇  
 明治34・愛媛県今治市-昭和54・東京  
 NOMA, Hitone (1901-1979) Rose  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 27.4×22.1cm 3号F  
 右下：Noma/Hitone  
 画裏面木枠：薔薇 野間仁根/Noma Hitone



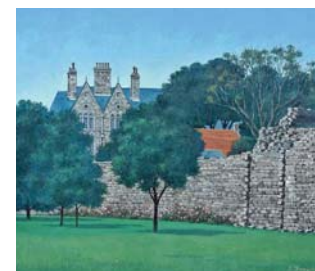
- 9 鈴木千久馬 ばら  
 明治27・福井市-昭和55・東京  
 SUZUKI, Chikuma (1894-1980) Rose  
 1956年  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 45.8×38.2cm 8号F  
 右下：56/CHIKUMA  
 画裏面貼紙：「鈴木千久馬の履歴書」



- 13 中畑艸人 樹のある牧場  
 明治45 (大正元)・和歌山市-平成11・?  
 NAKAHATA, Sojin (1912-1999) Pasture with Tree  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 41.0×53.3cm 10号P  
 右下：Sojin NAK  
 画裏面木枠：樹のある牧場 中畑艸人



- 10 北川民次 風景  
 明治27・静岡県島田市-昭和64 (平成元)・愛知県瀬戸市  
 KITAGAWA, Tamiji (1894-1989) Landscape  
 1965年  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 45.6×53.5cm 10号F  
 右下：Tamiji  
 画裏面：陶土の丘 (瀬戸風景)/1965 北川民次



- 14 藤飯治平 スコットランドの古い家  
 昭和3・西宮市-平成17・宝塚市  
 FUJII, Chihei (1928-2005) Old House in Scotland  
 1980年  
 油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
 45.6×53.2cm 10号F  
 右下：T.Foujih  
 画裏面右：スコットランドの古い家/1980/藤飯治平  
 額裏面板貼紙：NO.7163 藤飯治平 スコットランドの古い家 10





- 15 塗師祥一郎 雪後の川辺  
昭和7・石川県－  
NUSHI, Shoichiro (1932－) Riverside after  
Snowfall  
油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)45.5×53.0  
cm 10号F  
左下：Shoichiro. Nushi  
画裏面左：雪後の川辺／塗師祥一郎



- 19 中村琢二 西伊豆の漁村  
明治30・佐渡市－昭和63・横浜市  
NAKAMURA, Takuji (1897－1988) Fishing  
Village in West Izu  
油彩・カンヴァス、額装(アクリル入り)  
116.7×90.9cm 50号F  
右下：琢  
画裏面右上：西伊豆の漁村  
画裏面右下：中村琢二／④(チョーク書き)



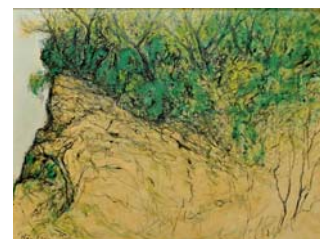
- 16 高田保雄 肥後椿  
昭和2・横浜市－  
TAKADA, Yasuo (1927－) Higo Camellia  
油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
53.0×45.8cm 10号F  
右下：保雄  
画裏面：窓辺の椿／高田保雄



- 20 中村琢二 駒ヶ根(桃花)  
明治30・佐渡市－昭和63・横浜市  
NAKAMURA, Takuji (1897－1988) Peach Blossom, Komagane  
油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
38.0×45.5cm 8号F  
左下：Takuji  
裏面中央木枠：駒ヶ根(南信) 中村琢二



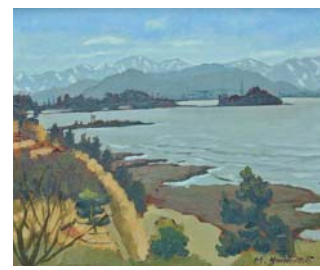
- 17 山本文彦 少年(ポチャ)  
昭和12・東京－  
YAMAMOTO, Fumihiko (1937－) Boy, Pocha  
1977年  
油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
45.7×53.0cm 10号F  
右下：FYa.  
画裏面右：ぼちゃ／一九七七年四月／山本文彦  
裏面中央木枠：JO-3009



- 21 伊藤研之 崖の上の樹  
明治40・福岡市－昭和53・福岡市  
ITO, Kenshi (1907－1978) Tree on a Cliff  
1969年  
油彩・カンヴァス、額装(グレーディングなし)  
97.5×130.5cm 60号F  
左下：Ken Itoh  
裏面木枠貼紙：1969.5. フォルム画廊個展／崖の上の樹 60F/Ken. Itoh



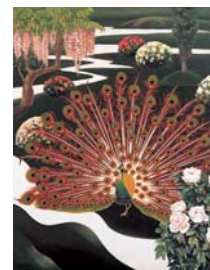
- 18 児島善三郎 椿  
明治26・福岡市－昭和37・千葉市  
KOJIMA, Zenzaburo (1893－1962) Camellia  
1951年頃  
油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
40.8×31.7cm 6号F  
左下：Z.Z.Kojima  
画裏面右：椿 児島善三郎／五十八才作



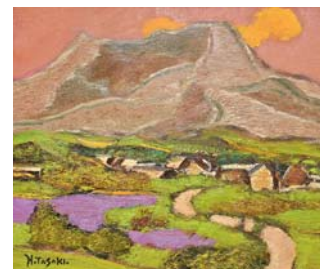
- 22 山本政喜 香椎より博多湾を望む  
？－？  
YAMAMOTO, Masaki (?－?) Hakata Bay  
viewed from Kashii  
1963年  
油彩・カンヴァス、額装(グレーディングなし)  
38.0×45.2cm 8号F  
右下：M.Yamamoto  
画裏面右：香椎より／博多湾を望む／昭和三十八年三月／山本政喜



- 23 山田栄二 黄昏のカーニュシユルメル  
 明治45(大正元)・福岡市-昭和60・福岡市  
 YAMADA, Eiji (1912-1985) Cagnes-sur-Mer  
 in twilight  
 1957年  
 油彩・カンヴァス、額装(アクリル入り)  
 97.5×162.3cm 100号M  
 右下: Eiji  
 画裏面: 「黄昏のカーニユ・シユールメル」/  
 山田栄二作  
 画裏面貼紙: 今日の新人 57年展出品(100号)  
 / 「黄昏のカーニユ・シユールメル」/  
 山田栄二/三鷹市牟礼二三〇/電022 六二八五  
 画裏面貼紙: 主催・朝日新聞 今日の新人  
 '57年展 11月5日(火)→10日(日)・6階催物場/白  
 木屋



- 26 古賀春江 孔雀  
 明治28・久留米市-昭和8・東京  
 KOGA, Harue (1895-1933) Peacock  
 1932年  
 油彩・カンヴァス  
 145.4×112.0cm 80号F、額装(アクリル入り)  
 左下: HARUE KOGA



- 27 田崎廣助 浅間山  
 明治22・八女市-昭和59・東京  
 TASAKI Hirotsuke (1898-1984) Mt.Asama  
 油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
 38.2×45.5cm 8号F  
 左下: H.Tasaki.  
 裏面木枠: 浅間山 8号 田崎広助  
 備考: 台帳には「阿蘇」と記されるが、裏面木枠  
 書き込みより「浅間山」か。



- 24 樋口治平 凪  
 大正11・福岡市-平成6・?  
 HIGUCHI, Jihei (1922-1994) Calm  
 1977年  
 油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
 24.7×33.6cm 4号F  
 右下: J. Higuchi  
 画裏面: 「凪」/樋口治平  
 額裏面板貼紙: FUJI INTERNATIONAL ART/  
 樋口治平/凪 油彩/4F/1977



- 28 坂宗一 仔馬追ひ  
 明治35・久留米市-平成2・筑後市  
 SAKA, Soichi (1902-1990) Driving Pony  
 1960年  
 油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
 77.5×65.5cm 25号F  
 右下: 坂  
 画裏面貼紙: 仔馬追ひ/一九六〇/坂宗一  
 「坂」(朱字長円印)  
 裏面木枠: 仔馬追ひ



- 25 手島貢 ベニス風景  
 明治33・久留米市-昭和49・福岡市  
 TEJIMA Mitugu (1900-1974) Landscape in Ve-  
 netia  
 油彩・カンヴァス、額装(アクリル入り)  
 97.5×130.5cm 60号F  
 左上: M Tejima  
 画裏面上: ベニス風景/手島貢  
 額裏面板: ベニス風景/手島貢



- 29 藤田吉香 いちはつ  
 昭和4・久留米市-平成11年・横浜市  
 FUJITA, Yoshika (1929-1999) Iris  
 1971年  
 油彩・カンヴァス、額装(ガラス入り)  
 33.4×18.5cm 4号M  
 右下: YF  
 裏面木枠: 鳶尾いち はつ/昭和辛亥 藤田吉香  
 額裏面板貼紙: いちはつ/昭和辛亥/藤田吉香  
 「吉香」(朱字円印)



- 30 松本英一郎 河川敷の風景  
昭和7・久留米市-平成13・八王子市  
MATSUMOTO, Eichiro (1932-2001) Land-  
scape along a river  
1983年  
油彩・カンヴァス、額装 (グレージングなし)  
72.5×91.0cm 30号F  
右下:ま  
画裏面左:河川敷風景/一九八三年 盛夏 松本  
英一郎



- 31 樋口善造 バードゾーデンアレンドルフ  
昭和6・八女市-  
HIGUCHI, Zenzo (1931- )  
BAD SOODEN ALLENDORF  
1985年  
油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
45.5×53.0cm 10号F  
右下: Z. Higuchi.  
画裏面右: BAD SOODEN-/-ALLENDORF/  
1985/Zenzo Higuchi  
額裏面板貼紙: バードゾーデン/アレンドルフ/  
(西ドイツメルヘン街道) /一九八五年 油絵十  
号/樋口善造 「善」(白字朱方印)



- 32 織田廣喜 少女  
大正3・福岡県嘉麻市-平成24年・東京  
ODA Hiroki (1914-2012) Girl  
油彩・カンヴァス、額装 (ガラス入り)  
33.3×24.7cm 4号F  
左下: HIROKI/ODA  
画裏面: 少女/織田広喜



- 33 野見山暁治 卑弥呼の国  
大正9・飯塚市-  
NOMIYAMA, Gyoji (1920- )  
Land of Queen Himiko  
1986年  
油彩・カンヴァス、額装 (グレージ-  
ングなし)  
149.5×553.3cm (149.5×184.3cm×  
3枚)  
右下: 1986/nomiyama



■日本画

- 34 寺司勝次郎 荒城の月  
昭和2・大分市-  
TERASHI Katsujiro (1927- ) Moon at a Ru-  
ined Castel  
1982年  
多色木版・紙、額装 (ガラス入り)  
画面 33.5×24.5cm  
紙 43.4×34.3cm  
画面下: 「荒城の月」竹田 '82 30/50  
Katsujiro Terashi 「寺司」(白字朱方印)  
額裏面板貼紙: 日版会々員 白日会々員 寺司勝  
次郎 (略)



- 35 岩橋英遠 菜果  
明治36・北海道滝川市-平成11・東京  
IWAHASHI, Eien (1903-1999) Vegetable and  
Fruit  
着色・紙、額装 (ガラス入り)  
46.0×66.7cm  
右下: 英遠 「英遠」(朱字方印)  
額裏面板貼紙: 菜果 英遠 「英遠」(朱字方印)



- 36 岩橋英遠 紅梅  
明治36・北海道滝川市-平成11・東京  
IWAHASHI, Eien (1903-1999) Red Ume Bloss-  
som  
着色・紙、額装 (ガラス入り)  
画面 32.0×40.8cm  
紙 34.5×42.0cm  
左下: 英遠 「英」(白字朱方印)  
画裏面板貼紙: 紅梅/英遠 「英遠」(白字朱方印)



- 37 後藤純男 雪の越前海岸  
昭和5・千葉県野田市－  
GOTO, Sumio (1930－) Snowfall of Seashore  
in Echizen  
着色・紙、額装（ガラス入り）  
41.0×53.0cm  
右下：純男 「純男」（白字朱方印）  
画裏面板貼紙：冬の越前海岸／純男 「純男」（白  
字朱方印）



- 38 小林恒火子 かすみの中の桂林の山々  
大正5・古賀市－  
KOBAYASHI, Tunehiko (1916－) Mountains  
of beautiful woods in Mist  
着色・カンヴァス、額装（ガラス入り）  
31.6×40.5cm  
右下：かすみの中の桂林の山々／恒火子 「恒火  
子」（書き印）



- 39 小山硬 春雪富士  
昭和9・熊本県－  
OYAMA, Katashi (1934－) Mt. Fuji in Spring  
Snow  
着色・絹、額装（アクリル入り）  
63.0×87.5cm  
右下：「硬」（朱字方印）  
額裏面板貼紙：春雪富士／小山硬 「硬」（朱字  
方印）



- 40 中島千波 富貴花  
昭和20・長野県小布施町－  
NAKAJIMA, Chinami (1945－) Flower of  
Rich and Noble  
着色・紙、額装（アクリル入り）  
93.3×63.0cm  
左下：千波 「千」「波」（朱字円印）  
額裏面板貼紙：富貴花／中島千波 「千」「波」  
（朱字円印）

■陶器



- 41 高鶴元 ケンブリッジの星  
昭和13・福岡県词智町－  
KOZURU, Gen (1938－) Star at Cambridge  
陶器  
高さ 42.0cm 径 28.0cm  
桐箱蓋表：ケンブリッジの星／元 「元」（朱字  
方印）



- 42 田中昭三 壺  
？－？  
TANAKA, Shozo (？－？) Jar  
陶器  
高さ 20.2cm 径 30.5cm

■彫刻



- 43 北村西望 夢  
明治17・南島原市－昭和62・東京  
KITAMURA, Seibo (1884－1987) Dream  
1970年  
ブロンズ  
（台座含む）高さ 60.0cm 幅 78.0cm  
奥行 48.0cm  
彫刻台 高さ 100.0cm 幅 82.0cm  
奥行 53.5cm  
彫刻台銘：夢／YUME 1970／北村西望／  
KITAMURA SEIBO 1884



- 44 安永良徳 母子像  
明治35・横浜市－昭和45・福岡市  
YASUNAGA, Yoshoniri (1902－1970)  
Mother and Child  
ブロンズ  
高さ 83.8cm 幅 51.0cm 奥行 42.5cm  
台（下）木製 53.0×53.0×高さ78.5cm  
台（上）石製 45.0×45.0×高さ20.5cm

原稿執筆・データ提供：人文学部教授 植野健造

### 大学基準協会の定める「大学基準」に「適合」

学校教育法により、大学はその教育研究水準の向上に資するため、教育研究、組織運営および施設設備の総合的な状況に関し、7年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関（認証評価機関）の実施する評価を受けることが義務付けられています。

そこで、本学は、2007（平成19）年度に実施した自己点検・評価活動に基づき、平成20年度に大学基準協会による大学評価ならびに認証評価を受け、平成21年3月12日付で同協会の定める「大学基準」に「適合」していると認定されました。認定期間は2009（平成21）年4月から2016（平成28）年3月までとなります。

本学は、認定とともに受けた助言（26項目）・勧告（1項目）事項に対する改善を行い、平成24年7月末日に同協会へ「大学基準協会大学評価結果に対する改善報告書」を提出しました。

※『福岡大学の現状と課題（2007年）—福岡大学自己点検・評価報告書—』ならびに「福岡大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果」については、本学公式ホームページに掲載しています。

## 福岡大学校歌

作詞/狩野 満 作曲/飯田 信夫 編曲/平井 哲三郎

ちくしのーはーげーんかいのしお ざいはるか せ ぶりね  
 とーとときーはーもーゆるひのあつ きいのちかけ いせい  
 ゆかしきーはーじーゆうなるがく のほこりか ゆうじょう

をーゆび さすとこ ろーう つくーしーきーわれ  
 のーはた かざしつ つーた くーまーしーきーわれ  
 のーわか くさもえ てーた とーうーべー

ら がぼこーう われ ら がりそーう みちこそは け  
 ら がぼこーう われ ら がほーう ふい ゆめこそは お  
 ら がぼこーう われ ら がしめ ときこそは や

わしかれ ひ と らし きーひと にある べ くーか  
 おいなれ あ た らし きーつこ ふ みしめ てーは  
 がてゆけ う つ ろわ ぬーまこ とをむね にーつ

が や け る あ す をのぞみて わ かーきーひーのーきよ  
 な ち ろ う は る に は よ わ じ たーかーなーあ  
 ど い あ う きょう を う た わ ん ひ らーけーゆーくーあ

うをまなば ん  
 きをいのら ん  
 すをうたわ ん

一、筑紫野は  
 玄海の汐ざいはるか  
 背振ねを指さすところ  
 うつくしきわれらが母校  
 道こそはけわしけれ  
 人らしき人にあるべく  
 輝ける明日を望みて  
 若き日の今日を学ばん

二、とうときは  
 もゆる火の熱きいのちか  
 経世の旗かざしつ  
 たくましきわれらが母校  
 夢こそは大いなる  
 あたらしき土ふみしめて  
 花散らう春には酔わじ  
 ゆたかなる秋を祈らん

三、ゆかしきは  
 自由なる学のほこりか  
 友情の若草もえて  
 讃うべきわれらが母校  
 時こそはやがて逝け  
 つつろわぬ誠を胸に  
 うつらあう今日を歌わん  
 ひらけゆく明日を歌わん

情報発信

福岡大学  
公式ウェブサイト



福岡大学公式ウェブサイトでは、ステークホルダーに向けて、日々最新情報を発信しています。サイトには新着情報収集機能（RSS）を備えており、発信情報をリアルタイムで確認することができます。スマートフォンにも対応しています。  
<http://www.fukuoka-u.ac.jp/>

大学案内



受験生およびその保護者、さらに高校教師を対象に作成している広報誌です。大学の概要や入試情報を掲載し、年に1回発行しています。  
 (A 4判約230ページ)

学園通信



大学の現況や学生の活躍、医療活動などを掲載した広報誌です。年4回（4月、6月、10月、1月）発行。在学生だけでなく、保護者の皆さま、地域の皆さまなど広くご覧いただいています。  
 (A 4判44ページ)

大学要覧



広く一般の方を対象に作成している広報誌です。大学全体の概要を分かりやすくコンパクトにまとめ、本学の財務状況など各種数値データも掲載しています。  
 (A 5判約86ページ)

『七隈の杜』 第11号  
 福岡大学創立70周年記念事業誌  
 2015（平成27）年2月9日発行  
 編集 福岡大学広報課  
 発行 福岡大学  
 福岡市城南区七隈八丁目19番1号  
 TEL 092-871-6631（代）  
[fupr@adm.fukuoka-u.ac.jp](mailto:fupr@adm.fukuoka-u.ac.jp)  
<http://www.fukuoka-u.ac.jp>

『七隈の杜』に対するご感想、ご意見をお寄せください。